

俺、ツインテールになります。14
水沢夢
[イラスト]春日歩
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。14

水沢　夢

イラスト　春日　歩


俺、ツインテールになります。14
水沢夢
[イラスト]春日歩

CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


桜川 尊
観束総二
トゥアール
津辺愛香
結翼唯乃
神堂慧理那
イースナ


トゥアール。
君は……自分の心を信じてくれ。
誰にも否定させはしない!!

目次

俺、ツインテールになります。14

水沢夢
［イラスト］春日歩

人物紹介

観束総二（みつかそうじ）
主人公。
ツインテールを世界一愛する高校一年生。
テイルレッドに変身しエレメリアンと戦う。

トゥアール
異世界からやってきた美少女科学者。
総二たちにテイルギアを託す。
痴女。

津辺愛香（つべあいか）
総二の幼馴染。テイルブルーに変身する。
貧乳を気にしており、ネタにされると激しく怒る。

神堂慧理那（しんどうえりな）
総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。
ドMで総二をご主人様と慕う。

桜川 尊（さくらがわ みこと）
慧理那の専属メイド兼ボディガード。
婚期を焦っており、
必死に婚姻届を配っている。

イースナ
善沙闇子（いいすなあんこ）の名で活動するアイドル。
テイルブラックに変身。
普段はストーカーで引きこもり。

観束未春（みつかみはる）
総二の母親で、自宅で喫茶店を経営する。
現役中二病患者で、
常連客に慕われている。

結翼唯乃（いわばねゆの）
フェニックスギルディが
ポニーテールの少女となった姿。
圧倒的な戦闘力を誇る。

俺、ツインテールになります。

13巻までのあらすじ

人間の趣味嗜好などが結晶化した精神エネルギー・属性力を狙う異世界の組織・アルティメギル。その組織に属する怪人・エレメリアンたちから世界の平和を守るべく、ツインテールへの愛・ツインテール属性を核に作られた空想装甲「テイルギア」をまとって戦う観束総二たち、ツインテイルズの戦いは続く。

復活エレメリアン軍団に大苦戦するツインテイルズ。しかし、それぞれの心の力で立ち上がり、戦局を逆転。最後には心無き怪魔・ホロウエレメリアンたちが無数に溢れ出すが、かつての強敵たちと力を合わせて撃破。見事、世界を守り抜いたのだった。

アルティメギル組織図

各異世界の侵攻部隊



ドラグギルディ部隊

隊長：ドラグギルディ

隊員：スワンギルディ、スパロウギルディなど

総二たちの世界に初めて侵攻してきた部隊。

- リヴァイアギルディ部隊　隊長：リヴァイアギルディ
- クラーケギルディ部隊　隊長：クラーケギルディ
- タイガギルディ部隊　隊長：タイガギルディ

ドラグギルディが倒されたことで侵攻部隊に増援された各部隊。
いずれも現在までに隊長がツインテイルズに倒されている。

■その他（引退戦士など）：ケルベロスギルディ



反逆者　フェニックスギルディ
ペガサスギルディ

組織に反旗を翻すなどしたエレメリアンたち。

？ アルティメギル首領

全エレメリアンの頂点に立つ絶対の存在。

離反

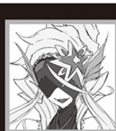


首領直属戦士
ダークグラスパー

四頂軍や各侵攻軍の統率者。
後に離反し、
テイルブラックとなる。

アルティメギル四頂軍（しちょうぐん）

神の一剣（ゴー・ディア・ソード）



最高科学者：マーメイドギルディ
戦女神：ヴァルキリアギルディ
交渉人：グリフォギルディ など

ひとたび出撃すれば、狙った世界を破滅させると恐れられているアルティメギル最強部隊。所属戦士は恐るべき戦闘力と変態性を兼ね備えている。

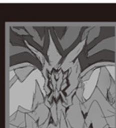
死の二菱（ダー・イノ・ランヴァス）



隊長：ティラノギルディ
右牙（ライトファング）の副将：プテラギルディ
左牙（レフトファング）の副将：トリケラトップギルディ

一般兵に至るまで強力な処刑部隊。隊長のティラノギルディはツインテイルズを壊滅寸前まで追い込む強敵だったが、覚醒したレッドに敗北した。

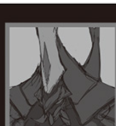
貴の三葉（ノー・ブル・クラブ）



隊長：ユグドラシルギルディ
副隊長：ラフレシアギルディ
マンドラゴラギルディ

総二たちが訪れた異世界で総力戦を繰り広げた部隊。結束力が強い。

美の四心（ビー・ティフル・ハート）



隊長：ビートルギルディ
副隊長：アラクネギルディ
隊長補佐：スタッグギルディ

ダークグラスパーと共に参戦した部隊。永い死闘の末、完全敗北した。

プロローグ　決意のポニーテール。

　俺とフェニックスギルディの戦いは、いつだって愛の語り合いだ。

　ツインテールが好きだと。ポニーテールが好きだと。

　不器用な馬ば鹿か二人が、それぞれの属性を誇り、信念をぶつけ合う。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

「おらあああああああああああああああっ!!」

　雄叫びが交こう錯さくし、二本の炎の剣が大気を灼やき斬きりながら邂かい逅こうする。

　ツインテールとポニーテールの宿命の対決は、これで四度目を迎えていた。

　一度目は、俺とブルー、イエローの三人がかりで戦闘。ほとんど俺たちの敗北に近い痛み分けに終わった。

　二度目は、俺の完敗。ツインテール愛の暴走を咎とがめられた俺は、自身の限界を超えた禁きん忌きの形態すらも真っ向からねじ伏せられてしまった。

　三度目は、逆に俺の成長を見せつけた。ひとまずは俺が優勢だったが、ヴァルキリアギルディらの出現というアクシデントによって、勝負が流れてしまった。

　かなり俺側に贔ひい屓き目めになるが、結果だけ見ると一応は一勝一敗一分けってところだ。

　そのためかフェニックスギルディは、俺との再戦を……決着を望み続けた。

　根負けした、というわけではないが……俺はある決意を胸に秘めて、彼女の挑戦を受じゆ諾だく。

　おそらくは決着戦となるであろう、四度目の戦いの幕が切って落とされたのだ。

　テイルレッドに変身した俺と、フェニックスギルディが一歩も譲らずに剣を撃ち合い。

　俺がライザーチェインとフォーラーチェインを駆使して有利に立てば、奴やつはすかさずポニーテールの最終闘体・結いわ翼ばね唯ゆ乃のに変身して戦局を五分に戻す。

　この戦い──ここまでは、全くの互角だ。

　埒らちが明かずに焦じれる……それもあるが、互いの全てをぶつけたいという本能に突き動かされたのだろう。

「アルティメットチェインで……究極のツインテールで来い、テイルレッド!!」

「お前こそ、テイルギアＴＹＰＥ-Ｐの調子は万全だろうな、唯乃!!」

　ついに俺たちは、全力の解放を示し合う。

　俺が左腕に自分自身の魂たましいの結晶、ツインテイルブレスを発動した瞬間。

　唯乃は、焔えん銃じゆう剣けんフェニックスラッシューターに、変身アイテム・テイルレインフォーサーを装着する。

　俺が左右のテイルブレスを輝かせ、両腕交差の構えを取ると同時。

　唯ゆ乃のは、フェニックスラッシューターを高々と掲げた。

「ツインテイルオン!!」

「テイルオー──ンッ!!」

　お互いの身体からだから立ち昇った炎が、正面から激突し、どち

らも引かず、天へと昇っていく。

　テイルギアに究極の装そう甲こうが加積され、太陽のごとき翼を広げた俺──テイルレッド・アルティメットチェイン。

　不死鳥の翼を装甲として象かたどる異端のテイルギア、ＴＹＰＥ-Ｐを装着した唯乃。

　炎のギアをまとう二人の戦士が、対極の髪型を愛する二人の戦士が、それぞれの髪をたなびかせて向かい合う。

「嬉うれしいぜ総そう二じ。とうとう、全力で戦やり合えるんだな、俺様たちは!!」

「ああ……いくぞ、唯乃!!」

　勝っても負けても、きっとこれが最後だ──。

「……いや……俺のツインテールで、必ず勝ってみせる!!」

　地面を蹴けり抜き、不敵に笑う唯乃へと突とつ貫かん。

　まずは挨あい拶さつ代わりに、互いの拳こぶしをぶつけ合う。

　激突して同時に跳ね飛ばされた反動をも利用し、今度は回し蹴りを放ち合った。

　身長差と脚の長さの差で、立ち蹴りは俺の方が不利になるところだ。

　しかしそこは、左右対称のツインテールが輝く。髪に遠心力をまといやすい特性で、総合的に蹴りの威力は互角となるのだ。

　蹴りの次は、拳の乱打を。飛び蹴りを、手刀を。

　徒と手しゆ空くう拳けんをぶつけ合う度たびに、大気が灼やけ焦げる。

　肉体をぶつけ合っているとは思えない轟ごう音おんが、音おん叉さのように反響して空を激しく震ふるわせていった。

　鳴動する空に向かい、俺は相棒の名を叫ぶ。

「テイルレガリア―――――――――――――ッ!!」

　空の彼方かなたからツインテール型の双房戦闘支援機ツインテールアーマーが飛来し、大地に光弾を弾着させる。

「空飛ぶツインテール……自分の中のツインテールとの対話で手にしたんだったな！　ちょっと羨うらやましいぜ、俺様も自分のポニーテールとやらと会話しダベつてみてえもんだ!!」

　口くち端はを吊つり上げながら、唯乃は大きく飛び退のく。同時に、フェニックスラッシューターを手にして逆さか袈げ裟さに構えた。

「意外とお茶目で、話せる奴やつなんだぜ！　俺のツインテールは!!」

　ブレイザーブレイドとテイルレガリアを合体させ、究極双房剣テイルカリバーが完成する。

　刃やいばと刃が磁力で引かれるかのように、俺たちの剣は即座に交わり合った。

　鍔つば迫ぜり合いをすれば互いの身体からだを激震が襲おそい、剣けん閃せんを躱かわせば行き場を失った衝撃波が地面を深く抉えぐる。

　炎えん刃じんの煌きらめく戦場の中で、俺は確かな手て応ごたえを感じていた。

　俺は今初めて、テイルギアをまとった唯ゆ乃のと互角以上にやり合えている。

　ドラグギルディとの再戦でも感じたことだが、かつて苦杯を喫した好敵手と同じ呼吸で戦いを繰り広げられるのは……嬉うれしい。

　それは、俺のツインテールへの愛が高まり続けた証あかしでもあるからだ。

「いいねえ……やっぱお前との戦いは、最高に楽しいぜ！」

　唯乃もまた、喜き悦えつを溢あふれさせていた。

「この勝負……勝った方が、一つだけ相手の言うことを聞く！　そういう約束だったな、テイルレッド!!」

「ああ、ツインテールに二言はない!!」

　そう提案したのは、俺の方だ。決着を着けたいという唯乃の願望を叶かなえ、俺自身に生まれたある願いを叶える、一石二鳥の方法だと思ったからだ。

　もちろん、こいつが何を願うかわからない以上、俺は絶対に負けられない。

「てめえは何を願うんだ、テイルレッド!!」

「……って、今聞いてくるのかよ!?　戦いに影響するだろ！　終わった後だ!!」

「俺様はもう決めてるぜ！　前にデートした時、有う耶や無む耶やになったあれだよ、あれ!!」

　なんと唯乃は、斬きり結んでいる最中に正直に願いごとを暴露してきた。

「キスってんだろ、それしてみようぜ！　つーかしろ!!」

　滅茶苦茶あっさり口にしやがる。聞いてる俺の方が赤面するよ……。

「……こうなったら、俺は意地でも負けられないな！」

「いや、俺様がおかしいのか……？　言っといてなんだけど、意地になるほどお前にデメリットなくねえか？　……まあいいや、今は全力で戦やり合おうぜ!!」

　興味とか欲求に忠実なのは、それだけこいつが人間に近づいている証拠なんだ。

　少し思考が乱れてしまったが、動揺してたらあっという間に押し込まれる。

　ツインテールに意識を集中し、この戦いを制するのだ。

　俺たちがこうして四度目の戦いを迎えたのは、学校の三学期が始まってすぐ。

　少し慌あわただしい、年末年始を経てからの出来事だった――。

第一章　年まツインテール。

一二月三一日──大おお晦日みそかの昼下がり。

今日は大型同人誌即売会・コミケの会場に、俺たちツインテール部のメンバーでやって来た。夏コミ以来……実に四か月ぶりだ。

頬ほおを撫なでる潮風の冷たさに、季節の移ろいを実感する。

夏コミは俺と愛あい香か、トゥアール、慧え理り那な、桜さくら川がわ先生の五人で訪れたが、今回はイースナと、メガ・ネ……が着ぐるみを着たメガネドンも一緒だ。

あの時は、まだ敵同士だったんだよな……俺たちとイースナは。

そう考えると、何とも言えず感慨深い。

「相変わらず、とんでもない人口密度だったなあ」

基地帰還の転送ゲートを出すポイントを目指して歩きながら、俺は心地ここちよい疲労感とともにそう呟つぶやいた。

今回は以前のようにエレメリアンの襲撃を警戒して訪れたのではなく、完全にプライベート。各自、のんびりと会場を散策した。

俺は真っ先にデックさんを訪ねようと思っていたのだが、残念ながら夏が特別だっただけで、今回はサークル主の友人ともども来日していなかったようだ。

「テ、テイルレッドのえっちな本が、売ってなかった……」

イースナは善いい沙すな闇あん子ことして企業ブースでトークイベントをこなし、その後は一般人としてサークル巡りをしたので、疲労困憊だ。しかも、どうやらお目当ての本は無かったようだ。

「だからテイルレッドは女神過ぎて、この世界じゃエロ同人誌とか御ご法はつ度とになってるんですよ。印刷所にそういう原稿入稿しても、印刷拒否されるらしいですし」

俺たちよりよほどこの世界のエンタメ事情に詳しいトゥアール

が、イースナに説明する。

「その代わり、夏よりもさらにテイルレッド本の全体的なクオリティが底上げされているようです」

　白衣型コートのポケットから、にゅるんと音を立ててテイルレッドの絵が描かれた紙袋を取り出すトゥアール。

　袋がはち切れんばかりにたわんでいる。戦利品が満載のようだ。

「エロさを滲にじませずにフェチズムで勝負する方向に進化していますね、コミケ参加者たちは。順調にエレメリアン化しているといえるでしょう」

「いいのかよそれで……!?」

　相変わらず、会場に収穫間際のサトウキビ畑のように高々と樹立していた無数のテイルレッドのぼりを思い出し、俺は複雑な心境になる。

「わ、私の方が、トゥアールさんよりいっぱい買ったもん……。ね、メガ・ネ」

「お腹なかにちゃーんと仕舞っとるから、帰ったら見ような、イースナちゃん」

　着ぐるみの上から、自分のお腹を叩たたくメガネドン。

　メガ・ネもトゥアールの亜空間ポケットと同じ原理の収納箱を、腹部に搭載している。イースナと一緒にお買い物できたのだ。嬉うれしかっただろうな。

「数揃そろえればいいってもんじゃありません、厳選するのが大事なんです！」

「厳選するなんて……愛じゃない……。愛はたくさんが、いい……」

「ちいいっ！　イースナのくせにちょっと名言っぽいことを!!」

　トゥアールとイースナのやりとりが微ほほ笑えましい。

平和そのものだが……今日この時間を勝ち得るために、俺たちは大なり小なり痛手を負った。その最たるメンバーが──

「ぐ、ぐぎぎぎ……」

少し遅れて辛つらそうに歩いている、愛あい香かだ。

「大丈夫か愛香、だから無理しないで家で休んでろって言ったのに……」

「あ、あたし一人、家で寝てる方が、もっと辛いわよ……」

気持ちはわかるが、結局会場もほとんど見て回れなかったようだし、やっぱり安静にしているべきだったと思うんだが……。

「そりゃそうでしょう、属性玉エレメーラオーブ七つ同時発動なんていう脳筋の頂点を極めてしまったんですから。その程度の反動で済んでいるのが不思議なぐらいです」

トゥアールが嘆息とともに肩を竦すくめる。

数日前の戦いでとてつもなく無理をしたせいで、愛香は今でも極度の筋肉痛に悩まされているのだ。その戦いの相手こそ──アルティメギル四し頂ちよう軍ぐん最後の軍団・神の一剣ゴー・デイア・ソードの幹部、ヴァルキリアギルディだ。

無毛属性アトリキアというツインテールの天敵ともいえる属性を持つ彼女は、冠した戦いくさ女め神がみの名の通りにとてつもない強さの戦神だった。

これまでに俺たちツインテイルズが倒してきたエレメリアン全てを復活させ、終わりなき戦いを強しいる。それが、彼女の必勝の策だったのだ。

さらに俺たち一人一人の心を砕こうと、非道な作戦で追い打ちもかけてきた。

しかし──俺たちは諦あきらめなかった。決して折れない、心のツインテールで戦い抜いた。

だが、エレメリアン復活の要かなめたるヴァルキリアギルディを倒してなお、戦いは終わらなかった。アルティメギルの科学者マー

メイドギルディの策略で、今度は無数の心無き怪物・ホロウエレメリアンが出現。世界に魔の手を広げようと跋ばつ扈こしたのだ。

　復活エレメリアンたちはその邪悪に自分たちの誇りを汚けがされることを良しとせず、消えゆく運命にありながらも起たち上がり、戦った。

　しかもその時、俺は宿敵ドラグギルディと肩を並べて戦ったのだが──かつての好敵手に助けられたのは、俺だけではなかった。

　愛あい香かは貴の三葉ノー・ブル・クラブ、慧え理り那なは美の四心ビー・テイフル・ハート、イースナは死の二菱ダー・イノ・ランヴアス──それぞれに縁ゆかりのあるエレメリアンたちが駆けつけ、ともに戦い抜いたということだった。

　不屈の魂たましいが奇跡を呼び、ツインテイルズはこの世界の最大の危機を乗り切ったのだ。

　俺は後ろを振り返り、どこか夢見心地ごこちな慧理那に声をかけた。

「残念だったな、慧理那。コミケに本出せなくて」

「ええ、けれど機会はこれから何度もありますから」

　今日、コミケに行きたいと真っ先に言ったのは慧理那だ。

　先日再会した前生徒会長・牧もく須す豊と美み得え先輩のサークルスペースを訪ねたいのだと思っていたが、理由はそれだけではなかった。

　慧理那は先の戦いで、自分を助けたビートルギルディにＵＳＢメモリを形見として渡された。その中に自分たちが描いた同人誌の原稿が入っているので、いつか本にしてくれと頼まれたらしい。

　さすがにそれを言われたのがクリスマスだ。印刷は無茶をすれば何とかなるが、サークル参加だけはいかんともし難がたく、今回は見送ったのだが──。

「やっぱり〝こみけ〟は楽しいですわ！　観み束つか君が手を握っ

てくださっていましたし！」

「あ、ああ……そうか……」

　例によって今回も、肌面積の多いポスターが掲げられているゾーンは、アイマスクで慧理那の視界を封殺しつつ、手錠をして俺が先導した。しかも今回は首輪もリクエストされた。

　心なしか、そんな俺たちを見る周りの客の反応が夏よりも熟こなれていたのが気になる。

「わたくし、この帰り道もあの格好で、観束君に導かれたいですわ……はあはあ」

　頬ほおを赤らめ、潤うるんだ瞳ひとみで俺を見上げてくる慧理那。

　慧理那のあの強化形態フオームは、コミケ会場内だからコスプレの範はん疇ちゆうでギリギリ大丈夫なものだ。人ひと気けがない場所へと歩いているとはいえ、天下の公道ではちょっと……。

　むしろ、今はもっと手を貸さなきゃいけない女の子がいるしな。

「ほら愛香、もう少しで転送ゲートを出す場所だぜ。きついなら、俺の肩に掴つかまれ」

　とうとう息を切らし始めた愛香を見かね、俺はそう提案した。

　断るようなら、無理矢理おぶってやろうかと思ったが──

「……うん、甘えちゃおっかな？」

　やけに素直に俺に身体からだを預けてくる愛香。

　俺は愛あい香かの腕を肩に担かつぎ、腰に手を回して引き寄せた。

「ひゃっ……！」

「悪い、痛かったか？」

「そ、それもちょっとあるけど……ううん、大丈夫だから、そのままで……」

　コートの中に熱気が籠こもっているように感じるが……熱があったりしないよな、愛香。

「ずるいですよ、愛香さんばっかり！　みんな薄い本ハンティングで疲れているのは一緒なのに!!」

　トゥアールが俺から愛香を引き剥はがそうとするが、何とか遠えん慮りよしてもらう。じゃれ合うにしても、今の愛香は本調子じゃないからな。

「私は全然疲れていないぞ。若さが足りないんじゃないか、お前たち」

　慧え理り那なの戦利品（特撮ヒーローの同人誌など数十冊）を搭載したリュックを背負っている桜さくら川がわ先生は、言葉の通りけろっとしている。

「尊みことさんは愛香さんに次ぐフィジカルモンスターですから、比較の対象にはなりません!!」

　そう言うトゥアールも、ピンピンしてるように見えるが……やせ我慢なのかな。

「あ、あたしは疲労じゃなくて筋肉痛なんだし……ね、そーじ」

「私は筋肉どころじゃなく毎日毎日骨も内臓も満まん遍べんなくダメージ受けてるんですよ愛香さんのせいで!!」

　俺の肩に寄りかかって歩く愛香を、怪け訝げんそうな眼まな差ざしで凝視するトゥアール。

　ダメージも多いけど、リカバリーも恐ろしく速いからなあ……。

「最近愛香さん……総そう二じ様との距離感、おかしくないですか？」

「そんなこと……ないよねそーじ、普通よね？」

「むむむ、否定が五七五調に！　これはますます怪しいですね!!」

　みんなで外出したのが功を奏したのか、トゥアールもいつもどおりの調子で安心した。

　トゥアールはこの頃ごろ、ふと憂うれいを帯おびた表情で考え事をすることが多くなっていたので、何か悩みでもあるのかと心配していたのだ。

　考えられる原因としては……トゥアールもホロウエレメリアンの敵意に晒さらされ、恐ろしい思いをしたであろうということだ。

　クリスマスの決戦が終わり、みんなで基地に帰った後……トゥアールだけ泣き腫はらしたような顔をしていたのが心配で、俺は彼女に何があったのかを尋ねた。

　トゥアールは、避難誘導中にホロウエレメリアンの襲撃を受け窮地に立たされたが、駆けつけたティラノギルディに助けられたらしい。

　あいつがそんなことを──と、俺も随分と驚いたのを覚えている。

　トゥアールはその時気丈にも、流した涙の理由については決して語ろうとはしなかった。

　でも、もう大丈夫だトゥアール。今は思う存分、この日常を謳おう歌かして欲しい。

　愛あい香かの、慧え理り那なの、イースナの、桜さくら川がわ先生のツインテールが風に揺れている。

　俺にはそれらが、空高くたなびく平和の旗ピースフラッグに見えた。

　そう──俺たちは今、勝ち取った安らぎを満喫しているんだ。

　ドラグギルディたちが侵略しようとし、最後には結果的に守ることとなった青空を。

　俺が宿敵に新たな約束を紡つむいだ、この世界の平和を──。

◇

　ツインテイルズとヴァルキリアギルディの決戦の最中。最高科学者マーメイドギルディは、保身のために戦場を離脱。ガイアギルディの敗北とホロウエレメリアンの消滅を、離れた場所で見届けた。その後──。

「ごめんねヴァルちゃん……約束、叶かなえてあげられなくて」

　心血を注いだ作戦が瓦が解かいし、小さな消沈を胸にアルティメギル基地へと戻ったマーメイドギルディ。

　所在ない足取りで自室に辿たどり着いた彼女を待っていたのは、灼やけ熔とけた残骸の山だった。

「…………私の、研究所ラボが……」

　マーメイドギルディの研究所は──完全に破壊されていた。

　自室だった場所が、無数の研究成果たちが……炭と赤黒い鉄塊だけになっている。

「やってくれたわね、フェニックスギルディ君」

　その猛たけ々だけしい炎痕から犯人を連想し、マーメイドギルディは苦虫を噛かみ潰したような表情を浮かべる。

　フェニックスギルディの人間体・結いわ翼ばね唯ゆ乃のを監禁し、絶対に脱出はできないと呑のん気きにタカを括っていたマーメイドギルディ。

　だが……彼女は唯乃の底知れないパワーを、そして根性を侮あなどっていた。

　唯乃は、マーメイドギルディの計算を覆くつがえす力を発揮して拘束を破壊し、脱出。ツインテイルズとホロウエレメリアンの決戦に、頼もしき援軍として駆けつけた。

　そしてその脱出の際、意趣返しとばかりに研究所を破壊していったのだろう。

　せめてもの情けか。マーメイドギルディのＢＬ本コレクションだけが炎の裁きを逃のがれ、灼け熔けた部屋の隅に堆うずたかく積み上げられていた。

一冊摘つまみ上げ、ページを捲めくる。奥付のある最終ページに目を留とめ、ほくそ笑むマーメイドギルディ。

「……駄目ねえ、フェニックスギルディ君。怒った時には情けなんてかけちゃ……」

ＢＬ本に数式や設計図を書き込む……マーメイドギルディの妙な習性など、フェニックスギルディが知しる由よしもない。

「それに、研究所を破壊したって無駄なのよ。もしもの時のための、一番信用できるバックアップ先は──自分の頭脳あたまなんだから」

ＢＬ本に残された僅わずかなメモを頼りに、自身の記憶メモリーを最大限に引き出す。それが、悪魔の頭脳の真骨頂。

アルティメギルを暗躍する科学者は、依然として諦あきらめようとはしていなかった。

◇

「皆さん、このままツインテール部部室にも参りましょう！」

コミケ会場の近くから基地に転送した後、慧え理り那なは皆の前でそう提案した。

今年最後の、ツインテール部のミーティングってわけか。

基地に荷物を置くと、部室へ向かう俺たち。

転送ロッカーから出ると、俺と愛あい香か、慧理那、イースナは各々長机に着席。桜さくら川がわ先生とメガ・ネがお茶を準備し、トゥアールがホワイトボード型モニターを引っ張ってくる。

「クリスマスからこっち、平和でありがたいわぁ。イースナちゃんも、いつもどおりのスケジュールでお仕事できるようになったし」

メガ・ネが俺にティーカップを差し出しながら、しみじみと呟つ

ぶやく。

「ああ、ほっとしてるよ。俺たちが消耗しきったところを狙ねらわれて、生き残りのエレメリアンたちに押し寄せて来られたら厄介だったからな」

「今月は、ひたすら……バトりっぱなし、でした……。年の瀬にくらい、ゆっくりしても……いいと思います……」

　コートを脱いでいつものジャージ姿になったイースナが、人ひと心地ごこちついて言う。

　おしゃれなコートでも下がジャージなのは、トゥアールの白衣に似たこだわりを感じる。

「今神の一剣ゴー・デイア・ソード以外で残っている侵攻軍の戦士は、大一番で勇気を出して踏み込めなかったために出撃の機を逃のがしてしまった、売れ残りに過ぎません。……ですが、油断は禁物です。売れ残りは時に、妙な爆発力を見せますから。ねえ、尊みことさん」

「何な故ぜ私に振るんだトゥアール、私は売れ残っていないぞ。なあ、観み束つか」

　何故俺に振るんだ……!?

「まあ、それはともかく──」

　トゥアールが、仕切り直すように端末を操作。ホワイトボード型のモニターに、俺たちが現在把は握あくしているおおまかなアルティメギルの組織図が表示される。

　各部隊、そして四し頂ちよう軍ぐんのうちの三部隊──美の四心ビー・テイフル・ハート、貴の三葉ノー・ブル・クラブ、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスが壊滅を現すグレーで塗りつぶされている。残る主な戦力は神の一剣ゴー・デイア・ソード、そしてアルティメギル首領だけだ。

「ヴァルキリアギルディが言っていたように、神の一剣ゴー・デイア・ソードはアルティメギルの最後の砦とりでを担っているため、そうそう数を減らせない。今は次に送り込む戦士を厳選している最中かもしれませんね」

「しばらくはみんなで、ゆっくりできそうですわね！」

　トゥアールの結論を受け、嬉うれしそうに手を合わせる慧え理り那な。

　アルティメギルの侵攻が一時的に落ち着くのは、各軍団を撃破した後の部隊補充期間であることがほとんどだ。しかし、あれだけの大作戦を破られた後では、さすがの奴やつらも侵攻を止めざるを得ないのだろう。

　一方で、幹部であるヴァルキリアギルディが倒れたとはいえ、神の一剣ゴー・デイア・ソードはまだその全ぜん貌ぼうを明らかにしていない。

　隊長が残っているとすると、あの戦いくさ女め神がみを上回る力の持ち主ということだ。

　おそらく当面の最大の障害は、まだ見ぬそのエレメリアンになるだろう。

「あたしはとっとと残り全部倒して、スッキリしたいんだけどなあ」

　冗談半分だろうが、もう半分は多分本気で言ってるんだろうな、愛あい香か。

　イースナは不満げに目を細め、愛香の肩を思い切り指でつついた。

　愛香は声を噛かみ殺し、身体からだを震ふるわせる。

「っづぁ……こら、イースナァ!!」

「む、無理しちゃ、駄目です……貧乳さんは、今のうちに……ちゃんと、休んで」

　愛香の体調を案じているようだ。

　慧理那と仲良くなった影響だろうか、イースナにもお姉さん気質が出てきた。

　思わずほんわかしてしまう。

「イースナの言うとおりだぜ、愛香。あいつらがおとなしくなっているうちに、俺たちもコンディションを整えておかないと」

「心遣いはありがたいけど……いい加減ちゃんと名前で呼んでよ、イースナ……」

　愛香もそんなイースナの気遣いが、まんざらではなさそうだ。

　名前で、か。もう少し仲良くなれば、それもすぐだろうな。

　俺たちはこうして少しずつ、しかし確実に、絆きずなを深めてきたんだから。

「今年一年……この部室で、色々なことがあったよなあ」

　俺は感傷的な気持ちになり、ふと天井を見上げた。そして今年この部室であった、色とりどりの出来事を回顧する。

　トゥアールが天井に突き刺さり、慧理那がはぁはぁし、トゥアールが壁にめり込み、イースナがエロゲーを持ち込み、トゥアールが床に埋没していた。

　そして愛香はどの思い出の中でも、元気よく暴れていた。

　………………言うほど色とりどりの出来事はなかったな、わりとルーチンワークだったな。

　この部室もよくぞ、破壊と再生を繰り返す毎日に耐えてくれた。

　頑張ろうぜ──俺の自室へやも、同じ境遇だから。

「それで……今日は大おお晦日みそかですわ。みんなで感謝の気持ちを込めて、この部室を大掃除しませんか？」

　俺が部室に敬意を払うのとシンクロするかのように、慧え理り那ながそう申し出た。

「大掃除ですか……いいですね！」

　真っ先に賛同したのは、トゥアールだった。

　この部室は、俺の家にある地下基地と同じくある程度の自己修復・自己浄化能力がある。

　加えて、桜さくら川がわ先生やメガ・ネが普段からこまめに掃除をしてくれているため、入念に掃除をするほどの汚れは無いのだ。

　が、トゥアールも桜川先生たちも、無粋なことは言わない。

　普段の掃除と、年末の大掃除は別のものだ。慧理那の言うとおり、自分たちの使っている場所に一年間の感謝を込めてやるものだからな。

　きっと慧理那は、今年最後のミーティングというより、大掃除の方が本命でみんなを部室に誘ったのだろう。

「ご立派です、お嬢様。では、皆で手分けして進めましょう」

　主人の提案を喜ぶように、桜川先生が掃除用具の準備を始める。

「津つ辺べは無理をするな、力を使う仕事は私たちに任せておけ」

　よろよろと立ち上がる愛あい香かを気遣う桜川先生。

「大丈夫です桜川先生！　あ、あたし……そうじ、好きだから……」

「そっか、愛香は掃除が好きなのか」

　そういやお見舞いで愛香の部屋に行った時、ちゃんと片付いてたな。

　ツインテールを整えるには、まず身の周りを整える。見習いたい心がけだ。

「うん……あたし、そうじ好きなの」

　しかし、妙に愛香が俺に流し目をしてくるような……。

「ペッ」

　何な故ぜか、やさぐれ顔のトゥアールが唾だ棄きしていた。

「これからきれいにしようって時に、床に唾つば吐いてんじゃないわよ!!」

「トゥアールちゃんの唾だ液えきは蜂蜜みたいに甘くてきれいだか

らいいんです！　愛香さんの鋼鉄をも溶かす強酸性の体液なら話は別ですけど!!」

「……部室の前に大掃除しなきゃいけないものがあったわね」

「ひいいい乾から拭ぶき雑ぞう巾きんみたいな胸して迫ってこないでくり──────────────なあああああああああああああああああ!!」

　愛香の放った両りよう掌しようの零距離打突で吹き飛び、大の字で壁にめり込むトゥアール。

　筋肉痛で大振りな技が使えないためか、使うのは最小限の動きで済む打撃だ。

　部室でのこのお決まりの光景も、今年はこれで見納めかな？

　ぱんぱんと手を払う愛あい香か。

「さっ、てきぱきとやっちゃいましょ」

　トゥアールをてきぱきとやっちゃった張本人が、率先して掃除を始める。

「んしょ、んしょ……」

　イースナは可か愛わいらしくも懸命なかけ声とは裏腹、やっているのはメガ・ネがとりあえずと差し出したハタキで壁をぱたぱたと叩たたいているだけだった。掃除慣れしてないんだろうな。

「イースナちゃん、お掃除の基本は上から下に、やで。ウチが先に天井やっちゃうから、ハタキはその後な」

　メガ・ネの鋼鉄はがねのボディを彩いろどる、白の三角巾とエプロン。おかんだ……。

「うん。わ、わかった……」

　素直なイースナを見て嬉うれしそうにすると、メガ・ネは足の裏から空気圧を噴射して浮遊し、天井を拭き始めた。なんてハイテクなお掃除法なんだ。

「では、わたくしは書類整理をしておきますわ」

　慧え理り那なは棚の整理に向かった。

　まあ、ツインテール部で保管している紙の書類って、慧理那が趣味でまとめたアナログの戦闘データベースとかがほとんどだけどな。

「……あっ、こんなところにお母様から授かった奥義の書【ツインの巻】が……。ずっと捜していたのですが、部室に置いていたのですわね……」

　かと思えば、妙な書物も発掘している。

　神しん堂どうファミリーは、たまにしれっと古文書とか出してくるから恐ろしい。

「あたしは備品の片付けしとくわね。トゥアールの作ったガラクタが溜まってきてるし」

「ちゃんとトゥアールに聞いて、捨てるものと捨てちゃいけないものを分けるんだぞ」

　俺は愛香に、目についた端はしからポンポン捨てないよう、釘くぎを刺しておく。愛香はしぶしぶ、トゥアールに確認を取り始めた。

「トゥアール、これは？」

　愛香がまず取り出したのは、碁石ぐらいの大きさの黒い石だ。

「それは総そう二じ様のズボンのチャックを遠隔操作で下ろす特殊磁石です。当然残しです！」

「……。じゃあこれは……」

　収納ケースに入った、ＤＶＤ-Ｒの山。愛香は何枚か取り出して確認するが、全てのディスクがラベルに何も書かれておらず、何が入っているのか判別できない。

　制作時に横着して中身が何かを書かず、後から確認作業に余分に時間がかかるというのは、ままあることだ。

「それは全部、私をヒロインにして作ったエロゲーのディスクです！」

「多すぎるでしょ、これ全部!?」

　愛あい香かはその何十枚ものディスクを見て困惑するが、トゥアールは自信満々に腕組みをして説明した。

「上から順に、この部室で皆さんにお披露目した１、そしてその続編の２、１のアニメーション追加版、ファンディスク、１・２Ｗダブルパック、１のシナリオ強化版、待望の３……、と続々続きます！　もちろんまとめて残しです!!」

　１と２が別々のディスクで保存されてるのに、何な故ぜ１・２セットも作った……!?

「……新ＯＳ対応版とか、ＨＤ画質版とか、後から……いろいろ出ますよね……」

　俺の疑問を余よ所そに、イースナが援護するようにゲームの商法を説明してくる。

　こめかみをひくつかせながら、今度は小瓶びんを取り出す愛香。

「これ何よ、栄養剤？」

「もう、これぐらいは覚えていてください、ソーラちゃん事件の時に使った利尿剤ですよ。汎用性高そうなので、基地にも部室にも常にストックしてるんです!!」

「万国ガラクタ博覧会じゃないのよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「膀ぼう胱こうに暴行ッッ!!」

　愛香の豪腕で投げ放たれた小瓶が腹部に命中。その勢いでトゥアールは吹き飛び、部室の壁にめり込んだ。

　物理法則に照らし合わせると、小瓶をぶつけて人体を数メートル飛ばすのにどれほどの衝撃が必要か……想像するだに恐ろしい。

　そもそも、利尿剤に汎用も専用もないだろう……。

「ええい、今日ぐらいはおとなしくしないか、津つ辺べ！　大掃除している側そばから壁を崩してたら、いつまで経たっても終わらんぞ！」

「はっ……つい……すみません。……っあ！　いだ、いだだだだ……!!」

　桜さくら川がわ先生に窘たしなめられ、反省する愛香。しかも、筋肉痛を省かえりみずに無茶をしたせいで、肩を押さえて苦く悶もんしている。

「…………あの時の……はあ、はあ……」

　慧え理り那なが息を荒らげ、物欲しそうにその小瓶を見つめている気がするが、俺の錯覚であってほしい。

「これは……あれ？　うちの制服？」

　気を取り直して作業を再開した愛香が見つけたのは、陽よう月げつ学園高等部の女子制服だった。

「それは、総そう二じ様がソーラちゃんになった時のものですよ」

　部室の自動修復機能をも上回る回復力で復活したトゥアールが、制服を見て懐かしそうに眼めを細める。

「そういや、あの騒動の時に俺が着た制服、トゥアールが作ってくれたんだっけ……」

「ブレザーはともかく何で冬用のカーディガンまであるのよ、あれ夏服の時でしょ!?」

「いつまたソーラちゃんになってもいいように、オールシーズン対応で備えてあるんです！」

　自信満々に胸を張って揺らし、今年の愛あい香かの煽あおり納めを始めるトゥアール。

「制服を捨てるわけにはいかないわね……」

　いつまたソーラになってもいいように……って、多分それは二度とないと思うが。

「あとはもう確認するまでもないわ、まとめて全部廃棄処分で」

「不法投棄しないでください！　この世界のごみ処理施設では手に負えない材質のものもあるんですよ!!」

　………………材料に何使ってるの？

「とにかく、トゥアールＢＯＸに入れて場所を取らないようにしますから、無む闇やみに捨てようとしないでください！　どれも思い出の品なんですから!!」

「片付けられない人の言い訳ベスト３に入るでしょ、思い出の品って……」

　しかし、思い出と言われると弱いのは皆同じだ。愛香も処分は諦あきらめたようだ。

　制服はイースナにあげて有効活用すればどうか、と提案しようと思ったが……イースナも以前陽よう月げつ学園の制服を自前で用意して着ていたので、必要ないだろうな。

　俺が一度着ただけで終わるのは、もったいないし申し訳ない。あの制服、何か使い道がないだろうか……。

　一部屋に、この人数だ。部室の大掃除は、ものの十数分で終わってしまった。

「よし、これで大掃除も終了だ。みんな、今年一年お疲れ様!!」

　俺がそう宣言すると、誰だれからともなく拍手が起こり、ちょっと照れくさい。

「帰ったら俺の部屋も掃除しないとな」

　何気なく俺がそう呟つぶやくと、慧え理り那なが目を輝かせた。

「でしたら、わたくしにもお手伝いさせてください！　観み束つか君のお部屋にある犬小屋は、わたくしが責任を持ってお掃除すべきですもの!!」

　責任は持たなくていいから、持って帰ってくれないかな犬小屋……。

「き、気持ちはありがたいけど、慧理那も自分の部屋を掃除しなきゃいけないだろ？」

「お嬢様の部屋は我われ々われ神しん堂どう家のメイドが完かん璧ぺきに清掃する。お前は素直にお嬢様のご厚意に甘えるといい。無論、私も先にお前の方を手伝ってやるぞ！」

「いやいや大丈夫です！　みんな、自分の部屋は自分で掃除しないとな!!」

　考え過ぎかもしれないが、愛香やトゥアール、イースナも続きそうな気配を感じたので、機先を制するように捲まくし立てた。

「そうですか……」

　しょんぼりする慧理那だが、すぐに笑顔に戻った。

「あ、あの……それでは観束君。明日、わたくしと一緒に初はつ詣もうでに行きませんか？」

「初はつ詣もうでか……。ああ、いいぞ」

　この提案には断る理由は無い。俺は、快こころよく応おう諾だくする。

「くうっ！　慧え理り那なさんに先を越されてしまいました!!」

　何がそうさせるのか、フィギュアスケーターのように爪つま先さき立ちで猛回転するトゥアール。

　体力有り余ってるなあ……。

「会長！　そーじは毎年あたしと一緒に初詣に行ってるのよ!!」

「そうか、でも今年はお嬢様の方が予約が早かった、諦あきらめろ津つ辺べ。ちなみに当然私もお嬢様に同行するぞ」

　慧理那に詰め寄る愛あい香かを、桜さくら川がわ先生が阻む。

　な、何で先着方式になってるんだ、初詣……。

　ちょんちょんと肩をつつかれ、振り向くと、イースナが含み笑いを浮かべていた。

「そ、総そう二じさん……トゥアルフォンの、カレンダーアプリ、見て……」

「……えーと、『一月一日、九時……イースナと初詣』……何だあ!?　知らない間にスケジュールが保存されてる!?」

　しかも一〇分おきの予定通知アラームが一四四回設定されてたよ、二四時間ひっきりなしに自覚させるつもりだよ怖ぇよ!!

「いや、普通にみんなで行けばいいじゃないか、なあ、愛香」

「う、うん……そう、だね……みんな……で……」

　俺は当たり前の提案をしたのだが、愛香の歯切れが悪い。

「すみません津辺さん、わたくしいけないことを言ってしまったでしょうか……」

「ち、違うのよ!?　ただその、去年まではそうだった、っていう話だから！　うん、みんなで初詣、楽しいよね!!」

　案の定、申し訳なさそうにする慧理那を見て、愛香は慌あわてふためく。

「気に病む必要ありませんよ慧理那さん。毎年一緒に初詣行ってるぐらいの距離感でヘタレ続けた負け犬幼馴染おさななじみ相手に遠えん慮りよなんてしても、徒労に終わるだけです」

「フッ……まあ、少し前まではそうだったかもね」

「……あれ、愛香さん、何か……あれ……？　まあ、おとなしいのはいいですけど……」

　トゥアールは慧理那をフォローしてくれたのだろうが、煽あおり文句をどこか自信に満ちた様子であしらう愛香に首を傾かしげている。

「それはさておき！　姫始めというのもオツですが、やはり、今年の童貞、今年のうちに、です！　総二様、カウントダウンの鐘が鳴る前に煩ぼん悩のうを爆発させましょう!!」

　何な故ぜか俺に飛びかかってくるトゥアール。

　愛香はトゥアールの滞空中に彼女の足首を掴つかんで床に叩たたきつけ、紐ひもでぐるぐる巻きにして天井から吊した。所要時間、およそ五秒。

「ったく……筋肉痛だけど、単純な往復運動ならいけるかな。ちゃんと一〇八回壁に撞ついてあげるから、風流な音色出すのよ、トゥアール」

「じょやああああああああああああああああああああああああ!!」

　様々な武器に見立てられてきたトゥアールの一年の締めは、撞しゅ木もくだった。

　こうて年の終わりの鐘撞きが、だいぶフライング気味に始まった。慧え理り那なも桜さくら川がわ先生もイースナもメガ・ネも、ほのぼのしながら年末恒例行事を見守る。

　とにかく、明日はみんなで初はつ詣もうでってことで、決定だな。

　──今年一年、お疲れ様。ツインテール部。

「じょやああああああああああああああああああああああああ!!」

◇

　総そう二じたちがのんびり年の瀬を満喫しているのと時を同じくして、アルティメギルに密かな動きがあった。

　アルティメギル首領に敵対せし反逆のエレメリアン・フェニックスギルディが、愛弟子スワンギルディをこっそり侵攻部隊の母艦基地へと連れてきていたのだ。

クリスマスの大決戦の折──スワンギルディもまた、最終局面でホロウエレメリアンと信念の戦いを繰り広げた。

スワンギルディを護まもり、戦いの後こうして無事に基地へと送り届けることが、ドラグギルディがフェニックスギルディへと託した遺言だったのだ。

あれから数日が経たった。そしてスワンギルディにとっては、数か月ぶりに戻る基地だ。

基地の最奥にある搬入口に、そろりと足を踏み入れる二体。

アルティメギルにとって〝指名手配犯〟であるフェニックスギルディはもちろんのこと、ツインテイルズとの戦闘で生存しながら、修行の名目で部隊に戻らず独自に行動していたスワンギルディも、本来であれば厳罰は免まぬがれない存在。

仲間に出迎えられて華々しく凱旋、というわけにはいかないのだ。

幸い、侵入者を探知する警報が反応することはなかった。

「よし。俺様はここまでだ！」

フェニックスギルディに小気味よく肩を叩たたかれ、つんのめるスワンギルディ。

「……フェニックスギルディ殿……」

振り返って視線を交わすも、万感がこみ上げるばかりで、言葉が出てこない。

そんなスワンギルディを見て、フェニックスギルディは神妙に周囲を見渡した。

「一つ心配なのは……マーメイドギルディのことだ」

そして神経を研とぎ澄まし、気配を確認する。

「この基地にある研究所はブチ壊したから、しばらくマーメイドギルディは表立って動けねえとは思うがよ……残存部隊の連中に、あいつのやらかした悪さのことは黙っておけ」

「何な故ぜですか!?　ドラグギルディ様たちをも利用しようとしていたことを明かせば、士気に関わるとは思いますが……それでも彼女のことを皆に黙っておくのは危険です!!」

　フェニックスギルディを拘束し、スワンギルディを洗脳し……あまつさえ、ヴァルキリアギルディを焚たき付けたフシもある。

　ドラグギルディも警戒していたあの科学者を、野放しにはしておけない。

「てめえの研究のために、最高部隊である神の一剣ゴー・デイア・ソードすら利用する女め狐ぎつねだぜ。この分じゃ、マーメイドギルディの『協力』とやらを受けたっていうここの連中が、何を仕込まれてるかわかったもんじゃねえだろ」

　フェニックスギルディの鋭い指摘にはっとし、沸ふつ騰とうしかけた思考を冷やすスワンギルディ。

「……そうか。今、彼女を刺激する方が危険なのですね……」

「それによ、あんな奴やつに神経を割く前に、やることがあんだろ？」

　旅立つ弟子に、余計な荷物を背負わせたくはない。

　この助言は、フェニックスギルディの師としての不器用な気遣いでもあった。

「お前さんはもう十分に強つええ。けどテイルレッドにリベンジしてえなら、俺様との約束通り最終闘体に到達してからにするんだぜ!?」

「はい！　お世話になりました、フェニックスギルディ殿!!」

　若獅子の気持ちのいい返事に、満足げに頷うなずくフェニックスギルディ。

「じゃあな！　いつか、また会おうぜ!!」

　最後の恩師・フェニックスギルディが踵きびすを返し、去って行く間。

　スワンギルディは生き真ま面じ目めに腰を折り、誠心誠意見送った。

　ややあって面を上げると、もうフェニックスギルディの姿はなかった。

　意を決して、基地の中へと入っていくスワンギルディ。

　居住スペースを抜け、メインブロックの通路を進むも、一体もエレメリアンとは遭遇しない。おそらく、大ホールに集合して会議をしているのだろう。

　どんな罵声も浴びる覚悟はできている。その上で、胸の裡うちを語るつもりだ。

　スワンギルディは堂々と胸を張り、懐かしき大ホールへと足を踏み入れる。

「───皆々様！　看護服属性ナースのスワンギルディ、恥ずかしながら帰っ……」

　消臭スプレーのＣＭで可視化された悪臭のように、どんよりとした空気がホール全体に立ち込めていた。

「なっ……この淀よどみきった空気はいったい⁉」

　堆たい積せきしたヘドロに沈んでいくようだ。

　テイルブルーのやんちゃな姿を見た後、恐ろしさのあまりよくこういう雰囲気になっていたが……まさか、自分が戦線離脱してから半年経たってもそれは変わっていないのだろうか。

　やはりモニターには、テイルブルーとヴァルキリアギルディの戦闘映像が映されていた。

　この戦いでのテイルブルーは、圧巻の一言に尽きる。その鬼気迫る戦いぶりに、戦いくさ女め神がみですらもが怯おびえを見せたほどだ。

　一般兵が見れば、エレメリアンといえど失禁も免まぬがれない程の恐怖映像だった。

「やべえ……やべえよ……」

「怖い……目を閉じても、瞼まぶたの裏にテイルブルーの胸が見えるのだ!!」

　極寒の大地に裸で放り出されたかのように、か弱く身体からだを震ふるわせる戦士たち。

「マジで勘弁してくださいって、もうテイルブルー撮影したくないッスよ……。あ、間違った、モケー」

　恐怖のあまり、戦闘員アルテイロイドまでもが普通に言葉を喋しやべっているように見えるが、気のせいだろう。

「あの、皆様……ええと……」

　恐る恐る声をかけるも、誰だれもスワンギルディが入室してきたことに気づいていない。

「スパロウギルディ殿！　スワンギルディ！　ただ今！　戻りましたァ――――ッ!!」

　仕方がないので、モニターの前で頭を垂れて立っていたスパロウギルディに大声で呼びかけるスワンギルディ。

「おお、スワンギル………………スワあああああああああああああああああ!?」

　常に穏やかな佇たたずまいを崩さない好こう々こう爺や・スパロウギルディが、大の字に仰のけ反ぞるコテコテのオーバーリアクションを披露する。

「なんと、スパロウギルディ殿が大おお仰ぎようなリアクションを!?」

「いかがなされた!?」

　その大リアクションにぎょっとし、戦士たちは次々に正気を取り戻していった。スワンギルディの帰還は、それだけの一大事なのだ。

「……お、お前は………………スワンギルディ!?」

　やがてホール内の全員が、スワンギルディの姿を認める。一様に困惑し、動揺するも……。

「えっ、ちょー、めっちゃ久しぶりじゃん！」

「ウェーイスワンギルディウェーイ!!」

　恐怖の反動リジエクシヨンか、大学生ノリでスワンギルディに殺到する戦士たち。

「戦女神殿の術で蘇よみがえった戦士の中で、お前だけが生き残ったのかウェイ（語尾）!?」

「いいえ……話すと長くなりますが、私は生き返ってはおりません。何な故ぜなら、一度も死してはいないからです」

　死んでいないから生き返ってもいない。当たり前の話だが、スパロウギルディは心当たりがあったようで、深く頷うなずいた。

「……やはりな。復活された戦士方の中にお前の姿だけがなく、不思議に思っていたのだ」

　スパロウギルディが自分のことを気にかけていたことを知り、胸が熱くなる。

　その一連の復活エレメリアンについてだが、この基地に残っている戦闘映像は、テイルブルーがヴァルキリアギルディを倒したところまでだという。

　撮影要員の戦闘員アルテイロイドが全滅したのか、それともマーメイドギルディの仕し業わざかは定かではないが……ホロウエレメリアンとそれに対抗する復活エレメリアンたちの合戦の映像は、一切残っていない。スワンギルディの復活を誰だれも知らないのも当然のことだった。

　そこでフェニックスギルディの助言どおり、マーメイドギルディの介入についてだけ上う手まく伏せ、戦いの顚てん末まつを語り聞かせるスワンギルディ。

「……そういうわけで、私はドラグギルディ様の遺言に従い、この部隊に戻って来たのです。自らの誇りを貫き通された皆様は……まこと勇敢な最期でありました」

隊長たちの誇り高き最期を語り聞かされ、その場の誰もが滂ぼう沱だと涙を流すのだった。

「ドラグギルディ殿は……ほかに何か仰おつしやっておられたか？」

郷愁溢あふるるスパロウギルディの問いに、スワンギルディは厳おごそかな面おも持もちで頷いた。

「……あなたに〝生きて……若き者、惑う者、全てのエレメリアンたちを導いて欲しい〞と。確かにお伝えしました、スパロウギルディ殿」

「そうか……」

憑き物が落ちたように、穏やかな微ほほ笑えみを浮かべるスパロウギルディ。

生者との関わりを避けるように、復活してからスパロウギルディとほとんど言葉を交わさなかったドラグギルディ。しかしその心内は、変わらず部下思いの優しき隊長だった。

「武者修行から戻ったのなら、もっと堂々とせぬか。ドラグギルディ様のお墨付きとあらば、なおさらだ。この迷える混成部隊、お前が指揮を取るべきだぞ、スワンギルディ!!」

「スパロウギルディ殿……!!」

ドラグギルディ部隊の参謀に認められ、スワンギルディはあらためて皆の前で宣言した。

「微力ではありますが、私もこの部隊に復帰いたします。また再び、ツインテイルズ打倒に向けて頑張りましょう!!」

ところが、その一言で高まっていた気運が一気に落ち込んでしまった。

「だがスワンギルディよ……テイルブルーはマジ、ッベーぞ」

「テイルブルーなど、恐るるに足りません!!」

拳こぶしを握り締め、大学生ノリを続行する戦士たちを鼓舞する

スワンギルディ。

「考えてもみてください、皆様！　私はテイルブルーの魔貌かおを見て、テイルブルーに戦いを挑まれて、なお生きているのです！彼女の必殺神話、虐殺伝説を打ち崩しているのです!!」

　おおおお……と野太いどよめきが響く。戦士の一人が、ガッツポーズと共に賛嘆した。

「た、確かに戦いくさ女め神がみすらも屠ほふり去る闘神と向き合って生き存ながらえているお前は、我われらアルティメギルにとって希望の戦士かもしれんな!!」

　スワンギルディを迎えることで、淀よどんでいた戦士たちの心は快方へと向かい始めた。

　この残存部隊を立て直すべく、新生スワンギルディの次なる試練が始まるのだった。

◇

　元日の朝。

　トゥアールの初夢は、総そう二じとイチャイチャするという望んでいたものではなかった。

　最悪なことに、むさ苦しい怪人たちの共演。総集編のような密度で入れ替わり立ち替わりこれまで戦ったエレメリアンの映像を見せられる、妙な初夢だ。

　先日の大戦が、まだ尾を引いているのだろうか。

　あまりの夢見の悪さに、目を覚ましたのは夜明け前。仕方なく地下基地のコンソールルームで一人、ぼーっとして過ごしていたほどだ。

「……何で、あんな助言ことを……」

　その中でも特に存在感を示したのは……ホロウエレメリアンに襲撃された自分の前に現れた、黒いマントの巨きよ躯くだった。

『ツインテールを信じよ、トゥアール』

　ボロボロになりながらも自分を守ってくれた、百ゆ合り好きの変態。

　帝王、ティラノギルディ。

『お前の惚ほれた男は、全てを失ってなおツインテールを輝かせたのだ。お前もあと一度だけ、ツインテールを信じてみるのもよかろう？』

　何気なしにかけられたはずの言葉。

　それはあの日からずっと、澱おりのようにトゥアールの心に堆たい積せきしていた。

「────ッ……!!」

　何度も何度も頭の中をリフレインする言葉が忌いま忌いましく、トゥアールは頭かぶりを振る。

　振り乱れる髪の毛は、二つに結ばれていない。

　アルティメギルに敗北し、自らツインテールを捨て去る覚悟をしたあの日から……一度たりともツインテールに結べたことはない。

　そんな自分に、ティラノギルディの遺言はあまりにも酷な助言だった。

　あと一度。しかし、そのたった一度が、どれほど残酷なものか。

「一度属性力エレメーラを失ったら……信じることさえ、できなくなるんですよ……」

　虚空に独りごちる。年の始まりを迎えるには、ひどく侘わびしい時間だった。

　胸の中で心が大きく膨ふくらめば膨らむほど、それを失った時に残る空白も大きくなる。

希望という前向きな言葉さえ、トゥアールには重苦でしかない。

唐突に、トゥアルフォンがテーブルの上で震ふるえる。発信者の名前を見た瞬間、沈ちん鬱うつだったトゥアールの表情が、華が咲いたように明るくなった。

「はいもしもし総そう二じ様今ちょうど着替え中で全裸のトゥアールちゃんです！　是非テレビ電話に切り替えましょう!!」

『よ、よかった……起きてたか、トゥアール。切り替えずサウンドオンリーで聞いてくれ』

本当に服を脱ぎ始めていたトゥアールだが、総二にやんわりと制止される。

『ついさっき、慧え理り那なから電話があったんだ。初はつ詣もうでに行くことを理事長に話したら、愛あい香かやトゥアールたちにも晴れ着を着付けしてくれるって。今からこっちに来るんだってさ。だから、早めに家に上がってきてくれないか？』

「はいは～い！　すぐイきますので待っててくださいね、総二様♡」

「行きます」を妙に強調して伝え、通話が終わる。

総二の声を聞いた喜びで、トゥアールの目め端はしにはうっすらと涙すら浮かんでいた。

自分自身への希望など、必要ないはずだ。

大好きな人に希望を与えることが、自分の幸せなのだから。

◇

自室でトゥアールに電話した後、俺も寝間着から着替え始めた。

「慧理那、もう俺の家に向かっているって話だし。あんまのんびりもしてられないな」

　枕の横に置いていたトゥアルフォンの着信バイブに気づき、チェックする。また誰だれかの年賀メールだろうか。

　ちなみに一番早かったのは、〇時になった瞬間に送られてきた愛香のメール。

　ツインテールを摘つまんだ自撮り画像が添付されていたのは、一年の計はツインテールにあり、という愛香のメッセージなのだろう。

　数秒遅れてトゥアールからも、何な故ぜかネグリジェで扇情的なポーズを取っている写真付きのものが送られてきた。

　そして慧理那からの年賀メールは、先ほどの電話の直後に届いた。

　墨絵風の年賀画像が添付されているのは慧理那らしいが、本文は「あけおめですわ」「ことよろですわ」と、くだけたもので微ほほ笑えましかった。

　こういうフランクな言葉は、イースナから学んでいるのかな。いい傾向だ。

　そうなるとやはり……今来たメールの送り主は、イースナか。いつもみたいに何十通も送られてくると身構えていただけに、一通だけなのは意外だった。

　――と、俺が安あん堵どすることがトリガーとなっていたかのようなタイミングで、猛烈な勢いでメールが着信し始めた。

　差出人がイースナのメールが、受信フォルダに滝のように積み上げられていく。

「クラッキングかあああああああああああああああああああ!!」

　新年初絶叫を、元日の朝早々にしてしまった。

　延々とプログラムコードがモニターの画面を流れていく、ハリウッド映画でよく見る電子戦を連想させる。

　イースナは送るメールの数が親愛の証あかしだと思っているフシ

があるので、一度に送られてくるメールの数が尋常ではない。イースナとその他で受信フォルダを分けないと、あっという間に新着から流されて他の人からのメールに気づけないぐらいだ。

　しっかり一通だけ返しておこう。「あけましておめでとう」と。

　送信ボタンをタップしようとした瞬間、クローゼットが開き、中からジャージ姿のイースナが姿を現した。

「……そ、総そう二じさん……あけまして、おめでとう……ございます……。あ、これ、クローゼットの開閉と、かけてます……」

「すぐ来て直接言うなら、あのメールの山は何だったんだよ!?」

　注意することを諦あきらめて、イースナと一緒に一階に下りる。

　リビングではすでに慧え理り那なが到着し、ソファーに座っていた。桜さくら川がわ先生と、理事長も今日は一緒だ。

「あけましておめでとうございます、観み束つか君！　今年もよろしくお願いしますわ！」

　口頭では、あけおめことよろじゃないんだな。思わず口くち許もとが緩んでしまう。

　しかし気になったのは、慧理那が普段着なことだ。

「みんな晴れ着に着替えるっていうから、もう着てきているもんだと思ってたよ」

「無論、婿むこ殿にまずは普段着の慧理那を記憶していただくためですわ。その方がより晴れ着になった時の美しさが際立つのです」

　なるほど、そういうものか。

　そう力説する理事長だが、自身はすでに晴れ着で決めている。普段和服なのでイメージが変わった感じはしないが、ツインテールのかんざしが豪華になっていることと、袖そでが長く、柄がらが華美になっているなど、やはり華やかさは格段に増している。

「あっ、もうみんないる。新年おめでとー、そーじ」

「姫始めをするにはギャラリーが多いですねえ」

　ややあって愛あい香か、トゥアールもリビングに到着。皆で、新年のあいさつを交わし合う。

「うふふ、皆さんの分も晴れ着を用意させておりますので、是非着てくださいましね」

「すみません、お言葉に甘えます、理事長」

　恐縮する愛香。理事長はトゥアールにも念を押した。

「お妾めかけさんの分もありますわよ」

「フッ、私なら自分の着物ぐらい二分もあれば作れますが、ここは年とし増まの面子メンツを立てて借りてあげましょう」

　ちょっと失礼なトゥアールの物言いだが、声の弾み具合からして、理事長の心遣いに喜んでいるのがわかる。

　理事長も、物怖じせず友達感覚で接してくるトゥアールのことを気に入っているようだし。いい関係だよな、この二人。

「じゃあみんな、客間に移動して着替えましょうか。私も着付けできるから、えむぴーと私と桜さくら川がわさんとで、女のコたちを〝変身〟させちゃいましょ！」

　母さん、やたらはりきってるな。

「意外だな、着付けできるんだ、母さん」

「あったり前でしょ！　一時期謎なぞめいた和服美少女として過ごしてたことがあったから、その時の杵きね柄づかよ」

　趣味が教養を育てるということか……。

「未み春はるさん。ちなみに私もまだまだ女のコですよ」

　母さんへとささやかな反論をしながら、桜川先生が持ち手のついた小さい桐きり箪だん笥すのような鞄かばんを持ち上げる。

　全員分の晴れ着があの中に入っているのだろうか。結構重そうなのでせめて俺が運ぶと言ったのだが、メイドとしてそれは譲れない

とのことだった。

「よろしくお願いします、未春おばさん！」

　正月に晴れ着を着るのが初めてな愛あい香かは、待ちきれないとばかりにツインテールを跳ねさせている。

「普段巨乳だって粋がってるあんたが凹へこむ姿が、今から楽しみだわ。和服はスレンダーな方が似合うんだから。この勝負あたしの勝ちね、トゥアール」

「……」

　トゥアールは一瞬面食らったようにきょとんとしていたが、

「────ファイト！　愛香さん!!」

　程なく胸を突き出して揺らし、優雅に一笑。愛香に向かってウインクし、サムズアップまでおまけでつける。負け犬の遠吠ぼえを見守るかのような余裕がもたらす激励だった。

「着物着る前にあんたもスレンダーにしてやるぁあああああああああああああああああ!!」

「や───め───て────巻いて畳たたまないでトゥアールちゃんの身体からだは帯じゃなおあああああああああああああああ!!」

　うーん、まだ筋肉痛が治ってないはずなのになあ。

　愛香はトゥアールをスパー相手に、リハビリをしているんじゃあなかろうか。

「総そうちゃん、客間の襖ふすまは少しだけ隙すき間まを空あけておくから……ね？」

　元・謎なぞめいた和服美少女が意味ありげにウインクしてくる。

　俺は丁重にスルーさせていただき、リビングでみんなが着替え終わるのを待つことにした。

◇

　スワンギルディは、残存部隊を立て直すべく奔ほん走そうしていた。

　まずは戦力の把は握あく。やはり、幹部級の戦士が部隊にいない現状、かなり戦力不足を痛感しているという。

　次に、これまでの戦闘データの閲覧。ツインテイルズが、続々と強化形態を手にしているのを知った。

　そして、神の一剣ゴー・デイア・ソードの介入についての調査。彼らはこちらの部隊に一切干渉することなく、独自に出撃しているということらしい。

　現状は芳しくない。今のスワンギルディの立場は、凋ちよう落らくした老舗会社の建て直しに派遣された、若手の雇われ社長といったところか。

「ツインテイルズも先の大戦の傷は癒いえたはず、気兼ねする必要もないでしょう。今は何より出撃することです、皆さん!!」

　スワンギルディが提案するのは、今までどおり誰だれ憚はばかることなく出撃すること。

　精神生命体のエレメリアンには、士気の低下がそのまま戦闘力の低下に直結するからだ。

　少し威厳こそ足りないものの、かつてドラグギルディが登壇台から皆に向けて熱弁するのを聞くだけだったスワンギルディが、今は同じ立場となっている。

　参謀スパロウギルディは、神童の成長を感無量の面おも持もちで見守っていた。

「やっほ～、みんな頑張ってる～？」

　むさい男空間に不釣り合いな、華やかな女性の声が響く。

「おお、マーメイドギルディちゃん！」

戦士たちに歓迎されホールに入ってきたのは、マーメイドギルディだった。

「……なっ……!?」

フェニックスギルディは、マーメイドギルディの研究室を破壊したと言っていた。何食わぬ顔で部隊に戻ってくるとは思っていなかったスワンギルディは、激しく動揺する。

やはり、この科学者は一筋縄ではいかない。

「あらあ、スワンギルディ君。もしかして隊長代理をしているの？　すごいじゃない！」

豊満な胸パーツを押し上げるように腕を組み、モデルのようにしなやかな足運びでスワンギルディの側そばまで歩いてくるマーメイドギルディ。

「……よくもぬけぬけと……!!」

他の戦士たちには聞こえないよう、小さく毒づく。温厚なスワンギルディにしては珍しく、怒気を隠そうともしていない。

「……皆様のご推挙、そしてドラグギルディ様の遺言に従い、私がこの混成残存部隊の指揮を執とります。至らぬ点が多いと思いますが、お力添えをいただければ」

「ええ、喜んで協力するわ。それと、私のことはマーメイドギルディちゃんって呼んで♪」

「……努力します、マーメイドギルディ殿」

笑顔のマーメイドギルディと澄まし顔のスワンギルディ、二体が激しく火花を散らしていることに、部隊の者たちは気づいていない。

しかし、せっかくいい雰囲気になってきたこの部隊で、大っぴらに喧けん嘩かなどするわけにはいかない。スワンギルディは視線を切り、ホール内のエレメリアンたちに提案する。

「そ、それでは誰だれか出撃を望む方はいらっしゃいませんか。元日で世界が穏やかになっている今こそ、我われらアルティメギルの

存在を人間たちに知らしめねばなりません!!」

　応おう、と力強い声がそこかしこから上がる。スワンギルディの拙つたなくも懸命な指揮に、エレメリアンたちも応こたえようとしてくれているのだ。

「私が行こう。誰よりも今日という日を待ち詫わび、鍛練を重ねてきた私がな！」

　出撃の要請に、鮮やかな翼を持つ一体のエレメリアンが名乗り出た。

「晴れ着属性ベストクロスのピーコックギルディ、推して参る!!」

属性玉 ―設定資料― 03

07 項後属性（ネープ）

持ち主 クラブギルディ

使用者の髪の毛を精密に操作することが可能となる。ただしこの属性玉単体での発動では、操作した髪で何か重いものを持ち上げるなど、力を要する行動は不可。元より自身のツインテールを砲撃時のアンカーロックにするなどして操っていたイエローが、さらにツインテールを精密に操作できるようにと一歩を踏み出すきっかけともなった属性玉である。

08 巨乳属性（ラージバスト）

持ち主 リヴァイアギルディなど

弾性を有した防御膜を生成する。うまく防御すれば攻撃を繰り出してきた敵ごと反射して跳ね返すほどその弾性は強力だが、大きさは僅か数十センチ、手持ちの小型盾程度。ほぼテイルイエロー専用の属性玉だが、その小ささ故に単体で使いこなすのは難しいようだ。なお、巨乳属性の属性玉の一つは、イエローのテイルギア製作の際ハイブリッド技術で組み込まれている。

09 貧乳属性（スモールバスト）

持ち主 クラーケギルディなど

強固な防御壁を生成する。大きさは数センチから人間大程度にまで調整が可能だが、大きくなるほど硬度は落ちる。そのため、強敵の攻撃では砕かれてしまうことも多い。が、手数で相手を押し込むブルーの戦法ではデコイとしても使いやすく、何より属性自体の相性がブルーと抜群にいい。何度もお世話になっているのに、悲しいかな本人はこの属性を忌み嫌っている。

第二章　お正がツインテール。

『着物、いいなぁ……私も着てみたいかも』

「――――はっ!?」

　俺はソファーで、ビクッと身体からだを震ふるわせる。睡眠中痙攣ジヤーキングってやつか。

　リビングでみんなの着付けを待っているうちに、うたた寝しちまってたのか？

　壁の時計を見ると……二〇分も経たってない。

　それにしても……白昼夢かもしれないけれど、今聞こえた声は――。

　そんな燻くすぶっていた眠気も、近づいてくる鮮烈なツインテールの気配で一気に吹き飛んだ。

　振り返った俺は、思わず目を見開いてしまう。

「お待たせいたしましたわ」

　晴れ着に着替えた慧え理り那なが、楚そ々そとした歩みでやって来たのだ。

「どうでしょうか、観み束つか君……」

　どうもこうも、言葉がなかなか出てこない。

　お嬢様の慧理那だ、俺たちの知らないところで普段も和服を着る機会は多いのだろうが……まだどこか、着慣れていない感じはある。

　しかし理事長のように普段から着こなしていたら、こんな感動は味わえなかっただろう。

「…………」

　無言の俺を見て、慧理那は申し訳なさそうな笑顔を浮かべた。

「やっぱり、お母様のように晴れ着は似合いませんわよね……。わたくし、子供っぽいですから……」

「あっ、違うんだ、見とれていただけで……」

「本当ですの？」

　一転して表情を明るくする慧理那。

　喩たとえるなら、名城の天守閣から嫋たおやかな笑顔で城下町を見下ろす美び姫き。

　こんな一般家庭のリビングを背景フレームとするには、あまりにも場違いすぎる。

　山吹色の晴れ着は、袖そでや裾すその先、帯などが赤でアクセントになっており、賀正に相応ふさわしい煌きらびやかさを主張している。母親と同じ花のかんざしで留とめたツインテールが、その明るさに負けじとしているのもいい。

　などと胸打たれている俺の側そばに、理事長がにこにこしながら歩み寄ってきた。

「どうです婿むこ殿、天上天下に咲き誇る慧え理り那なの美しさは！　もはや平日は三回、土日は七回、祝日は一〇回も容た易やすいですわよね？　今日は元日なので二〇回ですわ!!」

　ちょくちょく親馬ば鹿かっぷりを発揮するのがお茶目だよな、理事長は。

　回数は何のことかわからんが……。

「よいですか慧理那、あなたはまだ一人で完かん璧ぺきに着付けができません。つまり、一度脱衣すればもはや着直しは叶かなわぬということ。しっかりと見極めるのですわよ、脱ぐべき一と瞬きを」

「は、はい、お母様！　その瞬間をしかと捕まえますわ!!」

「いや一度たりとも脱ぐなよ!!」

　母娘の団らんに水を差すつもりはないが、ここはしっかりと伝えておきたい。

　しかし、こうして神しん堂どう親娘おやこが晴れ着で並ぶと、相乗効果で絵になるな。

「うう……会長すごい綺き麗れいだから、あたしが先に見せようと思ってたのに……」

　自身なさげな声とともに、愛あい香かもやって来た。

　ところが弱々しい声とその堂々とした着物姿の、何というギャップか。

「似合ってるじゃないか、愛香！　お前の晴れ着見るの、七歳の七五三の時以来だな！」

「ホント？　よかった……！　七五三の時のことなんて、覚えてるんだ」

　俺はツインテールと連動した記憶は絶対忘れない。「舐なめるのめんどい」と千ち歳とせ飴あめを速攻でバリボリ噛かみ砕いて食べていた子供の頃ころの愛香とは、雰囲気もツインテールも違うけどな。

　記憶と比べると、ツインテールも愛香自身も確実に成長しているのがわかる。

　愛香が着ているのは、藍色の落ち着いた晴れ着。穏やかな渓流を思わせる模様が特徴的だ。

　そしてツインテールを結んでいるのは、いつものリボンではない。赤とピンクの花飾りがついた、特別感のある髪留どめだ。

「――――そ、総そう二じさん、私も……着た……」

「ああ、イースナもバッチリだぞ！」

　いつの間にか俺の背後数センチに立っていたイースナに驚いたのをひた隠しにし、平静を装って評した。

　黒の晴れ着というと、どうしても落ち着いた大人の女性をイメージしがちだ。

　しかしイースナが着ているものには、大きな桜の花びらが全身にあしらわれており、子供の無邪気さも引き立たせている。

　普段から黒に「色負け」せず服を着こなしているイースナだ、当然黒の晴れ着も何ら違和感が無い。

　おさげ状のツインテールは、花のつまみ細工で風流に結んでいる。

「しゃ、写真撮ってください……。メガ・ネに送信する……」

　メガ・ネ、今日は遠えん慮りよしたのか。一緒に来ればよかったのに。

　その分、たくさん写真を送ってあげよう。

「それとね、下着……着けてないんです……。お、お尻しりのライン、綺き麗れいでしょ……？」

　愛らしくお尻を突き出してくるイースナ。どうリアクションすればいいんだろう。

「イースナ、全裸で外歩いても逮捕されない年齢のあなたのノーパンなんて、お毛毛ほどの価値もありません！　場の温めご苦労様です、後は引っ込んでいなさい!!」

　いや一二歳じゃ際どいぞ……。

　……と、心の中で突っ込みつつ振り返った俺は、一際大きな衝撃を受けた。

「──ど、どうでしょうか？　着物は初めてでしたので、張り切っちゃいました」

　白と銀が織り紡つむぐ、雪原の衣。実際そうだとはいえ、それはまるで、別世界からやって来た女神を思わせる。

　普段のトゥアールは、剽ひよう軽きんすぎてつい忘れがちだが……こうしていつもの見慣れたものと違う服装になると、改めて

実感する。彼女が、度外れた美少女であることを。

「びっくりした、あまりにも印象が違うから……すごく似合ってるよ、トゥアール!!」

「……。ありがとうございます、総そう二じ様」

　清せい廉れんな、気品溢あふれる微笑を浮かべるトゥアール。

　……何だろう。海に行った時もこんな風に水着を見せ合っていたけど、その時トゥアールはもっと元気よかったはずなのに。今日はどこか、しんみりとした雰囲気だ。

「私にも用意していただきありがとうございます、奥様」

　後ろでは、桜さくら川がわ先生が理事長にお礼を言っていた。

「むしろ、毎年勧めていましたのに、着ないのですもの。あなたがこうして元日にメイド服を脱ぐことができたのも、婿むこ殿のおかげですわね」

「……はい、奥様」

　桜川先生も、今日ばかりはメイド服から着替えている。

　瑞みず々みずしく萌える木の芽のような常磐色の着物が、大人の桜川先生によく似合っていた。

「決まってますね、桜川先生」

「そ、そうか……。ありがとう観み束つか、少し恥ずかしいな……」

　着付けができるという母さんも、当たり前のように晴れ着を着こなしている。

「ふふーんどう、総ちゃん？　母さんもまだまだいけるでしょ？」

「まだまだっていうか、普通に見た目若いよ、母さんは……」

　こんなに綺麗な晴れ着を着ても、みんなツインテールにしたままなのが最高だ。

　その上で、ツインテールを結ぶものを変えてきているのが、俺的にポイント高い。ポイント高いぞ……!!

　俺は常々疑問だったのだ。普段はツインテールの人でも、晴れ着にはそれに合わせて別の髪型に変えなければいけないという風潮。世にはびこる、無言の圧力が。

　晴れ着だからといってツインテールをやめる理由は、どこにもないんだ。

「……晴れ着とツインテールって合うなあ……って顔してるわよ、そーじ」

　愛あい香かがジト目で指摘してくる。さすが、愛香ほどのツインテールには俺の視線など容た易やすく看かん破ぱされてしまうか。

「むしろツインテールは、どんな服装にもマッチするだろ？　あらゆる祭事に映えるオールマイティな髪型であることを、強く主張するぜ」

　世の着付師の方々には、今一度ご一考願いたい。

　晴れ着には――ツインテールだろう、と。

「…………」

　早口で熱弁する俺を見て、トゥアールが少し肩を落としていた。

　母さん以外ではこの場で一人だけ和服ツインテールではないトゥアールだ、気分を害してしまっただろうか。

　けれどトゥアールはいつも、ツインテールにできない自分に周囲が気を使うことを嫌う。だから俺たちは、自然と遠えん慮りよをしないように努めるようになったのだが……。

　着替えたのを見せた時から大人しかったのも相まって、少し気になる。

　それは、愛香も同じだったのかもしれない。わざと煽あおるような口調で突っかかっていた。

「あれ？　何よトゥアール、テンション低いじゃない。着物でご自

慢の胸が目立たなくて、アドバンテージが無くなったから？」

「──目立たない？　おやおや、胸だけでなく視力まで薄くなったんですか？」

　トゥアールは愛香をジト目で睨にらみ返し、自信満々に胸を張った。目立たないどころか、胸は帯で持ち上げられて強調されている。

「おっくれてますねえ～愛香さんは。女性の平均バストサイズは時代とともに上がる一方なんですよ？　胸の大きな人が和服を着る時、胸に合わせて他に詰め物をするなんて手法、今はもうナンセンスです!!」

「ぐっ……！　和服でそんな乳袋みたいになるなんて……!!」

　ああ、前にトゥアールが言ってたなあ。直接のサイズというより、測定方法とか下着の補整が発達したおかげで、現代の女性の胸は大きくなってる──って。

　俺の身長も、その理屈でもう少し大きくならないかな……。

「それに婿むこ殿、トゥアールさんは自分で着付けをなさいましたのよ」

　意外なことに、理事長がトゥアールを褒ほめ始める。

「感心いたしましたわ、トゥアールさん。白銀の髪とは裏腹、麗うららかな大和乙おと女めの心を持っていらっしゃいますのね」

「っな……！　急に褒めたって母娘おやこ丼はさせませんからね！　だいたい、慧え夢むさんは知らないでしょうが、私は異世界出身とはいえこの日本に似た環境で育ったんですから！」

　条件反射で反論するトゥアールだが、理事長は笑顔を崩さない。

「婿むこ殿を巡って争っていることと、手練を讃たたえることは別のもの。あなたは綺き麗れいです、トゥアールさん。……無論、あなたに何を言われようとも母娘おやこの丼はきれいに盛り付けますわ」

「いや、あの……うう……」

　みるみる語調がしぼみ、ついには黙ってしまうトゥアール。

「トゥアールってホント褒ほめられ慣れてないわよね……。あと理事長、しれっと恐ろしいこと言いませんでした？」

　愛あい香かの追及を雅みやびな微笑で躱かわす理事長。

　褒められ慣れてないはずはないんだよな、トゥアール。

　この世界でのテイルレッドや、異世界の姫戦士ロロリーが、アイドル扱いなように……かつてトゥアールも、自分の世界でツインテールの戦士として喝かつ采さいを浴びていたのだから。

「観み束つか君の分も用意していますので、是非着てみてください!!」

「マ、マジか？　俺、みんなと違って絶対衣装負けするぞ……」

　用意してもらったからには……と、俺も母さんに手伝ってもらって晴れ着に着替えた。

　しかし。テイルレッドのパーソナルカラーに合わせてくれたのかもしれないけど、赤の紋服は俺には派手すぎるぜ、理事長……!!

「「「「「………………」」」」」

　呆あきれたのかな、女性陣が無言でガン見してくる。やっぱ上背がないと男の和服は決まらないんだよ……俺の勝手な意見だけど。っていうか、何でみんなそこまで眼めを血走らせる!?

「準備ＯＫね！　それじゃみんな、勝手口からじゃなくてお店通って外に出て頂戴ね！」

　背中を押すように皆を急せき立てる母さん。喫茶店に出た瞬間、俺はぎょっとした。

　店内には、お客さんが満杯だったのだ。

　個人経営の喫茶店なのに、正月から当たり前のように通常営業。店主である母さんが店に出ていないのに通常営業だ。今のこの店の営業形態って、どうなってるんだよ……。

　さては母さん、みんなの晴れ着姿を常連客たちに披露するつもりだな。

　喝采が起こり、晴れ着の女性陣が、まるで花道を歩くように店内を進んでいく。

「ほおお～これは……見事なものだね。さて、〝組織〟はどう動くか、な──」

「そう、覚えている……この輝きが、わたり歩いた〝時と空き〟の中に、確かにあった……」

　この人たちは何で正月から喫茶店に入り浸ひたってるのか。

　新年一発目から〝役〟に入り込めるそのバイタリティは、どこから来るのか。

「キモノ、キモノ！　コレスッゲーヨマジ!!」

　しかも、客層がどんどん多国籍になっていくのは相変わらずだ。

　カタコトで褒め称えてくれるおじさん、ニュースの首脳会談の映像とかでよく見る星条旗が似合いそうな人に見えるけど、とにかく見なかったことにしよう。

「オイルフィールド、オイルフィールドアゲマス」

　そしてすっかり常連になった油田あげるマンさんが、お年玉感覚で権利書を渡してくる。

「おほほほ、この晴れ着を一人占めしてるのがうちの総そうちゃんです」

　何な故ぜそこまで誇らしげなのか、俺の肩をパンパン叩たたいてくる母さん。

　まあ、母さんはあえて喫茶店のこの喧けん騒そうを俺に見せたかったのかもしれないな。

　先日潜くぐり抜けた戦いは、あまりにも過酷なものだった。こういう騒がしい日常を記憶に刻んで、大切にしなきゃいけないんだ、って。

……考えすぎか。

温泉旅行の時と同じく、神しん堂どう家の車で神社まで送ってもらうことになった。

家の前に停めてある、カーブを考慮していないかのような長大なリムジンに乗り込む。

運転席に桜さくら川がわ先生、真ん中の席には母さんと理事長、ボックス型の後部座席には、俺たち全員。恋れん香かさんは今日用事があって来れなかったが、この並びは温泉に行った時とほぼ同じだ。

「そういえば行き先を聞いていなかったけど、近場の神社に行くんですか？」

車が発進して少し経たち、俺は前の座席の理事長に行き先を尋ねる。

「うふふ、実は婿むこ殿――」

悪戯いたずらっぽい含み笑いとともに、理事長が答えようとしたその時。

アラートが鳴り、広い車内に反響した。

「うわぁ、エレメリアン出現しました……」

端末を白衣のポケットから取り出し、げんなりするトゥアール。

……やっぱ、着物の上からも白衣は着るんだ……。

「え――っ!?　勘弁してよ、元旦なのよ!?」

「せっかくこれからみんなで初はつ詣もうででしたのに……」

真っ先に不満全開の声を上げたのは、愛あい香かだった。慧え理り那なも落胆を隠せない。

「場所はこの、近くにある神社ですね」

詳細を端末に表示したトゥアールから、意外な情報が語られた。

「そこって、毎年あたしとそーじが行ってた神社だわ……あたしとそーじが」

　何故二回繰り返したのかは定かではないが、エレメリアンが現れたのは俺たちに馴な染じみのある神社だった。この辺だと一番でかい神社だからな。

　現場がすぐ近くなので、一旦基地に戻るよりもこのままリムジンでトゥアールの転送ペンの有効範囲まで送ってもらった方が早いと判断。車内でショートミーティングを行う。

「属性力エレメーラはさほど大きくありません、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士ではなさそうですね」

「じゃあ、ちゃちゃっと血祭りにして初詣に行こ！」

　これから初詣に出かける女の子が、「怪人を血祭りにする」と笑顔でのたまっているのが恐ろしい。

「狙ねらわれているのは多分、初詣客だろう……多くの一般人の前で戦うことになるな」

　かなりの人でごった返しているであろう現場を想像し、俺は頭を悩ませる。

　それに──

『着物、いいなぁ……私も着てみたいかも』

　脳裏を過よぎる、先ほどうたた寝をしていた時に聞こえた幻聴。

　俺は僅わずかな思案の後、決心を固めた。

　実は先月、復活エレメリアンと戦っている最中、あることを思いついていたのだ。

「イースナ。ちょっと頼みがあるんだけど、いいか？」

「……は、はい……？」

　きょとんとするイースナ。仲間の反応が少し怖いが、思い切って実行しよう。

「転送有効範囲に来ました。皆さん、ここで変身を！　現場付近に転送します!!」

　トゥアールが転送ペンを用意する。時間が無い……頼み事は現場に行ってからにしよう。

「よし行こうみんな、テイルオン!!」

　勢い込んで変身したのはいいが──

「狭っ……装そう甲こうが！　みんなの装甲が刺さるってば!!」

「ぎゃ──イエローの陽電子砲の砲口がわらわのお股に密着して危険なのじゃー!!」

「それどころか、わたくしの武装……車の天井を突き破ってしまいましたわーっ!!」

「潰れるー！　早く転送してくれ、トゥアール!!」

　いくら広いリムジンでも、全員で変身するのは無茶が過ぎた。

◇

「世界の諸君、新年おめでとう！　今年こそ属性力エレメーラをいただく!!」

　神社に到着した俺たちが見たのは、拝殿前の大広場で声を張り上げるエレメリアンだった。

　鳥に似た意匠の身体からだは染め抜いたような鮮烈な蒼あおで彩いろどられ、背中には目玉に似た模様を敷き詰めた羽根がマントの如ごとくなびいている。

　元日に似つかわしい華美な見た目は、縁起鳥のクジャクを思わせた。

　納得いかなそうな顔のブルー、笑顔のイエロー、ドヤ顔のブラックの順にエメレリアンの前に身を躍らせた。俺は三人に護送される

ようにしてその後に続く。

「現れたかツインテイルズ、新年おめでとう！　私は、晴れ着属性ベストクロスのピーコックギルディだ!!」

　俺たちの姿を認めるなり、きちんと新年のあいさつをしてくる。礼儀正しい奴やつだ……。

　晴れ着属性ベストクロスか……そりゃ今日来るよな、って属性だぜ。

「せっかく年末までおとなしくしてたんだから、せめてあと三が日が過ぎるまでそのまま出てくるなよ!!」

　俺はブルーたちの後ろから歩み出ると、長い袖をはためかせながら、ピーコックギルディへと指を突きつける。

「晴れ着溢あふるる今日のよき日、昂たかぶられずにはいられんな！　私は元日を誰だれよりも心待ちにしていたのだから!!」

　ピーコックギルディは高笑いを上げようと胸をそびやかしたが、何かに気づいたように硬直してしまった。

　そして俺を二度見して、鳩が豆鉄砲を喰らったように目を丸くする。クジャクなのに。

「……………………………………え？」

　そして、離れて見ていた一般人も、ほぼ同じタイミングで気づいたようだ。

　テイルレッドが、晴れ着を着ていることに。



　そう、俺がイースナに頼んだのは、彼女が善いい沙すな闇あん子こ状態でしていることと同じ、変身したままギアではなく別の服に着替える能力をテイルレッドに使ってもらうことだったのだ。

　今までの俺ならこんなこと、考えもしなかったけど……ホロウエレメリアンの一部が市街地に侵入したことも含め、最近世界中の人たちが不安になるようなことが多い。

　だから俺たちツインテイルズがいるぞ、安心してくれ、って世界に伝えたかった。

　正月なのもいい機会だし、特別な格好でアピールすれば効果抜群だと思ったんだ。

「みんな～！　あけましておめでとう～！」

　というわけで俺は思いきり開き直って、晴れ着をアピールする。手を振り、全方位に向き直って視線を送り、ポーズも取ってみたり。

　実はちょっとだけ、善いい沙すな闇あん子このライブパフォーマンスを参考にしている。

　くるくる回る途中でブルーと目が合った。「複雑な表情」のお手本みたいに複雑な表情だ。

「レッドたんが晴れ着着てるあああああああああああああああああああああ!!」

「こんな……こんなの見たらもう……俺の中の最後の扉が開けましたぜ!!」

「おめでとう!!」

「臨りん・兵ぴよう・闘とう・者しや・皆かい・陣ちん・烈れつ・在ざい・前ぜん……！　……ぐあっ駄目だ、数時間前に祓はらったはずの煩ぼん悩のうがすでに復活して……!!」

「可か愛わいい……か……かわ……ガガ……ピー……ｄｘ８ｎｚ０

＠ｍｌ＄ｖｂｚ……」

　気のせいか民衆の言語中枢が崩壊し始めているようだが、エレメリアンの脅威から意識を逸そらせたのは幸いだ。

「あああん、レッドちゃん可愛い――――――――っ!!」

「むう、和服女性たちよどこへ行……ぬはっ！」

　エレメリアンを突き飛ばして駆け出す、晴れ着の女性たち。

「今年から縁起物の一番はレッドちゃんに決定！　富士鷹茄子なすびびはお払い箱よ!!」

「レッドちゃ――んお年玉あげる――――――――っ!!」

　そのまま俺の元に殺到し、ぺたぺたぷにぷにわしゃわしゃともみくちゃにし始めた。

「わ――――――――助けて――――――――っ!!」

　入れ替えではなくオール更こう迭てつになった一富士二鷹三茄子に、心の中で謝罪する。

　うわっ、今日はいつも以上に……抱きしめられたり、胸を押しつけられたりの、密着度がやばい!!

　誰だれだ、今俺のツインテールにポチ袋挿してったのは!?

『ぎゃあああああああああああああああ可愛さを自覚したレッドたんクッソ可愛いですねえええええええええええええ！　ちょっと待っててください私もすぐ行きます！』

　移動中の車内でトゥアールが転げ回っているのが、通信越しに聞こえる……。

「だーかーらーあたしは反対したのよ、民衆を元気にさせるどころかパニックになるって！　案の定めちゃめちゃ女にくっつかれてるし、もう着替えさせなきゃ!!」

「いけませんわブルー、レッドは世界平和のためを思って頑張っているのです!!」

「そうじゃそうじゃ！　わらわの能力のおかげでな！　つーか可愛すぎじゃのう、変身前のわらわたちの晴れ着がかませ犬になりかねんぞ、あれじゃ……」

　俺の目的を知って離れて見てくれていたブルーたちだが、さすがにこの乱らん痴ち気き騒さわぎを見過ごせなくなったのだろう。詰め寄ってきた一般人を誘導し、十分に下がらせた。

「さすがだテイルレッド！　何という眩まばゆさ、まさに地上に舞い降りた御来光!!」

　ピーコックギルディはいつの間にやら、参道の石畳の上で正座して俺を凝視していた。

「確かに俺のツインテールは新年で気合いを入れ直した……ツインテール初日の出といってもいいだろう！　けれど、眩まぶしいのは新年を祝う人たち全てだ！　みんなのよき新年の始まりに心を奪おうなんて、絶対に許さない!!」

　俺が啖たん呵かを切ると、周囲の人々がわっと湧き上がる。

　アウェイ何するものぞと、ギャラリーの歓声を肩で切るように悠々と立ち上がるピーコックギルディ。

「テイルレッドよ……その素晴らしき晴れ着への返礼だ、受け取ってくれっ!!」

　ピーコックギルディがその色鮮やかな翼を広げると、見事な扇の形に展開された。現実のクジャクと同じような見た目だ。

　……って、クジャクがこんな風に大きく羽根を広げる時って──

「くっ、求婚されてこのノーリアクション……慣れすぎているな、テイルレッド！　先人たちが皆お前に求婚しすぎたせいだ!!」

　無言で適当にあしらった俺を見て、口惜しそうに翼を仕舞うピーコックギルディ。

「やっぱそういう意味かよ！」

　エレメリアンだけでなく、毎日のように桜さくら川がわ先生に婚こん姻いん届とどけ渡されてるし、異世界でも双子姫にプロポーズ

されたし……慣れるよな、そりゃ。

　あと俺に対してじゃないが、背負い物を広げる求婚はクラーケギルディもやってた。申し訳ないが、目にしてもそこまで衝撃を感じない。

「そろそろお披露目は十分でしょ？　せっかくの晴れ着なんだし、戦いはあたしたちに任せて、レッドは下がってて！」

　ブルー、イエロー、ブラックが並び立ち、俺とピーコックギルディとの間に割って入る。

　前にコスプレ好きなエレメリアンと戦ってウェディングドレスを擬似的に着せられた時も、同じ理屈で戦線離脱を言い渡されたっけ。

　男の俺にはピンと来ないことだけど、女の子にとって、お洒しゃ落れ着は血生臭い戦いの色で染めてはいけない神聖なものなんだろう。

　だがブルー、できればその気遣いをバトルスタイルそのものにも適応してくれ……。

「それと、貧乳も今回は大事を取って下がっておれ。ここはわらわとイエローがゆく!!」

「んー……わかった。あたしは民衆がレッドにくっつかないように見張っておくわ」

　コンディションを鑑かんがみての提案だろう。食い下がらず、言われたとおりにするブルー。

　イースナは最近よく愛あい香かの体調を気にかけてくれていて、頼もしい。

「お着替えはわらわの十八番じゃ！　何なら、餞はなむけにわらわの晴れ着も見せてやろうか？」

「ダークグ……いやテイルブラック、あな……お前が着物を着こなすには早い！　七五三としてしか見れぬわ!!」

　七五三な見た目になってるのは、今の俺じゃないのか……？

　残存軍の奴やつらはダークグラスパーとしてのイースナと一緒にいた時間が長いからか、たまにこうして彼女を上司として接しそうになる。

　民衆にブラックの過去が知られないか、ヒヤヒヤするんだよなあ。

「ふはははははは、それでけなしておるつもりか!?　七五三大いに結構！　『あなたは若くて可か愛わいいですね』と口にしているのも同然ではないか!!」

「ぬううう、お変わりなきポジティブ!!」

　もっとも、当のブラックはそんなやりとりを全然気にしている様子はないのだが。

「よしイエロー！　不審者などと誤解されがちなわらわたちじゃが、仲良しパワーでこのバトルを制し、民衆にクリーンなイメージをアッピルじゃ!!」

「ええ、積もった悪評は新年の訪れとともに消し去りましょう!!」

　イエローと並び立ち、ご機嫌な宣言をするブラック。

　こうして民衆の目を意識すると、逆にろくなことにならないのが常だ。

「自然体でいくんだぞ、張り切らなくていいからー!!」

　俺はやんわりとアドバイスするが、二人に伝わったかは定かではない。

「はぁっ!!」

　ピーコックギルディは気合い一発、天高く飛ひ翔しようすると、雲の高さで反転。

　大地の俺たち目掛けて、猛烈な速度で降下してきた。

　激震、そして轟ごう音おん……立ち込める土煙。さすがに周囲から悲鳴が上がる。

「ちいっ……！」

　咄とつ嗟さにブラックがダークネスグレイブを振るい、土煙を晴らす。地面には深さ数メートルの大穴が穿うがたれていた。ピーコックギルディはすでに煙に紛まぎれ、空に舞い戻っている。

　なかなかの速度だ、あいつ侮あなどれないぞ……!!

「ッ……参道に穴が……！　皆さん、もっと離れてください!!」

　それは、戦うイエローたちも肌で感じ取ったようだ。一般人に退避を促うながす。

「カメレオギルディと同じじゃな、戦闘力が強化された通常兵士のようじゃ……油断するな、イエロー!!」

　頷うなずき、ヴォルティックブラスターを構えるイエロー。

　二人の戦士を一いつ顧こだにせず、ピーコックギルディは空を旋回。またもや急降下してきた。

　今度は、離れている俺の方に向かって。

「貴様たちなどどうでもいい！　私の狙ねらいはテイルレッドだ!!」

　俺の眼前に降り、賽さい銭せん箱に小銭を投げた後のように力強く拝むピーコックギルディ。

「頼むテイルレッド！　和服の真骨頂、帯くるくる……通称『あーれー』をさせてくれ!!」

　真骨頂が低すぎる……和服を着ている全ての人たちに謝れ。

「だって俺、帯解ほどいちゃったら自分で着付けできないし……」

「着付けできないレッドちゃん可か愛わいい！」

「私が毎日着付けしてあげるよー!!」

　俺の呟つぶやきに反応し、ギャラリーが寄ってこようとする。離れなきゃ駄目だって!!

「問題はそこじゃないでしょレッド!?　公衆の面前で帯解いたら駄目なの!!」

　宣言どおり、ブルーはその抜群の威圧感で民衆が近づいてくるのを防ぎ始めた。

　不意に俺から視線を逸そらしたピーコックギルディが、ギャラリーの一人に目を留とめる。

「……ふむ？　いい和服でいらっしゃいますな、マダム」

　視線の先を追う。人垣の中に……理事長がいる！

　トゥアールたちが車で追いついて、戦いを見に来たんだ。

　隣では、母さんが手を振ってる。トゥアールは……俺を見てよだれを垂らしているな。

「重ねた年齢を感じさせぬ……いや、むしろ妙齢であるからこそ積み重なった和服との調和……妙齢をものともせず輝くツインテールがまた、素晴らしい!!」

　ピーコックギルディは、今度は理事長に向かって例の求婚の羽ばたきを向けた。こいつ手当たり次第だな!?

「ほう。このわたくしのツインテールを狙ねらうとは、なかなかの審美眼。しかし、人妻に求婚するとは笑止な！　平和を脅おびやかす怪人に心揺れるほど、我わが夫婦生活に不満無し!!」

　威厳ある口上に、周りのギャラリーから拍手が。貫禄あるな、理事長……。

「フッ……だとすれば如何いかがなさるかな、マダム」

「あなたを罰するのはわたくしではありませんわ。我が娘、テイルイ……」

「あ――――――――――――――――っと装ふ甲くが脱げましたわ!!」

　親馬ば鹿かのあまり理事長がうっかり正体をばらしかけ、慌あわてるイエロー。

咄とつ嗟さに誤ご魔ま化かした方法は……新年初脱衣だった。

何な故ぜイエローは、「手が滑った」レベルの気軽さで服がポロポロ落ちていくのか。

豊かな肢し体たいを露あらわにするも、逆にギャラリーは目を逸らして全く注意を引きつけられていない。

「おのれ、気やすく脱衣をするのは、和服への侮辱！　着付けの大変さを知っているのか、テイルイエローよ!!」

ピーコックギルディはイエローに不服を吐はき捨て、再び勢いよく空へと飛び立った。

「──わたくし、装ふ甲くの着付けでしたらこの場の誰だれよりも得意ですわ！　脱いだ服への心配は微み塵じんもありません!!」

今日のイエローは、脱衣してもはあはあしていない。

大切な母親を、憧あこがれた和服の大先輩を守るため、怪人へと立ち向かう。正義の雷が、そのツインテールにほとばしっているのがわかる。

「あれでいきますわよ、ブラック！」

「！　よし、任せよ！　完全解放ブレイクレリーズ!!」

僅わずかな合図で戦略を共有したのか、ブラックはダークネスグレイブを完全解放ブレイクレリーズして弓へと変形。集束させた属性力エレメーラを矢として番つがえる。

ピーコックギルディは自身の飛ひ翔しよう能力を活いかそうと空中に浮遊しているのだろうが……こういった人口密集地で戦う場合の俺たちにとっては、かえってありがたい。

人や建物への被害を考えず、高火力を発揮できるからだ。

「ダークネスバニッシャーッ!!」

ブラックが撃ち放った黒き光の矢は、唸うなりを上げて天へ昇っていく。さらに空中で弾はじけて膨張し、人間大の黒球へと変化した。あれならば、捕捉範囲はより広がる。

　ピーコックギルディは飛翔しながら十分に引きつけて急転回、難なくその黒球を回避した。

「私を一般兵と侮あなどるな！　お前たちツインテイルズの必殺技は我わが部隊で何度と映像で閲覧し、研究され尽くしているのだ!!」

　勝ち誇るピーコックギルディ。

　しかし、イエローの脱衣はすなわち、全身武装の一点集中化。

　ピーコックギルディの飛翔する先には──先回りをするように、合身巨大砲ユナイトウエポンの雷光を背にまとったイエローが飛び立っていた。

「ヴォルティックジャッジメント────────ッ!!」

「ぬ、う、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

　持てる力を振り絞って旋回し、ヴォルティックジャッジメントをも紙一重で回避するピーコックギルディ。

「……どちらの必殺技も躱かわしたぞ！　私の勝ちだ、テイルイエロー、ブラック!!」

　二度の回避で勝利を確信したのか、まずは必殺の蹴けりが不発に終わった直後のイエローへと攻撃しようとするが──

「──あなたが研究なさったわたくしたちの技は……戦いの中で進化して多くのバリエーションを持っていることも、ご存じですか!?」

「何ッ!?」

　イエローは不敵な笑みを浮かべる。蹴りの体勢のまま飛んでいく先には、先ほど外れたダークネスバニッシャーが交こう錯さくの時を待って向かってきていた。

「あれじゃイエロー！　蹴るやつ蹴るやつ!!」

　二人は、初めからこれを狙ねらっていたのだ。

軌道が逆Ｖ字を描くように互いの技を放つことで、躱された先で二つの技が合流するというわけだ。

高火力、高機動を誇る二人にとって、人口密集地での戦闘は持ち味を十分に発揮できない。

ならば障害物のない空中で、二重三重の連鎖攻撃で確実に捕捉する。

「たあああああああああああああああああっ!!」

イエローがオーバーヘッドキックの体勢で蹴けり抜いた黒球は、過あやまたずピーコックギルディに直撃した。

さすがのピーコックギルディも、合体技となって速度と威力が倍加した二人の必殺技までは回避できなかったのだ。

「み、見事だ……あけましておめでとう――――――――――――――――っ!!」

最後まで新年への祝意を忘れず、ピーコックギルディは大空高く賀正の日の丸となって爆発した。

「やったのじゃ、イエロー！　わらわたちのコンビネーション、どんどん息がピッタリになってきておるぞ!!」

「ええ、これならば世界中に胸を張って自慢できますわ!!」

一般人の目を気にするあまり、失敗するんじゃないかとはらはらしていたけど……二人の積み重ねたフォーメーションは、そんなにヤワじゃなかったみたいだな。

「……天晴あつぱれです、テイルイエロー」

戦士としての名をしっかり口にし、理事長も愛娘を頼もしげに見つめている。

「負けてられないわね、レッド。あたしたちも、コンビネーションを磨かなきゃ!!」

「お、おう……」

いや、だから俺たち、仲間が増える前は散々コンビネーション練習したじゃないか。だいたいブルーが突っ走って連係のしようがないから、諦あきらめて今日に至るわけで……。

さすがにそこまで狙ねらっていたわけではないだろうが……イエローとブラックの戦術は、一般人から見てもわかりやすい痛快さだった。勝利の歓声が、二人に贈られる。

よかったな二人とも、これで願いどおりイメージアッ──

「やりましたわご主人様！　ご主人様ご主人様ご主人様!!」

「だ──────────待て興奮するなイエロー、せっかく──」

興奮したイエローが、俺に抱きついて頬ほおを擦こすりつけてくるワン。

「やったのじゃやったのじゃやったのじゃ！　ついに戦闘で喝かっ采さいを浴びたのじゃ!!」

「お前は裾すそに顔突っ込んでくるなブラック！　そこはクローゼットじゃねー!!」

ブラックが着物の裾から頭を突っ込み、俺の脚の間で息を荒らげている。

ああああ……せっかくうまく行ったのに……いや、うまく行きすぎたから二人とも興奮して我われを忘れているんだ。

せめて二人のイメージが悪化しないよう、俺は帰る前にもう一度ギャラリーに向けて晴れ着を披露する。そして願わくば、この先また戦いが激化したとしても、今日のこのツインテールを忘れないで欲しい。

世界中の人々が笑顔になってくれるよう、精一杯の笑顔を振りまくのだった。

◇

　アルティメギル基地の大ホールでは、ピーコックギルディの戦いが中継されていた。

「……むう、ピーコックギルディ、敗れたか……」

「ですが、いい勝負でした！」

　褒ほめ上じょう手ずのスワンギルディが、ピーコックギルディの健闘を讃たたえる。

「何より……テイルレッドの晴れ着を見られたのは大きすぎる収穫だ!!」

「幸せだったであろうピーコックギルディ、これほどの手た向むけはあるまい!!」

　モニターに映し出される、晴れ着のテイルレッドの笑顔。

　居ても立ってもいられず、戦士たちは席から駆け出し、メインモニターへと殺到した。

「何という可か愛わいさか……俺があの着物に生まれなかったのが悔やまれる!!」

「この躍動感よ。テイルレッドの息遣いが、画面越しに伝わってくるようだ!!」

　巨漢の怪人たちが幼い少女の晴れ着に目尻じりを下げ、今にもモニターを舐なめ回さんばかりに縋すがり付く。

　限りなく控え目に言って、キモい光景だった。

「今までテイルレッドの変化といえば、どんどん装そう甲こうを着込んでいくことが常だった……よもや、我われらの幻術を受けるでもなく自らお着替えをしてくれるとは……ありがたや、新年!!」

　どれだけテイルブルーが絶望を振りまこうと、テイルレッドの可愛さが彼らの希望の光となって降り注ぐ。

　士気が昇り調子だったところにこのサプライズは、最高の景気づけとなったことだろう。

「見よ、人間界で人気のソシャゲ『いつでもテイルレッドたん』に、早速次回アップデートで『晴れ着テイルレッド』の実装が予告された！　正月だというのに勤勉な運営よ……!!」

　一体のエレメリアンが、スマホを取り出す。

　テイルレッドの晴れ着は人間界でも早速話題騒然になっており、様々な分野に衝撃を与えていた。彼女を題材にしたゲームが、いち早くその姿を出演させることを決定するあたり、計り知れない影響力が窺うかがい知れる。

「そうだな、ピーコックギルディが出撃してくれねば、テイルレッドの晴れ着という確率一％の最高レアカードは手に入らなかったのだ！　感謝しなければ!!」

「しょぼいわ！　一％という高確率でテイルレッドのレアカードが手に入るなら、それはもはやレアとは呼べぬ！　運営に抗議して確率をもっと下げさせい!!」

「みじめな独占欲を！　この程よい確率だからこそ、所持カード一覧画面をかぶったテイルレッドでいっぱいにできるのではないか!!」

　歓喜のあまり現実が課金ガチャになり始めた戦士たちが、意味不明な口論を繰り広げる。

　入手確率一％のカードがかぶって画面いっぱいに並ぶのは、しょぼくも程よくもない。それが可能なのは、紛うことなき破滅レベルの廃課金プレイヤーだ。

　ゲーム運営も、世界の侵略者が売り上げに貢献しているとは夢にも思わないだろう。

「おー、賑やかな基地だなー!!」

　その時、この終末感漂う男むさい空間に、あどけない幼女の声が響いた。

ギクリとして周りを確認する戦士たち。

何な故ぜ自分たちは、幼女の声が聞こえただけで身構えてしまうのか。

疚やましいところなど、何もないというのに。何もないというのに。

そして直後に戦士たちは、そもそもこの基地で幼女の生声が聞こえることが異常事態だという当然の事実に、一層身を固くする。

やがて、入り口から飛び跳ねるようにして一体のエレメリアンが姿を現した。

……が、小さい。それこそテイルレッドと同じぐらいの身長だ。

「ぬうっ……幼い……!!」

「ど、どこから来たのかな？　まさか、迷子ではあるまい？」

相変わらず女性エレメリアンには弱い豪傑たちは、おどおどしながら質問する。

しかもこれほど小さなエレメリアンなど、皆生まれて初めて見るからだ。

「僕は元・神の一剣ゴー・デイア・ソードのアポロギルディだぞ！　よろしくな!!」

元気よく挙手し、名乗り上げるエレメリアン──アポロギルディ。

白いローブを着ているが、フードは下ろして面貌を露あらわにしている。

怪人とはいえあどけなさのあるその顔は、ざっくりと切り揃そろえた短髪の女の子のような天てん真しん爛らん漫まんさを見る者に印象づけた。

「どしたー？　僕の顔に何かついてるかー？」

「いえ、神の一剣ゴー・デイア・ソードのお方は今まで一度も我われ々われと話してはくださりませんでしたので、驚いておりまし

て……」

　そもそも独自行動をしていた神の一剣ゴー・デイア・ソードは、ほとんどこの基地には来ていない。

　ヴァルキリアギルディはホールに姿を見せたが、話していたのは彼女が復活させた〝無毛でエイン勇ましき者ヘリアル〟だけ。残存部隊の戦士たちは、その場に無きが如ごとく無視されていた。

「あははー、みんなテキトーだからさ、許してやってよ！　そういう僕も、めんどいから神の一剣ゴー・デイア・ソードやめたぞ！　だから『元』なんだー！　自由だろ!!」

　さすがは幼いエレメリアン、生態レベルで自由を極めていた。

「してアポロギルディ殿は、何用でこの基地に？」

　戦士の一人が、訪問理由を尋ねる。

「テイルレッドってのに興味があって来たんだー！　邪魔はしないからさ、見学させてよ!!」

　除隊したからといって、一応組織内での立場は上のはず。その戦士をただ見学させるというのも、なかなか難しい話だ。戦士たちが困惑するのも、無理からぬことだった。

「やっほーみんな、ちょっと新しい発明してみ……た……」

　いつものように浮かれ調子で大ホールにやって来たマーメイドギルディだが、アポロギルディの姿を見るや、無言で立ち尽くしてしまった。

　それに気づき、大きく手を振るアポロギルディ。

「おおー、マーメイドギルディじゃんかー！　久しぶり！　研究はかどってるかー？」

「…………ええ」

　交こう錯さくする、二体の女性エレメリアンの視線。

　童女の如ごとき無邪気さを振りまいていたアポロギルディが、そ

の一瞬底知れぬ邪悪な光を双そう眸ぼうに灯ともしたことに──周りの戦士たちは、誰だれも気づかなかった。

そして、常に余裕を湛たたえていたマーメイドギルディが垣間かいま見みせた、大きな困惑にも。

◇

神社での戦闘から戻り、再びリムジンで初はつ詣もうでに向かう俺たち。

てっきり戦いの場になってしまったあの神社が目的地だと思っていたが、違うらしい。

そういえば、俺が理事長に行き先を聞いてる途中でエレメリアンが出現したんだっけ。

車は高速道路に入り、県を越える。先ほどの戦闘の反省会などをしつつ、しばしのドライブを経て──気がつくと、リムジンは巨大な鳥居の前に停まっていた。

鳥居の奥には、長く伸びた石階段が見える。かなり大きな神社のようだ。

しかし、それにしては参拝客が全くいないのが気になる。

「ここは神しん堂どう家に代々伝わる、神堂神社だ。参拝客は私たちだけだぞ」

桜さくら川がわ先生にそう説明されて、俺たちは車を降りる。

恐るべし、神堂家。

無人島に温泉に採掘場にと幅広く所有していたが、神社まであるとは。

「そして通称ツインテール神社とも言われていますのよ、婿むこ殿」

「ツインテール神社!?」

　その霊れい験げんあらたかな響きに、俺は胸をときめかせる。

「神堂家の婿になれば、まだ見ぬ神堂のツインテール施設の数々が、全てあなたのものになりますわ」

　理事長は、追い打ちをかけるように言った。

「ツインテール施設……!!」

　くっ……俺の中の冒険心をくすぐる、魅惑的なワードだ……!!

「それにしても水くさいぜ慧え理り那な……ツインテール神社なんてあるならもっと早く教えてくれれば、毎日でもお参りに来たのに」

「ま、ままま毎日!?　そ、それはつまり観み束つか君が……」

　両手で頬ほおを押さえて身をよじる慧理那。

「さすがに他県に毎日通うのは無理でしょ！　ほら、行くわよそーじ」

　愛あい香かは着物の袖そでを軽く捲めくると、俺に腕を絡めてきた。

「……って、何ナチュラルに腕絡めてるんですか愛香さん、距離感おかしくないですか!?」

「あっ……？　あ、ははは……階段長いから、そーじに引っ張ってもらおっかなって……」

　トゥアールに指摘され、俺からぱっと手を離す愛香。

　冬コミの時に肩を貸したから、その礼のつもりなのかな。

　長いといっても、ざっと見て一〇〇段とかそのぐらいだ。階段の段数で競っているような神社はその一〇倍ぐらいのところもあるので、比べるべくもない。

「あ……あ……」

　しかしイースナは、階段を見上げて涙目になっていた。

　ああ、普段引きこもりのイースナには厳しいかもしれないな……。

「！　見ろ愛香、あの鳥居……よく見ると、ツインテールだぞ!!」

　俺はたまらず駆け出して、鳥居を真下から見上げた。

「左右の柱が八の字に曲がって、ツインテールを描いてるんだ……よく考えられてるな！」

「ソウネ」

「ツインテール温泉もかなりのツインテール濃度だったけど、ここは別格だな……。受け継がれてきたツインテールをひしひしと感じるぜ」

「ソウネ」

　愛香もよほど感動しているんだろうな、生返事を繰り返すばかりだ。はは、白目まで剥むいちゃって。

　鳥居は、ツインテールの霊気のようなものを俺に叩たたきつけてくる。まるで審判の門だ。

　昔の俺だったら、怖じ気づいて踵きびすを返してしまっていたかもしれない。

　だが今は、連綿と受け継がれるツインテールにも堂々と胸を張って向かい合うだけの資格を備えたと自負している。

「おおお……鳥居が……社が……ツインテール神社が、婿むこ殿を迎えて鳴ふ動るえていますわ！」

「やはり総そうちゃんが、神しん堂どう家の〝予言に記された者〟だったようね、えむぴー」

　理事長と母さんが、突とつ如じよ天を振り仰いで打ち震ふるえ始めた。

　やっぱこの二人友達なんだなあ、って似た者同士感を覚えること

が、ままある。

　そうして俺たちは、長い階段を登って本殿を目指した。

　慧え理り那なも息を切らしているが、やはりイースナはかなり辛つらそうだ。

　ちょうど半分ぐらいまで来たところで、イースナが俺にしなだれかかってきた。

「そ、総そう二じさん……もう無理、です……おんぶ……」

「ああ、頑張ったな、イースナ」

　俺がすんなりイースナをおぶったのは、彼女が限界までは自分で頑張ったのが見ていてわかるからだ。

　昔ならあっさりギブアップか、最初から面倒がって他の方法を用いていたかもしれない。

　メガ・ネの気持ちがわかるぜ。日に日に成長していくイースナを見てると、親みたいな気持ちになっちゃうんだよなあ。

　しかし……重くはないけど、晴れ着の女の子をおぶるのはバランスを取るのが難しいな。

「イースナ、もう少し俺にくっついてくれないか」

「は、はい……」

　慧理那が、頬ほおを膨ふくらませてこっちを見ている。

「うー……」

　ひょっとして、慧理那がイースナをおぶってあげたかったのかな？　それは無茶だぞ。

「…………。こほん、ふ、ふう、ふう……」

　愛あい香かは本調子でない今ですら段数に手て応ごたえがなさ過ぎたのだろう、下駄なのに数段飛ばしで階段を登っていたのだが、こちらを見て急に息を切らし始めた。

「そ、そーじ？　あたしも筋肉痛が悪化して登れないから、おんぶしてほしいかな～？」

「筋肉痛を便利アイテムにしないでください愛香さん！　万全だったらこんな段数、逆立ちでも登りきれるでしょうあなたは!!」

「もうちょっと現実離れした喩たとえしなさいよ、そんなのできて当たり前でしょ!!」

　トゥアールの甘い突っ込みに、厳しい駄目出しが入る。

　……当たり前かな。当たり前でいいのかな。

　階段を昇り終えて参道を進み、手水ちようず舎やへと向かう。

「まずは手水舎で手と口を清める。基本だな」

　学生組に手本を示すように、手水舎の前で身を屈かがめる桜さくら川がわ先生。

　柄ひ杓しやくで掬すくった水を手に受ける。

　口をすすぐためにツインテールを掻かき上げる仕草が、大人っぽくて……綺き麗れいだった。

「愛香さんは入念に手を洗ってくださいね、暴力と殺さつ戮りくで罪に塗まみれているんですから」

「じゃあ洗っても意味ないわ、この先もあたしの拳こぶしは汚れるから……主にあんたの血で」

　神前で恐ろしい会話するよなあ……と思っていると、理事長が慧え理り那なに助言している。

「神しん堂どうの女は、もう一手間重ねねばなりません。両手と口だけではなく、その身を清めるのです。さあここで着物をお脱ぎなさい、慧理那」

「冬に外で裸は寒いですわ、お母様……」

　ツッコミ所違わないか、慧理那。

「尊みこと、あなたも着物を脱いで身を清めるのです。そしてこのわたくしも」

「し、しかし奥様、ここには観み束つかが!!」

　メイドさんも神堂の一員として扱う……理事長のこういうところを尊敬するんだよな。

　桜さくら川がわ先生を脱がそうとするのは普通に止めるけどな。

「……仕方ありませんわね……身の清めは別の機会に。ですがこの水は、ツインテールを清める効果がもっとも強いのですわ。皆さん、どうぞツインテールを」

　理事長に言われ、愛あい香かたちは手に受けた水で、ツインテールを清め始める。

　洗うというより、トリートメントを馴な染じませるような、優しい手つきで。

　みんながツインテールを清め終わった後、俺もちゃちゃっとテイルレッドに変身し、同じことをした。

　母さんと一緒に離れた所で待っているトゥアールを見て、俺は違和感に囚われる。

「……なあトゥアール、身を清めないのか？」

「――――はいっ!?　え、な、それって脱げってことですか!?　見たいんですか!?　言ってください脱ぎますそして水なんて使わずに濡ぬらします!!」

　目を見開き、獣けものじみた速度で俺に詰め寄ってくるトゥアール。

　それを迎撃せんと、清めた両手を早くも暴力に染める愛香。

「ち、違うんだ、ごめん、俺が悪かった！　そういう意味じゃないんだ!!」

　言葉が足りなかったので、必死に誤ご魔ま化かす。

俺の考え過ぎかな……こういう時トゥアールなら、『私はツインテールを洗えない代わりに身を清める方を実行しますね』、とか言って着物を脱ごうとするんじゃないかと思ったんだ。

本殿の前で一列に並んで立ち、俺が代表して鈴を鳴らす。

柏手を打ち、一様に願いを捧げる俺たち。

静寂が支配する……と思いきや、

「今年こそ処女卒業できますように今月中にロストバージンできますように今日押し倒されますように今すぐ肉体を求められますように!!」

トゥアールが何やら熱心に喋しゃべっており、隣の愛香は堪たまらないといった様子だ。

「いちいち口に出してんじゃないわよ気が散るわねっ!!」

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおさいせん!!」

意味不明な叫びを上げながら、愛あい香かのアッパーで賽さい銭せん箱にストライクされるトゥアール。

今の技のキレからして、今日の戦闘でブルーが体調を気遣われて戦線離脱する必要があったかは疑問だ。

神様も、願う人間そのものを賽銭にされても困るだろう。生いけ贄にえの巫み女こじゃあるまいし……。

願い終えて顔を上げた俺だが、右を見ても左を見ても、みんなまだ願い事をしている最中だった。

何となしに視線を彷徨さまよわせた俺は、スローモーションのように緩慢な時間の中で、胸を締め付けられた。

声に出していない、心の中の呟つぶやき。か細い願いのはずなのに。

何な故ぜか、トゥアールの唇くちびるが──「ツインテール」、と

紡つむいだように見えたのだ。

　───考え過ぎじゃない。やっぱり、トゥアールは─

「観み束つか君は何をお願いしたのですか？　一番早く終わったみたいですけれど」

　慧え理り那なに尋ねられ、俺ははっと我われにかえる。

「はは、俺の願いごとなんてシンプルなもんさ。『世界が、ツインテールでありますように』って」

「そーじはもう叶かなえてるでしょ、その願い。テイルレッドとして」

　愛香が、呆あきれて溜ため息いきをつく。

　…………叶ってないんだよ、愛香。

　あと一人、叶えてあげたい人が……この世界に、たった一人だけいるんだ。

「帰る前に裏の祠ほこらも見ていってくださいな、素敵な壁画がありますのよ」

　観光名所を案内するように先導する理事長が微ほほ笑えましい。

　連れられるがまま本殿の奥の道を進むと、しばらく歩いた先に立派な石造りの祠があった。

　桜さくら川がわ先生が懐中電灯を手にして中に入っていく。

　祠の最奥で、電灯に照らされた壁画を見て、俺は驚きよう愕がくした。

「ツインテールだ!!」

　歴史を感じさせる壁画には、雲の上に座る人間が描かれていた。

「だからそーじは何でもかんでもツインテールに見え…………るわね、これ」

　否定しようとした愛香も、絵をまじまじと見て考えを改める。

　古い……古いぞ、この絵。

　神しん堂どう家はこの壁画を発見したからこそ祠として奉り、そして神社を建てたのだろうが、これは明らかに有史以前のものだ。

　理事長は名物の一つぐらいに考えているようだけど……これ、考古学会で発表されたら結構な事件になるんじゃないのか。

　ツインテールとは、どれだけ歴史のあるものなんだろう。

「こ、この絵……テイルレッドに、似てる気がします……」

「そうですわね、ふわっと大きなツインテールですし」

　イースナと慧え理り那なは嬉うれしそうに壁画を評する。愛あい香かも苦笑しながら見つめた。

「そりゃ、テイルレッドのツインテールはオーソドックスな形だもん。ツインテールにしてる女の子の絵なら、そう見えても無理ないでしょ」

　誰だれも言い出さないということは、そう思っているのは俺だけなのだろうが……俺にはこの壁画に描かれている人物に、見覚えがあった。

　テイルレッドではない。

　ソーラに見えるんだ。

　等身で判断するには、この壁画はデフォルメされすぎている。むしろ、普通のツインテールの女の子なのか、テイルレッドなのかの判断すら覚おぼ束つかない。ギリギリ、髪を二つに結んでいることがわかるだけだ。

　それでも、この抽象的な絵が……ソーラという少女に重なって見えてしまうんだ。

「よし、そろそろ戻ろうか。おみくじがあるんだが、やっていかないか？　私は結婚運最高が出るまで引くつもりだ」

　桜さくら川がわ先生に促うながされ、俺たちは祠ほこらを後にする。突っ込みをおろそかにするほど、気がそぞろになっていた。

　真の究極のツインテール・アルティメットチェインへと覚かく醒せいした時。

　俺は、一人の女の子と対話をした。その子は自分のことを、女神だと言った。

『総そう二じならきっと、ツインテールでみんなを幸せにできる。諦あきらめて、逃げて、いじけちゃったばかな女神おんなのこを……見返してやって』

　俺がアクシデントで変わってしまっただけの姿。ソーラ。

　それなのに何な故ぜ彼女が、別人格のように幾度と俺の前に現れたのか。その理由を、ずっと考え続けてきた。

　俺は最後にもう一度、壁画を振り返る。

　太古の昔。ツインテールの女神というものが、本当にいたとしたら──。

第三章　未練なツインテール。

　ツインテール神社への初はつ詣もうでから一夜明け、二日の朝。

　アラームをセットした八時の前に目を覚まし、俺はベッドの上で大きく伸びをする。

　元日早々のエレメリアン出現には参ったぜ……。残りの三が日ぐらいはおとなしくしていて欲しいもんだ。

　自室を出て一階のリビングに下りると、母さんが朝食の準備をしていた。

「おはよー総そうちゃん。朝はおせちの残りで大丈夫？」

「ああ、大丈夫大丈夫。母さんもゆっくりしてよ」

　ソファーに座り、テレビのチャンネルをザッピングする。

　年始なので、普通はバラエティの特番が多いはずなのだが……全チャンネル、昨日の晴れ着テイルレッドを大々的に扱っていた。

　今回ばかりは俺もそのつもりで披露したんだし、いいんだけど。

　仕方なく適当なチャンネルで晴れ着のレッドを見ていると、しばらくして次のコーナーに移り、ツインテイルズ絡みの情報が紹介される。

　ぼーっと眺めていた俺は、そこに映った人を見て一気に画面に釘くぎ付づけとなった。

「デックさんが出てる！」

　思わず声を上げてしまう。

　デック・ニールソンさん。ハリウッドで撮影しているツインテイルズの映画でテイルブルー役を務める、世界的に有名な俳優だ。

　デックさんはその映画の撮影中、クランクアップ間近でスランプに陥おちいり、日本にやってきた。俺はひょんなことからそんな

デックさんと出で逢あい、交流を深めた。

　そして彼の前でテイルレッドに変身し、戦ったんだ。

　母さんや理事長など家族以外の一般人でテイルレッドの正体を知っているのは、デックさんと、その時助けた小さな女の子・あすかちゃんだけだ。

　ニュースで流れたのは、そのツインテイルズの映画のクランクアップ報告だった。

「……そっかあ、ついにクランクアップかあ……!!」

　新年早々、めでたいニュースだ。

　アクシデントで予定より完成は遅れたものの、想定よりもクオリティが上がったと監督は自負しているという。

　人生ってわからないよな。初めて映画製作のニュースを見た時は、ちょっと勘弁してくれ、って感じだったのに。今じゃ俺、こんなにも公開を心待ちにしてる。

　一緒に映っているテイルレッド役の妙齢の女優さんも、最初に見た時よりずっと穏やかな顔でインタビューを受けている。ツインテールを好きになってくれたんだろうな。

　その女優さんに続き、デックさんがコメントを寄せていた。

『こんな時代、自分にできることは少ないけど……まずは俳優としてのベストを尽くしたよ。この映画がツインテイルズの応援になれば最高さ！』

　……実際本人と会話した後でニュースの日本語吹き替えのアフレコ音声を聞くと、こういうのってわかりやすく大おお袈げ裟さに感情表現をしているんだなあとわかる。

『日本で素晴らしい人に出で逢あえたんだ』

『その人のおかげで自分の信念を取り戻すことができたのさ』

『このツインテールを、その人に捧げたいと思っているよ』

　ロングトークの中で、デックさんはそういったことを言っていた。

　その日本で出会った人って、俺のことだよな……嬉うれしいぜ……！

『これまで浮いた話のなかったデック・ニールソン氏だけに、その素晴らしい人とはプライベートで彼を支ささえる女性に間違いないと、関係者は確信しているそうです』

　映像はスタジオのＭＣに戻り、デックさんのコメントについて総括する。

　いや、報道が事実からとてつもなくフロートしてしまっているぞ。確信を急ぎすぎだろ。

『なお、原題「ＴＷＩＮＴＡＩＬＳ」が邦題では「テイルレッドたん」に変更される案も出ており、配給会社広報は「より多くの方に劇場に足を運んでいただくための施策」とコメントしています』

　色々大変だな、ビジネスって……。

　公開は３月末か……春休みには、みんなで観に行けそうだな。楽しみだぜ。

　地下基地から上がってきたトゥアールと母さんと三人で、朝食を済ませる。

　そして一〇時を回ったあたりで、愛あい香かが家にやって来た。

「そーじ、今日はどうする？　初売りにでも行く？」

　疑問形だけど、服がお洒しゃ落れな外出着なのを見ると、そのつもりで誘いに来たんだろう。

「身体からだの調子は大丈夫なのか？」

「ん、やっぱ不調だからって動かないのは駄目ね。昨日運動したから、だいぶ楽になった」

　昨日戦闘はしてないし、トゥアールとのじゃれ合いが愛香のリハビリになったのか……!?

「トゥアールも行くでしょ、初売り。準備して」

「えー、今日は家でごろごろしてましょうよー」

　トゥアールがリビングのソファーで言葉通りごろごろしていた。

　またもやパンツを丸見せにしている。

「普段頼んでもいないのにやたらアクティブなくせに、なんで祝日に限ってだらけてんのよあんたは！　そーじ、トゥアール置いて初売り行くわよ!!」

「あえてだらだら過ごすのが、最高に贅ぜい沢たくな年始なんです！　総そう二じ様、Ｂ級映画でも観ながらぼへーっと過ごしましょう!!」

　今日の過ごし方で対立する二人。

　トゥアールはパニックムービーとかディザスタームービーが大好きだもんな。

　それも巨額の制作費を投じたような大作じゃなく、パッケージだけ気合いの入ったどこかで見たようなＣ級Ｄ級映画が特に。

　愛あい香かはテーブルの上に新聞の初売りチラシを広げ、トゥアールは白衣のポケットから次から次へとＤＶＤやＢｌu-ｒａｙのパッケージを取り出して床に積み上げ始めた。

「これなんて面白そうですよ！　発売されたばかりの『ツインテール・シャーク』っていう映画！　もちろん安定のビデオスルー作品です!!」

「面白そうじゃないか！　観る観る!!」

　迫力満点のパッケージ画像だ！　ツインテールのサメ……かっこいいぜ……!!



「タイトルだけでアホ映画だって丸わかりじゃない！　駄目よそーじ、そんなの観るだけ時間の無駄！　こんなツインテールのサメなんて、現実にいるわけないんだから!!」

　愛あい香かには悪いが、俺の心は完全に初売りからサメに振り切れてしまっていた。

「俺たちは、異世界でツインテールのゴリラに出会っているんだぜ？　ツインテールのサメだって、決して想像上の生き物じゃないさ」

「サメには結ぶ毛がないでしょうがああああああああああああああ!!」

　愛香……最高のツインテールを持つお前だが、妙に現実主義者リアリストなのが惜しいぜ。

　ここではないどこかに、ツインテールのサメがいる……そんな愉快な空想をしたっていいじゃないか。眼鏡めがねをかけたサメ（着ぐるみ）なら、知り合いにいるし……。

「初売りにこだわってるわけじゃないのよ！　あたしはただ、そーじがこういう映画に毒されるのが心配で……！」

「大丈夫ですよ愛香さん、この手の映画には人に影響を与えるパワーなんてありません。あるのはただ〝虚無〟です。そこがいいんですけどね！」

「あんたの映画の楽しみ方はどっかズレてるのよ!!」

　買いたい福袋などがあって急いでるわけではないらしいので、愛香の方が折れてくれた。

「……じゃあ、それ一本だけね。観終わったら初売り行こ」

　折せつ衷ちゆう案に落ち着いたようだ。俺を真ん中に、三人でソファーに座る。

　視線を感じて台所の方を向くと、母さんがニヤニヤしながらこっちを見ていた。

　店はいいのか、どうせ今日もいるぞお客さんたち……。

「それじゃあ上映開始です、総そう二じ様っ！」

　トゥアールは俺に身体からだを寄せ、胸を押しつけるように腕を組んできた。

「当作品は私のおっぱいの感触が楽しめる４Ｄ仕様で……って、あれ……？」

　ちらっと愛香を窺うかがい、疑問符を浮かべて首を傾かしげるトゥアール。

「何よ」

　愛香はしれっとした表情でトゥアールを見返す。

　トゥアールは納得いかなそうにソファーから立ち上がり、俺を挟んで反対隣に座る愛香に詰め寄ると、ひそひそ囁ささやきかけた。

「……ど、どうして無抵抗なんですか愛香さん、総二様とめっちゃ密着しちゃってますよ？　取っちゃいますよ？」

「取る？　……ッフゥ～……。取る、ねえ」

「何ですかその上から目線!?」

　愛香は鼻を鳴らし、同じように小声でトゥアールに返していた。

「何か最近、心にゆとりができて……世界が広く見えるようになったのよね」

「はい!?」

「今となっちゃ、あんたとそーじを取り合ってた日々が懐かしいわ……。ま、あれはあれで、セピア色な青春の一ページだったわね」

「すでに過去形ッ!?　いったい何がこのゴリラをここまで増長させてしまったんですか!?」

　愛あい香かの側そばから飛び退のき、今度は大声で叫んで驚きよう愕がくに打ち震ふるえるトゥアール。

「誰だれですかこのゴリラを禁断の園に迎え入れたのはーっ！　知恵の実を与えてもゴリラはゴリラなんですよ!?」

　四ゴリラ（単位）までいってもアクション無しか。今日の愛香は機嫌がいいのかな？

「これからサメ映画でもっと脱力するだろうし、あんま体力使いたくないのよ」

　達観してるな……。

「期待値低すぎだぞ愛香。ツインテールでシャークなんだ、楽しめないわけないだろ？」

　正月からサメ映画ってのも、オツなもんじゃないか。

　……ツインテールありきで言ってるけど。

　というわけで俺は、ウッキウキで『ツインテール・シャーク』を観賞した。

　…………肝心のサメが、ほとんど画面に映らないままエンディングを迎えた。

　そしてその僅わずかな出番ですら、開いた口のアップだけ映すなどで頭部を誤ご魔ま化かしていた。

　トゥアールも愛香も全く動じていないが……この手の映画って、そういうものなのか。

　──なあサメ。ツインテール見せてくれよ。

◇

　いきなり戦闘で慌あわただしかったり、その反動でダラダラしたりと、浮き沈みのあった正月三が日が終わった。

冬休みは短い。来週にはもう、三学期が始まる。

そんなある日、総そう二じを除いた女性メンバー……愛香、トゥアール、慧え理り那な、イースナの四人は、地下基地のコンソールルームに集まっていた。

皆私服で、仕事の直後に飛んできたイースナは、善いい沙すな闇あん子この姿だ。

「ええと、揃そろいましたが……観み束つか君抜きで本当によろしいのですか？　トゥアールさん」

慧理那は真っ先にそう質問する。

元日のピーコックギルディとの戦いから数日、ほぼ一日おきのペースでエレメリアンは出現し続けていた。いずれも一般兵士だが、それまでのブランクを埋めるかのような高ペースだ。

今日もこうして集まる直前に、エレメリアンとの戦闘があった。

仕事中のブラックを除いたレッド、ブルー、イエローの三人で出撃するも、ブルーの独壇場。養生しすぎて力があり余っているとばかりに、あっさり一人でカタをつけてしまった。

その直後にトゥアールにコンソールルームに集まるよう請われたのだから、今日の戦闘についての話し合いと思うだろう。慧理那がリーダー不在を不思議に思うのは当然のことだった。

「それでいいんです。今日の会議は、男子禁制のガールズトーク。殿方ドン引きの生々しい罵ののしり合い必至……情念地獄と化すことが予想されますからね」

不穏な宣言をするトゥアール。

「そういうトークを総そう二じの前でするからこそ、面白いのじゃろうが」

イースナの言い分を鮮やかにスルーし、トゥアールは本題に移った。

「最近この蛮族が浮かれポンポコなので、そろそろトゥアール最高裁判にかけようと思いまして。慧え理り那なさんとイースナが陪審

員、トゥアールちゃんが裁判長兼弁護人です!!」

「……あたしが？　被告？」

　組んだ手の上に顎あごを載せ、面倒そうな態度で聞き返す愛あい香か。

「だっておかしいじゃないですか、今までの愛香さんは女の子っぽさなんて微み塵じんも無かったんですよ⁉　『野生の熊くまを素手で搾しぼってスムージーにしてごくごく飲んじゃうあたしマジ女子力高たけえゲハハハハハハハ』とか高笑いしてＳＮＳに写真アップするような人外だったんですよ⁉　それが最近、妙に色気づいてやがるんです!!」

「ふふ……そう見える～？」

　愛香らしからぬ媚こび媚びな声でそう返され、トゥアールは白目になる。

「むう、いつもならそんな侮辱を受けてはトゥアール自身をスムージーにしにかかるところであろうに……確かに、最近の貧乳にはどこか余裕が見て取れるのう」

「そうですよ！　以前だったら駄だ洒じや落れにかけてでも『そうじ好き』なんて言う度胸なんてなかったのに!!」

「それ、貧乳が大おお晦日みそかに言ってたやつじゃな。わらわも気になってたのじゃ」

　部室の大掃除での一幕を引き合いに出し、トゥアールの詰問は続く。

「私が総二様とイチャイチャしながら映画観てても全然怒らないし、なんか変です!!」

「え？　トゥアール、あれでそーじとイチャイチャしてたつもりだったんだ～」

　手で口くち許もとを隠し、ぷぷっ、とわざとらしく笑う愛香。

「ほらー！　ね⁉　ね⁉　おかしいでしょ⁉　偽物疑惑が飛び出しますよこの愛香さん!!」

「まさか、エレメリアンが津つ辺べさんに擬態していますの!?」

　おもむろに立ち上がると、ブレスを可視化させて構える慧理那。さすがに愛香は慌あわてて否定する。

「違うって！　大体、レッドならともかくあたしに化けようとする物好きなエレメリアンなんているはずないでしょ！」

　そして、否定材料に説得力がありすぎた。

「つまり、最近愛香さん自身に変化があったということですね。総二様との距離が縮まる、決定的な何かが」

　全員の視線が愛香に集中する。

「──ヴァルキリアギルディと戦う前、総そう二じ様と何があったんですか？」

　核心を突くトゥアール。

「極限まで凹へこんでたのに、ある日急に復活。大方総二様の励ましであっさり立ち直ったんだと思っていましたが……もしや、嬉うれし恥ずかしエロイベントでもあったんですか？」

「エロ……？　エロかなあ、ふふふー。もう少しロマンチックだったかなぁ」

　総二の目がないことでタガが外れているのか、この年末の間ずっと誤ご魔ま化かし続けていた浮かれぶりを全開にしている愛あい香か。

　最初はくだらなそうに距離を置いて見ていたイースナ、よく理解していなかった慧え理り那なも、事の重大さを認識し始めたのか、表情が険しくなっていく。

　トゥアールは、コードに繫つながった大小二つのリングをテーブルの上に置いた。ちょうど頭と腕に装着できるぐらいの直径だ。

「こういう時のために作っておいた発明品、〝アイカジハクサセール〟です！　強制自白のための拷問具ですが、うっかり愛香さんのソロプレイの内容でも聞き出したらトラウマになりかねないので、今まで封印していました！　これを今こそ正式ナンバーに加え、ア

ンチアイカシステム十四号とします!!」

　トゥアールのテンションに乗っかり、拍手する慧理那。

　裁判と銘打っておきながら、即座に凶悪な尋問具が導入されている。

「やめておきなさいよ～、隠しておいた方が幸せな真実もあるわよ？」

　口では嫌がりながらも、何な故ぜか愛香は率先して機械を引っ掴つかみ、あまつさえ自分で自分に装着してしまった。

「何で自分から!?　まさか、むしろ進んでバラしたいクチですか!?」

「バラしたくはないんだけどねえ～。トゥアールあたりショックで倒れるかもしれないし」

　もはや、詰問されたくて仕方がないという態度だ。

「あっこれ執行猶ゆう予よ無しのやつじゃ」

「真実を明らかにいたしましょう!!」

　陪審員のイースナ、慧理那も、完全に裁判長寄りとなる。

「先週のメディカルチェックでの全身スキャンで、まだ処女なことは確認済みです。総二様と一線を越えてはいないと思うんですが……この自信の根源を早く突き止めなくては」

「何処までチェックしてくれてんのよあんたはあああ!!」

　差しゅう恥ちのあまりか、ようやくいつもの調子を取り戻し始める愛香。その殺気に耐えきれなかったのか、アイカジハクサセールは自ら滅びを選ぶかのように激しく放電。アイカジバクスールへと変貌し、あえなく爆発した。

　愛香はこほん、と咳せき払いをすると、締まりのない笑みを浮かべる。

「実はね、あたし……そ、そーじと……キス、しちゃった♡」

「何な故ぜ機械ブッ壊しておいて自白シテールんですかこの人──」

　衝撃の波が遅れて到着し、トゥアールは全身を激震させる。

「──え……？　え？　キス……今、キスと言いましたか愛あい香かさん!!」

「うん、まあ……したのはほっぺなんだけど、唇くちびるに近かったし、これもうキスかな……って」

　頬ほおを手で押さえ、いやんいやんとかぶりを振る愛香。

「じゃあお前、総そう二じとちゅーしただけで浮かれてヴァルキリアギルディを血祭りに上げたのか!?　怖っ！　もう少し進展したら、照れて地面殴なぐって地球割りそうじゃぞこの女!!」

「だけって何よ一大事件でしょ!?　それに、い、一緒に寝た……し……」

「ほへー」

　一抜けたと言わんばかりに、テンション駄々下がりのイースナ。

　慧え理り那なも危き惧ぐしていた事態ではなかったのか、安あん堵どで胸を撫なで下ろしていた。

　だが、それとは裏腹にトゥアールは血涙を流さんばかりに歯を食いしばっている。

「あたしが不安だって言ったら、そーじが一緒に寝てやるって言ってくれたの。それで、眠ってる総二の顔があまりにもキスしやすそ……じゃなくて可か愛わいくて、ちゅ……って」

　実際には、帰ろうとした総二を愛香が一緒に寝ろと無理矢理引き留とめたのだが。

「ぐぬぬぬぬぬ……意識のない総二様に無理矢理キスを……堕ちるところまで堕ちましたね、淫いん虐ぎやくの蛮族!!」

「無理矢理じゃないわよ！　そーじもキスして欲しそうな寝顔してたもん!!」

　開き直りのような言い訳をする愛香。あの夜の記憶が、彼女の頭の中で神への反逆レベルでどんどん超改かい竄ざんされている。

　トゥアール裁判長は、反応の薄い陪審員に援護を求めた。

「慧理那さん、イースナ！　リアクション薄くないですか!?　みんなでこの性犯罪者に懲役八〇〇年くらい求刑しましょう!!」

　愛香がこれまでトゥアールにしてきた攻撃だけで加味すればそれぐらい累積していてもおかしくないが、今の争点はキス事件だ。

「だーって……もっとすごいことしたのかと思って期待してたら、ちゅーとか（笑）」

　ごくシンプルに、かつ的確に鼻で嗤わらうイースナ。

「何よ文句あんの!?」

「わらわ、とっくに総二とは一度ちゅーしとるし……一緒に寝るのも、数えきれんぐらいしたぞ。例の双子姫の夢通信に巻き込まれて、強引にちゅーされたりもしたしのう」

「あんたのはテイルレッドの時だし！　夢通信のはほっぺに押しつけただけでしょ!!」

　イースナを迎え撃つ愛香を見て、トゥアールは増援を急がせる。

「慧え理り那なさん、許せませんよね!?　総そう二じ様にちゅーですよ!?」

「一応、わたくしも観み束つか君とキ、キスをしたにはしたので……精神世界での出来事ですけれど、ちゃんと感触は覚えていますわ。観束君は記憶が曖あい昧まいなようですけれど……」

　愛いとしい思い出をなぞるように、唇くちびるにそっと指で触れる慧理那。

「……あ……あ……」

　今の自分の立場を理解したのか、トゥアールは口をぱくぱくさせて身体からだを震ふるわせた。

「……あれ？　ってことは……トゥアールだけじゃない？　あんた、キスもしたことないのに裁判長なんてやっていいの？」

「世の司法に従事する全ての人に謝りなさい非文明人!!」

　愛あい香かにずばり核心を突かれ、トゥアールの劣勢な突っ込みが続く。

「まさか……まさかまさか、年末からこっちず───っと私への当たりがおとなしかったのは、体調が悪かっただけじゃなく……見下してたんですか!?　一人だけ生娘の私を!!」

「全員生娘じゃぞ」

「キスの生娘ですよ！　キスバージン!!」

　怒りに任せてパワーワードを生み出すトゥアール。

「お二人のやりとりが、完全に普段と逆ですわ！　キスは……女の子をこんな風に変えるのですわね……」

　うっとりしながら二人を眺め入る慧理那。

「屈辱です……！　愛香さんに女として見下されるくらいなら、テイルギアの数百トンのパワーで殴なぐられた方がマシです!!」

　血煙になって消えるレベルだが、トゥアールの中ではそれで天てん秤びんが釣つり合うらしい。

　散々浮かれていた愛香だが、不意に真顔になり、トゥアールをまじまじと見つめる。

「どっちかっていうと、あんたにも裁判が必要じゃない？」

「な、何のことですか」

「確かにあたし、ちょっと浮かれてるかも。……けどトゥアール、らしくないのは最近のあんたも一緒でしょ？」

　またしても核心を突かれ、トゥアールは無言で俯うつむいてし

まった。

　力無く垂れ下がって顔を隠す美しい銀髪を見ながら、愛香は穏やかな声で提案する。

「愛香最高裁判開廷。被告トゥアール、悩みがあるなら打ち明けなさい」

「それは裁判じゃなくて、懺悔ざんげですよ……」

　ついに、刃引きをしたかのようにキレを失う突っ込み。

　トゥアールは愛香、慧理那、イースナと、順に視線を移ろわせてゆく。

「やっぱり、私だけいつまで経たっても総二様とキスできないのは……」

　そして自身の髪をそっと手で掬すくい取ると──ひどく憔しよう悴すいした声で、心情を吐と露ろした。

「……私がツインテールじゃないせい、ですよね……」

　しおらしい態度のトゥアールに驚き、皆はこぞってフォローに移る。

「おいおいおい何を凹へこんでおるのじゃ、トゥアールらしくもない！　往年の痴ち女じよっぷりを取り戻せばどうとでもなるわ！　最近控え目なのがいかんのじゃ!!」

「そうですわ！　わたくしに〝ちじょ〟の何たるかを教えてくださったのは、トゥアールさんではありませんか！　また一緒に〝よばい〟するのでしたら、お手伝いいたしますわ!!」

「いつもあたしを煽あおるだけ煽って自分は唐突に落ち込むの、ずるいわよ！　もっと向かってきなさい、トゥアール！　一回ぐらいあんたとターン制で殴なぐり合いっこしたいし!!」

「……皆さん……。ありがとうございます……」

　優しさ……優しさ？　に触れ、少し前向きな気持ちになれたのだろう。

「──決めました！　私……総そう二じ様の誕生日までに、総二様とキスします！」

　トゥアールは椅い子すから立ち上がり、勢い任せで宣言した。

「私が最後発だというなら、それまでの思い出を全部吹っ飛ばすぐらいの熱いキスにしてやりますよ！　こう、身体からだ全体使うような!!」

「決然と宣言したわりには、やたらと期日に余裕持たせとるのう……。総二の誕生日って、二月二日だったじゃろ？　一か月近くあるのじゃ」

「黙らっしゃイースナ!!」

　トゥアールの造語に、イースナが目を輝かせる。「気に入ったので自分も使おう」という笑顔だった。

　愛あい香かは満足げな笑顔で頷うなずき、ウインクをして人差し指を立てた。

「いいわ、その勝負受けて立つわよ、トゥアール。あたしはそーじの誕生日までに、そーじに告白コクる！　これでどう？」

「私が一人で宣言したのに!?　どうして何でもかんでも強引に勝負に仕立てあげるんですかこの戦闘民族は!?」

　慎ましくシャドーボクシングしている練習生を、プロが強引にリングに引っ張り上げるかのような蛮勇。その闘志に呼応し、さらなるチャレンジャーが名乗りを上げた。

「競ってみるのも面白いかもしれんのう。わらわも、ちゃんと男の総二と熱烈なキスをしたい。慧え理り那なも、精神世界などではなく現実ではっきりとキスしたかろう？」

「ええ！　お風ふ呂ろに一緒に入りましたし、首輪を着けてお散歩もして貰もらいましたし、わたくしもそろそろ心からの『好き』を観み束つか君に伝える時ですわ！」

　インデックスが乱丁を起こしているようなスケジューリングだが、慧理那もやる気だ。

「よーし、するのじゃ、キス!!」

「おー！　ですわ！」

　可か愛わいらしく拳こぶしを衝つき上げる黄黒コンビを見て、発案者の愛香も狼狽うろたえていた。

「な、何でみんなやる気になってるのよぉ……」

「愛あい香かさんのせいじゃないですかー!!」

　ひとまずトゥアールが元気になったのはいいことだ。しかし、彼女が皆を心配させぬよう無理に発奮して目標を立てたことで、愛香は逆に確信を深めてしまった。

　今度のトゥアールの悩みが、どれだけ深いものなのかを。

　たまにふと寂しげな表情を浮かべることはあっても、ツインテールに関して弱音を吐くことなど、ほとんどなかった。

　ツインテールでないことに無力感を覚えることはあっても、ツインテールでないことを言い訳にすることなどなかった。

　それは、自らツインテールと決別した彼女の矜きよう恃じであり、誇りだから。

　トゥアールは今、明らかに……ツインテールへの未練を持ってしまっている。

◇

　基地の大ホールで、エレメリアンたちがやんややんやと会議を繰り広げている、その時だった。

「みんなー！　お土産みやげ代わりに知り合いの神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士あげるからさ、この部隊で好きにこき使ってよ!!」

「「「「「えええええええええええええええええええええええええええ!?」」」」」

　アポロギルディが、また唐突にとんでもないことを言い出した。

　声を揃そろえて吃きつ驚きようするエレメリアンたち。

「えーと、君が隊長なんだっけ？」

　登壇台に立つスワンギルディに、人懐っこく近づくアポロギルディ。

「はっ！　現在この混成部隊の暫定的な指揮官を務めます、スワンギルディと申します！　誠心誠意──」

「めんどいから、暫定とか取っちゃえよ！　そーゆーのは、仮でなっちゃうような奴やつの方が案外向いてるもんなんだぞー!!」

「は、はあ……」

　ざっくばらんな言い回しだが、それを聞いた戦士たちは少し感心した。

　死線を潜くぐり抜けてきたスワンギルディが部隊の隊長に相応ふさわしいことは、この場の誰だれもが認めている。ただ、若い彼の遠えん慮りよを尊重して「今のところ」「一時的」などという冠を付けているだけなのだ。

　神の一剣ゴー・デイア・ソードという上位部隊の元戦士にお墨付きをもらえれば、これほど頼もしいことはない。

　この部隊の戦士たちは、傲ごう慢まんに独自行動ばかり取る神の一剣ゴー・デイア・ソードにあまり良い印象を持っていなかったのだが、アポロギルディを見て考えが変わりつつあった。

「な？　マーメイドギルディ！　勝手に隊長になるの、全然アリだよな？」

「…………」

　アポロギルディは唐突に、ホールの隅に寄り掛かっていたマーメイドギルディに話題を振った。マーメイドギルディは何も答えず、

お手上げのポーズをする。

「よーし、じゃあ、かもーん！」

　アポロギルディの陽気な声に誘われてホール内にやって来たのは、やはり白ローブをまとった二体の戦士だった。

　一体はかなり恰かつ幅ぷくのいい見た目で、もう一体は逆に細身だ。

「このコが部隊の隊長のスワンギルディだ、お前ら挨あい拶さつしろよー！」

　小さな子供のようなエレメリアンにこのコと呼ばれ、スワンギルディも弱り顔だ。

　固かた唾ずを飲んで見守る戦士たちの前で、巨体の方がフードに手をかける。

「メデューサギルディだ。よろしく頼む!!」

　男声だが、フードを下ろした途端、髪のようなパーツが背中に垂れ落ちる。腰まで届くそのパーツはあたかも、颯さつ爽そうとした人間の女性の長髪を思わせた。

　彫像のように彫りの深い頭部と、何ともアンバランスだ。

　隊長への挨拶を手短に済ませると、メデューサギルディはホールをぐるりと見渡し、視線で戦士たちを値踏みしていく。

「諸君。ツインテイルズ……いや、テイルレッドなる幼子に苦戦しているようだが……テイルレッドとは、貴様たちにとって何かな？」

　そして口を開いたかと思えば、奇妙な問いかけをしてきた。

「て、敵であり……女神でありますが……」

　彼らにとってテイルレッドは、強敵である以上に自分たちを輝き照らす女神なのだ。

　メデューサギルディは唇くちびるを固く引き結ぶと、厳おごそか

な面おも持もちで頷うなずいた。

「……半分合格としておこう。女神……それはつまり、〝妹〟だということだ。──テイルレッドを妹と讃たたえるのだ、闘士たちよ!!」

「メデューサギルディ殿は、妹を愛する属性なのですか？」

　スワンギルディが、恐る恐る尋ねる。

「その通り。地上でもっとも愛らしき存在……妹こそが、人類の最終進化形なのだ!!」

　どう返せばいいのか困り果て、乾いた笑いを浮かべる戦士たち。

　これまで交流がほぼ無かったため、この部隊の戦士たちはまだ、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士が押し並べて過激な思想を有していることを知らないのだ。

「あははー！　こいつバカだけど、気にしないで！　いいところもあるからさー！　多分」

　アポロギルディはとにかく楽しそうだ。

　彼女が連れてきた残りの一体はフードを下ろして面を露あらわにしようとはせず、挨あい拶さつを求められたのにいまだに一言も口を利いていない。

「俺はアポロギルディたんのお願いを聞いてあげるいいお兄ちゃんなのだ。遠えん慮りよなくこき使うがいいぞ、スワンギルディとやら！　何なら、お前は俺を妹と思っても構わないからね!!」

「ぞ……いや、さすがに……い、妹扱いは……失礼にあたりますので……」

　メデューサギルディの強こわ面もてで甘えられ、しどろもどろに

なるスワンギルディ。

「堅さの抜けぬ奴やつ。仕方ない、今夜一晩、俺と妹について語り明かそうではないか。明朝、お前は隊長としてもお兄ちゃんとしても一皮剥むけているだろう!!」

　ガタイのいいおっさんに気やすく肩を組まれ、スワンギルディは悲鳴を噛かみ殺した。

「あ、あの……メデューサギルディ殿は、妹が好きなのですよね!?　女の子の！　妹が!!」

「無論だ。しかし貴様、身体からだの傷痕から鍛きたえていることはわかるが、それでもまだまだ貧弱だな……ん？」

　いかつい手に似合わぬ、絶妙なソフトタッチでスワンギルディの背をさする。

「ぎゃあ!!」

　とうとう声を出してしまったスワンギルディを引っ張り、メデューサギルディはホールを出て行ってしまった。

　その場にいる全ての戦士たちは、無力感とともに神童を見送る。

「腐腐腐…………」

　ホールの隅に立っていた腐女子マーメイドギルデイがギラついた視線で見送ったことが、余計に戦士たちを不安にさせた。

　しかし、その一方でマーメイドギルディは、アポロギルディを油断なく注視することも忘れていなかった。

「……お目付役……それとも処刑人……？　いずれにしても、私もお尻しりに火を点けられちゃったってことかしら──首領様」

　この小さな残存部隊が戦力を拡大し、活気づいていく一方。

　アルティメギルという大組織そのものに、不穏な変化が起こりつつあった。

◇

　薄暗く、何もない空間。知覚できる夢、もう一つの現実の中を、俺は歩く。

　遅めの初夢は、夢通信として訪れた。

「お兄ちゃん……よかった！　無事だったんだね！」

「なかなか夢が繋つながらなくて……心配していたんだぞ!!」

　桃色のドレスに身を包んだ姉妹姫、ロエルとリルナは会うが早いか俺にしがみつき、今日までの不安を訴える。

　俺は、姉妹が貴の三葉ノー・ブル・クラブの復活の予兆を不安定な夢通信で伝えようとしてくれたあの日から今日までに起こったこと、その凄すさまじい戦いを語り聞かせた。

「──というわけで、世界を守りきることはできた。ありがとうな、前もって危険を知らせようとしてくれて」

「そっか……本当に、本当によかったあ……」

　安あん堵どのあまりか、崩れ落ちるように俺の胸に頭を埋うずめるロエル。

「貴の三葉ノー・ブル・クラブどころか、君たちが今まで倒したエレメリアンが根こそぎ復活してきて……それを乗り越えたのか。さすがだよ、ツインテイルズは」

　姉が甘えるとそれに対抗するように同じ行動を取るリルナもまた、俺にしなだれかかる。

「戦ったエレメリアンたちにまで力を貸してもらうなんて……夢みたいな出来事だったよ」

　眠りゆく子供に、御お伽とぎ噺ばなしを語って聞かせる気分だ。

「まさかキミは、エレメリアンを仲間だって思ってないよな？」

　不満げに口を尖とがらせるリルナ。この子たちの世界もエレメリアンの脅威に晒さらされたんだ、当然の反応だろう。

「その辺は、当のエレメリアンにみっちり釘くぎ刺されたからな。何をどうしたって自分たちはわかり合える存在じゃないって」

　ただ俺には、一つだけはっきりと言っておきたいことがあった。

「……でも、あいつらの心の力に助けられたって事実は、否定したくない」

　仲間とは呼べないかもしれない。でもあいつらは、いい奴やつなんだ。

　戦うことでしかわかり合えないのが、少し辛つらいけどな……。

「キミがそう思うなら、それでいいじゃないか」

「お兄ちゃんは、人間とエレメリアンの常識を変えちゃうぐらいすごい人だもんね!!」

　割り切れない男の我わが侭ままを、二人は無む垢くな心で受け容いれてくれた。

　胸に預けられた姉妹の頭を、左右それぞれの手で一緒に撫なでる。

　そうしているうちに、ロエルが上目遣いでもじもじし始めた。

「あのね、お兄ちゃん。ロエル、今日ぱんつ履き忘れて寝ちゃった……だから今も……ね？」

　ロエルはスカートを軽く捲めくり、太ふと股ももを露あらわにする。

「温かくして寝ないと、風か邪ぜ引くぞ？」

「……むー。お兄ちゃんって、いつまで経たってもロエルのこと、妹扱いなんだからぁ」

　可か愛わいらしく頬ほおを膨ふくらませるロエル。

「姉様が〝お兄ちゃん〟なんて可愛く呼んであげるから、つけ上が

るんだよ。こんな奴、総そう二じでいいんだよ、総そう二じで」

「リルナちゃんは、カレシさんみたいに名前で呼ぶ方がいいんだもんね？」

「違うよ！　敬う必要がないだけだよう!!」

　顔を真まっ赤かにして否定するリルナ。この姉妹は、いつ見ても仲良しだなあ。

「でも、妹でいいもーんっ。ロエルは将来、お兄ちゃんのお嫁さんになるんだから!!」

「ボクもキミと結婚するけど、勘違いするなよ総二！　王国の掟に従うだけだからな!!」

　お兄ちゃんって呼ばれるから妹扱いするんじゃなくて、この子たちは妹みたいに放っておけないから……どうしてもそう接しちゃうだけなんだけどな。

　そうしてしばらく話し込んでいたが、突然俺たちの身体からだの輪郭が淡く発光し始める。

　どちらかが夢から醒さめる合図。夢通信が終わる時が来たんだ。

「えへへ～、それじゃあ恒例の、バイバイのちゅーの時間だよー………………げ」

　一瞬、ロエルがとんでもなくやさぐれた表情を浮かべたように見えたが……俺の見間違いだよな。

　げ、とか言った気がするけど……まさかな。

「……いる……全員」

「全員？」

　ロエルは現実で眠っている俺の状況も多少わかるらしいが、何か見えたんだろうか。

　取り繕つくろうように笑顔に戻ると、ロエルはぱっと俺から離れた。

「何でもない！　じゃあね、お兄ちゃん！」

「……ね、姉様……バイバイのあれは？　姉様しないの？　ボクはどうでもいいｋ□□」

　残念そうな顔のリルナの言葉は半ばで途切れ、俺の意識は光の中に吸い込まれていった。

◇

「んん、ん～……――――うおっ!?」

　ベッドの上で伸びをすると、俺はすぐに自室の異変に気づいた。

「おはよ、そーじ」

　愛あい香か、トゥアール、慧え理り那な、イースナ、桜さくら川がわ先生がベッドの横に並んで立ち、じっと俺を見下ろしていたのだ。その理由は、時計を確認してわかった。

「結構寝過ごしてたな、もう一〇時か……」

　夢通信をしてる時は早起きしてしまうことが多いんだが、今日は珍しいな。

「き、今日は、午後からお仕事だから……午前中は、遊べる……」

　エロゲーの箱を胸に抱いて立つイースナ。そんな、仕事前に一杯みたいなノリで……。

　みんなイースナみたいに俺に用事があって、ここで待っていたんだろうか？

「夢通信、いかがでした、総そう二じ様？　ロリちゃんズは今日も可か愛わいかったですか？」

「えっ……何で俺が夢通信してたってわかったんだ!?」

　トゥアールは自信満々に答えた。

「ちょっと総二様のベッドを改造して、寝返りや呼吸状態を常にモニターし、通常の睡眠時との比較で夢通信に入っていることを察知できるようにしたのです！　なぁーに、健康管理機能のある時計のようなウェアラブルガジェットの一種と思っていただければ!!」

　健康管理の名の下に、本人の同意無しに睡眠を監視されてよいものだろうか。

　俺は心の中で、行きすぎた管理社会への警鐘を鳴らす。

「というわけで、総二様がロリちゃんズと夢通信していることがわかったので、早速お邪魔しにここへやって来たわけです！　……そしたら愛あい香かさんが来たんです！　続いてイースナが来たんです！　さらに慧え理り那なさんも来たんです!!」

「私も来たぞ、トゥアール。私もカウントしろ」

　こういう時仲間外れを嫌う桜さくら川がわ先生が、懸命に自己主張する。

「だけどトゥアール、俺を観察しても、夢通信は他の誰だれかと共有できないんだ……ごめんな」

「いえ、重要視すべきは、ロリちゃんズには総二様のガードが甘いということです！　彼女たちに逢あいたいというより、私は彼女たちに学びたい!!」

　力説するトゥアール。そりゃ、睡眠時だからガードは甘いと思うが……。

「ロリちゃんズを参考に、最適解は見えました！　やはり妹キャラこそ、包容力のある総二様がもっとも警戒を解きやすい存在！　今からトゥアールちゃんは、総二様の妹です!!」

　昨日何かあったのだろうか、やたらテンションの高いトゥアールは、唐突なメタモルフォーゼ宣言をする。

　そして人差し指を咥くわえてしなを作り、まるでロエルのような甘えた声で言った。

「総二お兄ちゃん、おしっこ連れてって？」

　俺は、声も出せずに固まる。

　程なく咳せき払いし、前髪を指で巻き取って……所在なさそうに視線を移ろわせるトゥアール。

「……さすがにこれは恥ずかしかったですね……」

「自分でやっといて照れてんじゃないわよ!!」

　円月の如ごとき軌道を描く鮮やかなスナップで、トゥアールの頭をはたく愛香。

「やーなーのーパンツ脱ぎたいのー!!」

　床に大の字に寝転び、パンツが丸見えの体勢で駄々をこねるトゥアール。明らかにこっちの方が恥ずかしくないか!?

「好きなだけパンツ脱げばいいでしょ地獄で!!」

　そして浮世離れした繰り言を手た向むけ、愛あい香かがトゥアールを締め上げる。

　桜さくら川がわ先生は腕組みをしながらふむ、と納得した。

「観み束つかが安心するというのならどれ、癪しやくだが私もトゥアールに倣ならってみるか」

　一瞬桜川先生までおしっことか言い出したらどうしようと身構えたが、

「お兄ちゃん！　結婚するぞ!!」

　自分の立場を変えただけで、他の全てはいつもと同じ求婚だった。

「ロエルと言ってること同じだけど、声が凜り々りしすぎて俺がお兄ちゃんには思えな……」

「何だと、私だって頑張れば幼い声も出せるぞ！」

　食い気味に反論し、残念そうに唇くちびるを尖とがらせる桜川先生に、俺はやんわりと事実を伝える。

「声以前に、桜川先生は雰囲気が大人すぎて、妹って感じじゃあないですよ」

「……ふふ、そうでしょうか？」

　ん？　慧え理り那ながやけに嬉うれしそうに見えるが……桜川先生が妹を演じているのを見て、微ほほ笑えましくなったのかな？

　その時、トゥアールの持つ端末から、無機質なアラートが鳴り響いた。俺たちは一様に表情を引き締める。

「エレメリアン出現です、皆さん!!」

　が、俺は何か物足りなさが拭ぬぐえなかった。

「……？　どうかなさいましたか、総そう二じ様？」

「なあ……いつものトゥアールのおっぱいは？」

　引き締めた真顔で、ついうっかりそう問いかけてしまう俺。

「えっ!?　いつもここにありますが!?　さあ顔面で触ってください!!」

　胸を両手で持ち上げ、凄すさまじい速さで俺に迫るトゥアール。

「いや、実物じゃなくてアラート！　変更されたならいいんだ……」

　弁明をする頃ころには、トゥアールはすでに愛香の手によって天井を顔面で触っていた。

　探知する端末によってアラート音が違ったりするから、必ずしも毎回そうだったわけじゃないんだけど……例の、俺の声を隠し撮りして加工した「トゥアールのおっぱい」三連発、最近聞かなくなったんだよなあ。

　もちろん、難色を示してたのは俺自身なんだ。変わるならそれに越したことはないが……あれだけ頼んでも意地でも変えようとしな

かったのに、何か理由があるんだろうか。

　些さ細さいな疑問はさておき、俺は状況を確認する。

「それよりエレメリアンだ……今日はどんな奴やつだ？」

　トゥアールはノートＰＣのキーボードを叩たたき、素早く情報を表示。画面を凝視する表情が、徐々に険しくなっていく。

「幹部級の強大な属性力エレメーラです……それも、二体!!」

「……ってことは、神の一剣ゴー・デイア・ソードか！」

　ここんとこ残存部隊の一般兵士ばかりが出現してたが、奴やつらも侵攻再開ってわけか。

　起きて寝間着から着替える暇ひまもなかったが、仕方ない……！

「こっから先の神の一剣ゴー・デイア・ソードは、いつ隊長格が出てきてもおかしくない。気を引き締めていこうぜ、みんな!!」

　注意を促うながし、俺は右腕にテイルブレスを可視化させた。愛あい香か、慧え理り那なもそれに続く。

「「「テイルオン!!」」」

「グラスオン……」

　赤、青、黄、黒四色の光が、俺の自室を包み込む。

　装そう甲こうをまとうと同時、激闘への覚悟もツインテールに籠こめ──ツインテイルズは出撃した。

◇

　出現場所は遊園地だ。折しも冬休みシーズン、客でごったがえしているだろう。

　速すみやかに避難を完了させないとまずいぞ。

　基地から転送ポイントへ飛び、数棟のビルの屋上を跳躍。程なく、遊園地を視認する。

　エレメリアンは……いた。観覧車の乗降口の前に、白ローブを着た目立つ奴が二体。しかもそのうちの一体が、中学生ぐらいの女の子数人ににじり寄っている……早く助けないと!!

「フッフッフ……さあ少女たちよ、このお兄ちゃんにうんと甘えるのだーっ!!」

「誰だれか助けてーっ！　もっとイケメンで細身でなで肩で身長一八〇センチぐらいでオシャレで可か愛わいいくせっ毛で色白で普段はクールだけど私の前でだけは子犬系なお兄ちゃんじゃなきゃやだ――――っ!!」

　な、何か余裕あるな、狙ねらわれてる女の子……。

「欲張りな妹だ！　幸い俺は、その全ての条件を満たしているがな!!」

　俺は想像以上に通常営業なエレメリアンに辟へき易えきしながらも、降下ざまに蹴けりを繰り出す。

「お前穴一つも空あけられねーだろそのビンゴ!!」

「むわああああああっ、せめて子犬系は認めてくれぬか!!」

　往生際の悪いことを口走りながら吹っ飛ぶエレメリアン。

　それでもバク宙して悠々と着地するあたり、神の一剣ゴー・デイア・ソードの高戦闘力が垣間かいま見みえる。

　俺は女の子たちを避難させ、エレメリアンの前に立ち塞ふさがった。

「ほうほう、これは……ふむふむ！　そうか、お前がテイルレッド……ふうふう」

　フードの奥で怪しく双そう眸ぼうを光らせ、鼻息荒くエレメリアンが俺に詰め寄ってくる。

「はあはあ……ふおおおおおおおおおお……ここまで妹だったと

は……!!」

　俺の周囲を小刻みに反復横跳びしながら、じろじろと見回してくる。

「気持ち悪いな、何だお前!!」

「……フッ……ハ――――――――――ッハッハッハッハ!!」

「何がおかしい!?」

「お前があまりにも妹として完かん璧ぺきだからだ、テイルレッド！　そうだ、妹の兄への想いは、まずは拒絶から始まらなければ！　運命の出で逢あいに、俺の全身を雷が貫いちゃったゾ!!」

　おかしいのは脳だったか……。

「俺は気持ち悪いかもしれんが―お前は可か愛わいい！　それでいいのだ!!」

　腰に手を当て、胸を張るエレメリアン。それでいいのかよ。

　離れて立つもう一体―白いローブを着ているので神の一剣ゴー・デイア・ソードなのは間違いないだろうが、そいつはこんな奇っ怪な挙動の仲間を前にしても、無反応だ。関わりたくないのか……!?

「レッド大丈夫!?　何かそいつ、ゴキブリみたいな動きしてなかった!?」

　ブルーとイエロー、ブラックも到着した。ブルーは早速、警戒心ＭＡＸだ。

　神の一剣ゴー・デイア・ソード相手の戦闘では、ギャラリーが遠巻きに見ていることすら危険だ。三人は周囲の一般人が速すみやかに避難できるよう、俺がこいつを引き付けている隙すきに先導を始める。

　エレメリアンは白ローブを脱ぎ捨て、その異様を露あらわにした。

「俺は神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士、メデューサギルディだーっ!!」

頭部からドレッドヘアのように垂れ下がる髪束のようなパーツは、その一本一本が夥おびただしい殺気を孕はらんだ蛇。

肩、腕、脚……いたるところに、やはり蛇が巻き付くようにパーツが形成されている。

全身を覆おおう鱗うろこの禍まが々まがしさは、爬虫類というよりはもはや竜のそれだ。

それら数々の禍々しい装飾に彩いろどられた、格闘家のように筋肉質な体たい躯く。

神話の魔物の代名詞ともいえる大怪物・メデューサの名に恥じない、魔的なまでの貫禄だ。

しかし、黙っていれば強そうなのに、こいつは黙ることを知らないようだった。

「さあて、俺が何の属性か……わかるか？　解答時間は三〇秒！　ドン！　チッチッチッ……ヒントは、妹のことが大好きな属性です!!」

「妹の属性って自分でバラしてんじゃねえかあああああああああああああああああああ!!」

「正解！　一〇〇〇妹ポイントプレゼント！　期間限定なので使用はお早めに!!」

俺に向けごつい拳こぶしを突き出し、サムズアップしてくるメデューサギルディ。

やべえ、久しぶりに超絶面倒なノリのやつが来た。ポイントは期限切れまで放置で。

「お前は打てば響くように突っ込みが返ってきて楽しいぞ、テイルレッド！　スワンギルディとやらと語り合った時は、結局一晩保たずに憔しよう悴すいしきってしまったからな!!」

……今、スワンギルディって言ったか？　神の一剣ゴー・デイア・ソードは、残存部隊と別行動してるって話だったが……あいつは違うのか。

「スワンギルディはまだなよなよしとるのか、わらわがメル友になって鍛きたえてやったのに」

　俺たちの話が聞こえてダークグラスパー時代を回顧したのか、やれやれと肩を竦すくめるブラック。スワンギルディの奴やつ、実は陰で滅茶苦茶苦労してたんじゃ……。

「妹を愛する属性……妹属性リトルシスター！　それが俺の力だ。その俺が保証しよう……テイルレッドよ、お前こそ全異世界の生命体にとって、最高の妹だと!!」

　ノリは最悪だが、威圧感がとんでもない。夢通信で妹がどうのと話した直後にこんな敵が現れるなんて、ほとんど予知夢だな。

「それにしてもテイルレッドよ、間近で見るとその恐ろしいまでの妹ポテンシャルに圧倒されちゃうぞ！　こんな可か愛わいい妹の存在を今まで知らなかったとは、一生の不覚だ!!」

　現在進行形で一生の不覚に陥おちいってんだろ、お前……。

「ふざけんな怪人、間近で見ねーとポテンシャルがわからねーのか!?」

「そうよ、テイルレッドちゃんはみんなの妹なんだから!!」

　市民の皆さん……気持ちはありがたいけど早く避難してくれ。

「うんうんそうだ！　それでいい、人間たちよ！　独占するつもりはない、テイルレッドは俺たちみんなの妹だ!!」

　あたかも己が度量を見せつけるかのように、人々の言い分を認めるメデューサギルディ。

「あれっ、何かあいつ、いい奴じゃね!?」

　ギャラリーが取り込まれかけている……！

「見たかテイルレッド、妹を愛する心はこうして無限に連鎖する！　強く気け高だかき妹属性リトルシスターの頂点に立つこの俺メデューサギルディこそ、最強のエレメリアンなのだ!!」

　自分の胸を拳こぶしで叩たたき、信念をほとばしらせるメデュー

サギルディ。

「最強と言っていますが……彼が神の一剣ゴー・デイア・ソードの隊長なのでしょうか？」

　一般人の避難誘導を一段落させたイエローが歩み寄り、俺に不安げに尋ねてきた。

「……いや、ないだろ」

　さすがにこんな軽いノリの奴が強部隊の隊長はないな。……ないよね？

　くっ、俺の脳裏で百ゆ合りの帝王がドヤ顔で笑っている……!!

「さて……兄きよう妹だいになった記念だ。お兄ちゃんと仲良く一緒に寝るか、テイルレッド!!」

「何言ってんだお前!?」

　ドン引きする俺を余よ所そに、諸もろ手てを叩いて戦闘員アルテイロイドを呼び出すメデューサギルディ。遊園地のど真ん中に、標準的なサイズのベッドが組み立てられ始めた。

　さらに戦闘員アルテイロイドの一人がモケ、と俺に枕を渡してくる。ハートマークのカバーつきだ。

「怖い映画を観て眠れないから、夜中にきゅっと枕を抱いてお兄ちゃんの部屋にやって来ちゃった妹というシチュで頼む!!」

　細かく状況を指定してくるくされお兄ちゃん。

　最近観たのは、あまりにもサメが出なくてある意味怖いサメ映画だったが……。

「率直に言って最悪だなこいつ」

　こいつらのこの手の奇行にはもう慣れっことはいえ、やはりげんなりしてしまう。

　っていうか、イエローとブラックはともかく、ブルーまでずっと無言なのが怖いな。

　こっそり横を伺うかがう。ブルーは額ひたいに皺しわを寄せすぎて、眉毛が一回転しそうになっていた。

「ねえ、もういいでしょ？　殺そ？　ね？　こいつ殺そ？」

　敵もやばいが、ブルーの殺気がいつも以上にやべえ……。

　その手にはすでに、進化装備エヴォルブアームズ・エターナルパッドが握り締められている。

「あんた如ごときがレッドと一緒に添い寝なんて、願うだけで極刑なのよ……!!」

「はー怖っ！　こんなに可か愛わいくない拗すねっぷりは初めて見たぞ！　テイルブルー、貴様のように妹とはほど遠い雄おゝおしき女傑の批難など、蚊に刺されたほども効かぬな!!」

「ほど遠くなんてないわよ！　あたしこれでも、お姉ちゃんがいる妹なんだから!!」

　はっとして周囲を見渡すブルー。

「テイルブルーが、妹……!?　え……いもう、と……!?」

「どんな姉ちゃんなんだ、身長一〇〇メートルあって口から火吐くんじゃねえのか!?」

　にわかにざわめくギャラリーたち。ブルーは人目を気にし、エターナルパッドを仕舞う。

「しまった、まだ結構いた！　もー、早く避難してって!!」

　正体秘ひ匿とくには常に細心の注意を払っているブルーが、家族構成という重大な個人情報についてうっかり口を滑らせるなんて……。

　相手のペースを乱す、メデューサギルディのこのノリはかなり厄介だぞ……！

　ようやく避難も完了し、周囲に人影はなくなった。

　メデューサギルディの強烈なキャラで戦場はしっちゃかめっちゃ

かだが、俺は未いまだにローブで全身を隠したまま不動の、もう一体のエレメリアンが気がかりだった。

　メデューサギルディを陽動に、何かしようってんじゃあないだろうな。

「テイルレッドが注目しているぞ。お前もツインテイルズにぐらいは自己紹介せんか」

　俺の視線に気がついたのか、メデューサギルディが連れの戦士に命じる。

「えーもう、めんどいよ、ししょー。……しゃーない、名乗るだけね」

　フードの奥から聞こえたのは、女の子の声だ。こっちは、女性型のエレメリアンか⁉

　襟えりを掴つかみ、空高く白ローブを脱ぎ捨てるエレメリアン。しなやかで細身な姿が露あらわとなる。

「弟属性リトルブラザーのカトブレパギルディ。好きなのは可愛い弟クンなんでー、ヨロシク☆」

　女性的なシルエットで、身体からだに棘とげばったパーツもないだけに、一際目立つのが頭部だ。

　小さな双そう眸ぼうの上にもう一つ、巨大な目が禍まが々まがしく光っている。しかもその一つ目は、カールされたつけまつ毛のようなパーツで装飾されており、一層不気味さが引き立たされている。

　名乗るが早いか、カトブレパギルディはコンパクトを取り出し、鏡に自分の顔を映した。

「～♪」

　鼻歌交じりに、一つ目パーツにアイプチを施ほどこしていく。

「エレメリアンが、お化粧をしていますわ!!」

「まあ、エレメリアンでも化粧はするのう。わらわ、アラクネギル

ディの門下生が一斉に化粧してるの見て、夢にうなされたことあるし」

　イエローは衝撃を受けているが、ブラックにとっては特に珍しくもないらしい。

　そういえば最初にアラクネギルディと戦った時、死合いに臨のぞむ武士の嗜たしなみとか言って、あらかじめ死に化粧をしていたっけ。一応、お洒しゃ落れに気を使う奴やつはいるんだな……。

「あんたの方は、ブラコンってわけ……へー……弟好き……ふーん……」

　何だ、ブルーがカトブレパギルディを見る目が急に鋭くなったぞ。

　久々の強敵を前に、正義の心を熱く燃やしているのか……!!

「お前ら、正反対の属性じゃないか。どうして師匠ししょーなんて呼んでるんだ」

　俺は腑ふに落おちず、カトブレパギルディに問いかけた。巨乳属性ラージバストと貧乳属性スモールバストみたいに、対極の属性を持つエレメリアン同士は、むしろ反目することが多いのに……。

「そりゃししょーは鬼キモいけど、学ぶとこはけっこーあるしー」

　カトブレパギルディは戦闘どころか俺たちにすら興味がないという風に、化粧を続ける。

「私には構わなくていーよ。私が弟クン探しするのは、いつも任務が全部終わった後だからさー。今はししょーのお目付役でついてきてるだけだから～」

　こいつが本当に何もしないというなら、やはり先にメデューサギルディを集中撃破するべきか。俺はフォースリヴォンに触れ、ブレイザーブレイドを手にした。

「そんなに見つめるな妹よ――照れるではないか!!」

　メデューサギルディへと攻撃を仕掛けようとして、俺は異変に気づいた。

何だ、これは……!?　脚が、地面に縫ぬい付けられたように動かない。

いや、脚だけではない。腕も、身体からだも、頭も……まるで、全身が蝋ろうか何かで固められてしまったかのように、ビクともしなくなっていた。

目め端はしだけで仲間を窺うかがうと、やはり身体を動かそうともがいている。

「効いてきたようだなツインテイルズ！　我わが魔ま眼がん、〝愛しき妹へ捧ぐ熱視線アイマイアイギス〟が!!」

「魔眼だと、これはお前の能力か……!?」

メデューサギルディは自慢げに己が双そう眸ぼうを指差し、その能力の成り立ちを語る。

「妹は可か愛わいい……いつ何時も、守ってあげたくなる！　だが俺が見ると、妹たちは嫌そうにそっぽを向く……これでは危ない、俺の方を向いてもらわねば！　俺は懸命に妹を見続けた！　いつしかこの眼めは捉えた全てを硬直させる、呪のろわれた魔眼と化したのだ!!」

「最悪だこいつ――――――――――っ!!」

「やばい！　やばいやばい！　こんな変態に金縛りにされるなんて、何されるか……!!」

俺の絶叫を皮切りに、ブルーたちも激しく狼ろう狽ばいし、何とか能力を脱しようと暴れ始めた。

しかし、どれだけ全身に力を込めても、僅わずかな身み動じろぎとなるので精一杯だ。

この窮地に、ブラックが仲間たちを鼓舞し始めた。

「みんな、メデューサ神話の顛てん末まつは知っていよう……！　勇者は石化の呪のろいを避けるべく、盾たてに敵の姿を映して見事討ち取ったという……！　この場で盾の役割を成すものといえば、ブルーの貧乳むねをおいて他にはない！　全員で、ブルーの胸を見るのじゃ!!」

「あんたもそろそろ一回トゥアールみたいな目に遭わせた方がよさそうね……」

「ぎゃ――――――――――盾が殺害予告してくるのじゃ――――――――――っ!!」

　ブルーの標準装備である魔眼ガンつけに恐怖し、金縛り状態のまま身体からだをもがくブラック。

　そもそも石化してから盾見たって、勇者ペルセウスは勝てねえよ!!

　為なす術すべの無い俺たちへ、勿もつ体たいつけてゆっくりと歩み寄ってくるメデューサギルディ。ついに俺の眼前に立つと、俺の頭上に掌てのひらをかざした。攻撃を受ける覚悟をした、その瞬間。

「──薄い本展開を敢行するなら、そこの薄い胸の人にしなさい、メデューサギルディとやら！　レッドたんには指一本触れさせません!!」

「むう、何なに奴やつ!!」

　空に響く凛り々りしい声に、いいリアクションで振り返るメデューサギルディ。

「私は世界をわたる復ふく讐しゅう者、仮面ツインテール!!」

　腕組みをして観覧車の入場アーチの上に仁王立ちする、白衣の仮面少女。

　仮面ツインテールに意識を削そがれて集中が途切れたのか、メデューサギルディの魔ま眼がんの効力が消える。俺たちは身体の自由を取り戻し、勢い余ってめいめいにつんのめった。

　新年初仮面ツインテールは軽やかにアーチから飛び降りると、メデューサギルディを指差して問い質ただした。

「神の一剣ゴー・デイア・ソードは、割りと攻めた属性の戦士が多かったはず！　何な故ぜ、妹属性リトルシスターなどという殿方なら誰だれしも多少素養があるような、メジャーな嗜し好こうを持つあなたが在籍しているのです!!」

「えっ……そうなのレッド、妹が……お姉ちゃんがいる女の子がいいの!?」

　仮面ツインテールの発言を受け、ブルーが俺に質問してくる。さっきから迂う闊かつすぎるぞお前、今の女の姿の俺にそんなこと聞くなって!!

「そういう仮面女よ、お前には妹としての素養がまだまだ足りないぞ！　妹ポイント一〇倍キャンペーンに、エントリーをし忘れたようだな!!」

「あいつ、妹好きの総本山のエレメリアンに失格の烙らく印いん押されちゃったわ……今朝の血迷った妹ごっこは完全に徒労に終わったみたいね……」

　この隙すきに、ブルーは大きく飛びすさった。魔眼の有効範囲を予測し、それを再びかけられることがないよう距離を取ったのだろう。

　ただ、今朝のおしっこ発言はそろそろ忘れてやってくれ。

　しかし、追撃はなかった。仮面ツインテールの乱入で、メデューサギルディたちもすっかり戦意を削そがれたようだ。

「ししょー。今日はこのぐらいで帰りましょう。アポロギルディに怒られますよ？」

「むむ……まあ、怒ったアポロギルディたんもキュートだがな!!」

　……アポロギルディ？　誰だれだ、こいつらの仲間か……？

　メデューサギルディは自分の背後に転送ゲートを展開。その中に入って行く前に、もう一度仮面ツインテールを一いち瞥べつし、

「──素養が足りないと言ったが、妹になれないとは言っていない。仮面の少女よ、妹とは存分に甘やかされ、庇ひ護ごされるべき存在……そういう生き方もあるんだゾ？」

　含みがあるような薄笑いを浮かべながら、そう呟つぶやいた。

「…………!!」

　動揺したのか、よろける仮面ツインテール。

「ハハハハハ、今日は直じかにお前を見られただけで十分だ、テイルレッド！　また会おう!!」

　極彩色のゲートの中へと消えていく二体。

　下手に引き留とめて戦闘を続行するには、メデューサギルディの能力は危険すぎる。

　俺たちは、黙って奴やつらを見み逃のがすほかなかった。

「今日はこのぐらいって何よ、あたしたちをおちょくりに来たの、あいつら!?」

　ブルーも、振り上げた拳こぶしの遣り場を失って苛いら立だっている。

　仕方なく帰ろうとした俺は……仮面ツインテールの肩が震ふるえていることに気づいた。

　その表情は……仮面に隠れて、窺うかがうことはできない。

◇

「また、とんでもない奴が現れたな……」

　地下基地に帰投し、コンソールルームに移動した俺と愛あい香か、慧え理り那な、イースナ。

　勢いのある相手だったせいか、まだきちんとした戦闘にはなっていなかったというのに、何体とも連戦した後のようにどっと疲れた。

　すでにトゥアールは、モニターにメデューサギルディたちの情報を表示している。

　イースナに呼ばれたメガ・ネも合流し、今後の対策を練ることになった。

「弱りましたね……。神の一剣ゴー・デイア・ソードレベルの戦闘力の敵があああいう来ては逃げ、来ては逃げ戦法をするとしたら、捕捉するのが困難です」

「プテラギルディの時みたいに、罠わなを張るしかないか。何度か追いかけっこするのは覚悟しないとな」

　速攻でケリを着けたいのは山々だが……また長丁場になるかもしれない。

「それにしても、やっぱりレッドちゃんが狙ねらわれるんやねえ……妹の属性なんやっけ？」

　心配そうに俺を見てくるメガ・ネ。

「テイルレッドは小さな女の子だし、お母さん扱いよりはまだ納得できるけどな……」

　俺は、さっき話題にしたプテラギルディのことを思い出す。あいつは追いかけっこを楽しもうとして飛んで逃げるから捕まえられたけど、今回はゲート展開して即逃げだからなあ……。

「あたしはカトブレパギルディの方が、行動が読めない分気がかりだけどね。欲を出さないのがポーズに見えて、かえって怪しいっていうか……」

　愛あい香かは一貫して、伏兵のカトブレパギルディを警戒しているようだ。

「トゥアールだってしょっちゅう女の子追っかけてるし、メデューサギルディの同類みたいなもんでしょ。現に、何か妙に気にかけられてたみたいだし……。あいつの思考パターンとか先読みして、待ち伏せできるんじゃない？」

　愛香の発言で空気がひりつくのを感じ、俺ははっとした。

「いや、メデューサギルディは誰だれでも妹扱いしてくるような奴やつだから──」

　咄とつ嗟さに口を挟もうとしたが……遅かった。

「────私が……エレメリアンと、同類……!?」

　俺の言葉を遮さえぎり、トゥアールが震ふるえ声で反論する。

「あんな化け物たちの考えてることなんて、私がわかるはずないじゃないですかっ!!」

　ついには椅い子すを倒しかねない勢いで立ち上がり、愛香に激情をぶつけた。

　しばしの間、沈ちん鬱うつな静寂が支配する。やがて愛香は、神妙な表情で頭を垂れた。

「……ごめんね、トゥアール。あたし、そんなつもりじゃ……」

　トゥアールははっとして後あと退ずさると、芝居っぽい態度でそっぽを向いた。

「……な、何殊勝になってるんですかもう！　いつものやりとりじゃないですか、全く……」

　乾いた笑い声が、コンソールルームに空むなしく響く。

「すみません……私、疲れてるみたいなので一足先に休ませていただきますね……」

　それだけ言い残すと、トゥアールは足早にコンソールルームを後にしてしまった。

　まるで、逃げるように。

「……マズったなあ、あんなショック受けるなんて……」

　自分の額ひたいを拳こぶしで小突き、反省する愛香。

　確かに少し軽率だったが……あの程度の軽口、トゥアール自身も冗談の範はん疇ちゆうでよく戦闘会議中に口にしたりする。

　いつものトゥアールなら、さっきの愛香の発言にも冗談で言い返しただろうが……。

「……トゥアールさん、最近ナイーブになられていますから……」

　しゅんとしながら、慧え理り那なは心当たりを口にした。

「慧理那も気づいてたのか……」

「むしろ、そーじにも気づかれるんじゃ、よっぽどね」

……ってことは愛あい香かもみんなも、とっくに気づいてたのか。俺は、違和感程度だったのに。

駄目だな俺は、仲間への気遣いが足りなくて……。ここのところトゥアールが元気になったように見えて、すっかり安心してしまっていた。

「みんな、トゥアールが落ち込んでる理由は知ってるのか？」

「さーてな、女の子には色々あるのじゃ」

俺の質問に、明らかに何か知っているようなはぐらかし方をするイースナ。

「……よし。とにかく俺、テイルレッドに変身してトゥアールを元気づけてくるよ。イースナ、また何か着替えを頼んでいいかな？」

察しが悪い俺にも、できることはある。俺は元日の時の作戦を、今度はトゥアールにしてあげようと考えた。

トゥアール、テイルレッドの着替えを見るとすごく嬉うれしそうにするもんな。

「わらわのアイドル服とかどうじゃ？」

「わたくしなら、大切な人を元気づける時は、衣服は首輪だけで参りますわ」

首輪は衣服にカウントできないぞ、慧え理り那な……。

「駄目！　そーじは最近レッドで身体からだ張ることに抵抗なさすぎなの!!」

結局この提案は、愛香に止められてしまった。

でもどうにかして、トゥアールを元気にしてあげたいな……。

◇

　アルティメギル最大の神秘である、首領の間。

　幹部さえ滅多に立ち入りを許されぬこの聖域へと、科学者・マーメイドギルディは今日もまた足を運んでいた。

　首領直属軍の幹部が次々に敗北を喫しているため、今やこうして現状報告をできるエレメリアン自体が少なくなっているのだ。

　粒子状の壁に四方を囲まれた一角。煌きらめくオーロラのカーテン、聖布ヴエールで厳おごそかに守られた首領の玉座の前に立つマーメイドギルディ。

「アポロギルディちゃんを寄よ越こしたのは、首領様ですか？」

　だが、今日は不ふ遜そんにも、マーメイドギルディが首領へと借問していた。

　元より他のエレメリアンたちに、首領への不敬を咎とがめられていたマーメイドギルディだが……苛いら立だっているのか、今日は隠しもせず言葉に感情が籠こもっている。

　アポロギルディというエレメリアンの訪問が、何な故ぜかよほど堪こたえているようだ。

「……余は神の一剣ゴー・デイア・ソードの完全出撃を許可した。それより先、誰だれがどう動こうと余の与あずかり知しるところではないが？」

　相変わらずの、男とも女とも、人とも獣けものともとれる、不気味で厳かな声こわ音ね。

　その声で飄ひよう々ひようと返されるのだから、かえって恐ろしさが増すというものだ。

　まだ何か言いたげに立っているマーメイドギルディの前に、光を押し固めたような透き通った座卓が出現する。

　そして首領の思念が半実体化した五指が卓の上に現れ、厚く重

なったカードを一枚一枚整然と並べ始めた。

「…………トランプ？」

　きょとんとして座卓を見るマーメイドギルディ。

　五二枚のカードが並んでいる。

　スペード、ダイヤ、クラブ、ハート……四つの絵柄に13までの数字。それはまさしくトランプだった。

　絵柄ごと、数字ごとに、縦四列・横一三行できれいに整列したトランプだったが……首領は今度はそれを漫然と指で弾はじき、床に落とし始める。

「……揃そろえたカードが消えてゆくのは、何とも寂しいものよな」

　ハート、クラブ、ダイヤ……まずその三列から、瞬く間に全てのカードが弾かれた。

　続くスペードの絵柄スートが並ぶ列も、容よう赦しや無くカードが減らされていく。

　Ａエース、２、３、４、５……。

　８まで落とし、Ｊジヤツクを飛び越し……そして、Ｑクイーンのカードの上で、首領の指が止まる。

「……よもや、戦女神クイーンまでもが堕ちるとは……余の想像を上回ったか、ツインテイルズ」

　スペードのＱ。その一枚だけ勿もつ体たいをつけて、力強く弾く。

　残ったのは、９と10とＪ□□そして、離れて取り残されたＫキング。僅わずかに四枚だけだった。

「が、これでよい。漫然と進行するカードゲームでは、面白みがない……乱れれば乱れるほど、プレイヤーは昂こう揚ようするものだ。……無論、ギャラリーもな」

　風切り音を上げて眼前に飛来したカードを、人差し指と中指で挟んでキャッチするマーメイドギルディ。首領が投げ寄よ越こしたのだろう。

　カードを裏返し、矢庭に眼めを細める。

「……これは……」

　道化師の絵が描かれている。首領が卓に並べた中にはなかった、特別エクストラカードだ。

「――やはり、ジョーカーという切り札で調和を乱してこそ、展開の読めぬゲームができるというものであろう？」

　その道化師は、太陽を背に無邪気な笑顔を浮かべていた。

「当面の余の気き慰なぐさみは、お前の報告だけだ。期待しているぞ、マーメイドギルディ」

　机上に残るスペードのＫのカードを指で軽く叩たたきながら、首領は意味ありげな言葉を贈る。

「ッ……」

　マーメイドギルディは一瞬、握った拳こぶしを震ふるわせたが―

「……でも首領様？　孤立したＫがもう一枚のジョーカーに変わったら……よりゲームが面白くなると思いません？」

　すぐに妖あやしげな微ほほ笑えみを浮かべ、胆の据すわった口答えをした。

　もちろん、首領も嬉うれしそうに納得する。

「ほう……Ｋを裏返し、ジョーカーとするか」

　将棋の成りと混同したような謎なぞシステム。カジノのカードゲームでやったら用心棒バウンサーに店外へ蹴けり出されるレベルのイカサマだが、会話を交わす両者は真剣だった。

「よかろう。終ついには五四枚全てがジョーカーと化すも、また一興」

「いやさすがにそれはちょっと一興じゃないです、カオス過ぎます」

　最後にキッチリと突っ込み、首領の間を後にするマーメイドギルディ。

「……さっきの反論、ちょっと首領様っぽさが移っちゃってたわね……ああ恥ずかし」

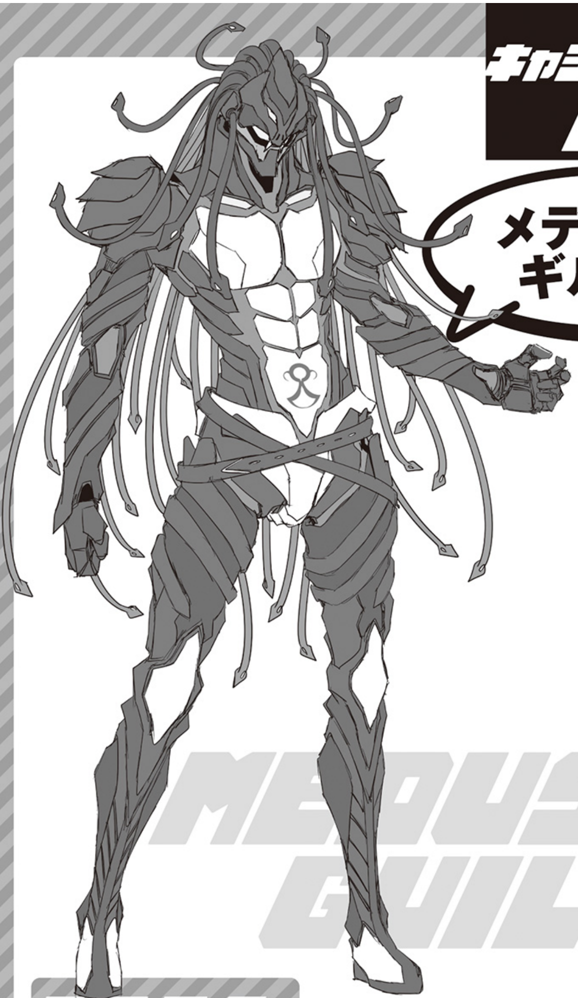
　柄がらにもなくムキになったことを恥じ、新調した自室へと帰る。

　その途中。彼女が思い浮かべたのは、因縁深き不死鳥の戦士だった。

「首領様への切り札ジョーカーになるとすれば、キミだと思っていたのに……このまま逃げ果せて終わるの？　フェニックスギルディ君」

キャラクター名鑑 038

メデューサギルディ



MEDUSA GUILDY

DATA

身長：337㎝

体重：293㎏

属性力：妹属性（リトルシスター）

神の一剣（ゴー・ディア・ソード）の戦士。弱小部隊の一兵卒から腕っ節だけでのし上がった叩き上げで、自分の強さに誇りを持っている。その一方で部下の面倒見がよく、弟子の育成にも余念がない。重要な任務には筆頭弟子のカトブレパギルディを相棒として臨む。心を奪った者たちを全て記憶したり、戦う相手を気にかけたりするなど、神の一剣（ゴー・ディア・ソード）の中ではかなり珍しい情に篤いタイプ。

第四章　学園に不死鳥。

　冬休み最終日。俺は、喫茶店のカウンター席で突っ伏していた。

　メデューサギルディ、あいつはタチの悪い愉快犯だ。

　あれからほぼ毎日現れ、俺たちとろくに戦いもしないで帰っていく。

　振り回されっぱなしだが……奴やつの能力が危険なだけに、俺たちも深追いができない。

　しかも、奴の狙ねらいの妹は──追随しているカトブレパギルディの弟もそうだが、あまりにも対象範囲が広い属性のため、次にどんな場所に現れるのか予測を立てることが難しいのだ。

　店内のテレビで、ちょうどメデューサギルディのことが報道されている。

『少女たちに「自分は兄だ」と公言するエレメリアンが各地で目撃されており、国連では「テイルレッドたんと少女たちを守るため多国籍軍を日本に投入すべきだ」との意見が……』

　せっかく元旦に世界が明るくなるようにと振る舞ったのに、また警戒ムードになってしまいそうだ。何とかして、この騒動を早く終結させなければ。

　入り口のカウベルが鳴った。お客さんが来たようだ。

　カウンターの奥でミルを挽ひいていた母さんが手を止め、声を弾ませた。

「あらあ唯ゆ乃のちゃん、いらっしゃーい」

「おうマスター！　また来たぜ!!」

　驚いて振り返る。──ドレス姿の結いわ翼ばね唯乃が、八や重え歯ばを輝かせて笑っていた。

「よっ総そう二じ、久しぶりィ!!」

「な……え⁉　お前、何で‼」

　動揺する俺を尻しり目に、唯乃は勝手知ったるとばかりに店内を歩き、ちょうど空あいていた俺の隣のカウンター席に座った。

「じゃマスター、いつものな！」

　指パッチンをして淀よどみなく注文する唯乃。母さんもそれで通じて、豆を挽き始めた。

「──嘘うそだろお前、母さんと顔なじみだったのか⁉」

「断っとくが、この店に最初に来たのは偶然だぜ。お前がマスターの息子だってのも知らなかったかんな‼」

　……今や国こく賓ひんレベルの人まで紛まぎれ込んでる謎なぞ空間と化したうちの喫茶店だが、知らない間にエレメリアンの唯乃まで引き寄せていたなんて……。

　っていうか、母さんをマスターって呼ぶの、ここの常連客からの愛称みたいなもんだろ。唯乃って、けっこうなお得意様だったのか？

「ここの常連だったのかよ、お前」

「常連ってほどでもねえよ。喫茶店巡りしてて、たまたまこの店に行き着いてよ。マスターのコーヒーが気に入ったんだ」

　客に聞こえないよう、俺に耳打ちしてくる唯ゆ乃の。

「それにしばらく基地あつちにいたからよ、またちょくちょく来るようになったのは、年の瀬ぐれえからだぜ」

　そういえばこいつ、マーメイドギルディに監禁されたりしていたんだっけ。

　それにしても、年末年始ちょくちょく来てるのに気づかなかった俺って……。

　その時、カウンターの反対側からコーヒーカップが滑ってきた。音も立てずにそれを受け止める唯乃。

　コーヒーがなみなみと注がれているのに、ソーサーに一滴もこぼれ落ちていない。

　滑ってきた方を見ると、瀟しよう洒しやなスーツで決めたダンディなおじ様がウインクをしていた。

「フッ……私からのおごりだ、唯乃ちゃん。今日は、髭ひげが疼うずかない日だからね」

「ああ、ありがたく受け取っとくぜ、オヤジさん。──〝追っ手〟は撒まけたみてえだな」

　ここのお客さんのノリに順応してる……。っていうか、気に入られてる。

　常連客にめっちゃおごられてそう、こいつ。おごられるのが画えになってる。

　そして──唯乃はコーヒーカップを口に運ぶ所作も、実に画になっていた。

　コーヒーを一口飲み、満足したように漏もれた吐と息いきが、妙に艶つやめかしい。

「意外だな。お前がコーヒーに興味あったなんて」

「俺様は何でも興味あるぜ。まあ、やりたいことは全部やってくのがモットーだ!!」

　俺は、唯乃の横顔を見ながら思案する。

　何でも興味がある、か……。

　その後俺は、唯乃を地下基地のコンソールルームに連れてきた。最初は俺の部屋に案内しようとしたんだけど、トゥアールがこっちに連れて来るように提案したのだ。

　とはいえ、トゥアールはやはり面白そうにはしていない。

　その直後、息を切らしながら愛あい香かもコンソールルームへ

入って来た。

「あれ？　大丈夫か愛香、今日は恋れん香かさんと出かけてたんだろ？」

「う、うん。そーじに部屋に来てって言われたこと伝えたら……お姉ちゃん、音速で帰りなさい、って……」

　うわあ、それは二人に悪いことしたなあ。冬休み最後の日、姉妹水入らずでお出かけしていたのに……。

　俺は唯乃のことを伝えただけで愛香に家に来いとは言ってないけど、唯乃が基地に来るってわかったら愛香も理由をつけて帰ろうとするよな。そこまで考えるべきだった。

　愛あい香かは席にどっかと腰を下ろすと、遠えん慮りよなく唯ゆ乃のを睨にらみ付けた。

「……二度目でも慣れないわね。あんたがこの基地にいるの……」

　俺としては、むしろ唯乃にここに馴な染じんで欲しい……という思惑があるんだけど、愛香やトゥアールがそれに抵抗があるのも理解できる。何事も少しずつ着実に、だな。

　喫茶店のカウンターに続いてここでも俺の隣に座っている唯乃は、俺の腕を引っ張り、

「なー、そろそろやろーぜー総そう二じー。俺様もう我慢できねーよー」

　柄がらにもなく甘えるような声で懇願してきた。

　四六時中俺との再戦のことばかり考えてるのか、こいつは……。

「やらしいですね、何勝手に総二様を誘惑してるんですかこの発情期雌めん鶏どり!!」

「ん？　やらしい？」

　早速トゥアールも抗議している。何かすれ違いがあるようにも思えるが。

「今は待ってくれ、唯乃。ちょっと立て込んでるんだ」

「俺様これでも随分待ったんだぜ？　お前、ヴァルキリアギルディたちとの戦いで相当消耗してるだろうと思ったからよー」

　なるほど、俺がベストコンディションに戻るのを待ってたってことか。

「あたしたち、明日から三学期なのよ!?　ただでさえシスコンエレメリアンがちょこまか現れるせいで、この数日ほとんど遊べてないんだから！　あんたは少し自重して!!」

「三学期？　ああ、学校か。へへっ、兼業戦士はつれーな!!」

　愛香の言うとおりだ。メデューサギルディとこいつの両方を相手にするなんて、現実的じゃないな。

「じゃあ唯乃、神の一剣ゴー・デイア・ソードで知っている情報を教えてくれ。今戦っている奴やつが、行動が読めなくて難儀しているんだ。こっちの事情が片付けば、その分お前との再戦も近くなる」

　再戦を有う耶や無む耶やにしようとすると、こいつはＴＰＯ考えずに乱入してきたりするからな。条件をつけて約束する方が安全だろう。

「俺様も、神の一剣ゴー・デイア・ソードについてはなあ……。あんたの方がもう詳しいんじゃねえのか？　トゥアールさんよ。例のデータは調べてんだろ？」

　俺がティラノギルディにツインテール属性を奪われたとき、唯乃はトゥアールにペガサスギルディの遺のこした研究データの記録媒体を渡している。そのことを言っているんだろう。

「あれからずっとコンピュータに解読させていますが、何しろデータの量が膨大すぎます。戦闘員アルテイロイドのマスクに美少女の顔を転写するみたいな、ただおもしろいだけの情報もごまんと入ってるので……取捨選択が難しいんです」

　究極のツインテールについて調べてる時は、目的がはっきりとしていたからこそ短時間で辿たどり着けたという。しかし今は雑然としたデータの中から有益な情報を手探りで探す段階、より困難を極

めているらしい。

　他人のパソコンの中身を見るのと同じで、渾こん沌とんを覗のぞき込むみたいなもんなのかもな。

「それより、今年に入ってからは残存部隊と神の一剣ゴー・デイア・ソードの出撃が、同調しているように感じました。何か事情を知っていますか、結いわ翼ばね唯ゆ乃の」

「おー、スワンギルディがうまくやってんのかもな！　今は部隊に復帰してっからよ」

「スワンギルディが生きてたなんて、あたし知らなかったわよ……」

「おう、俺様が助けたからな!!」

「……あんたねえ……!!」

　スワンギルディは俺との一騎討ちに敗れた後、病院を戦場にした危険を鑑かんがみてブルーがトドメを刺した。俺だってあいつに再会するまで知らなかったんだ、愛あい香かの困惑も無理はない。

「スワンギルディには、マーメイドギルディのことを残存部隊の連中に言うなって伝えといた。あの科学者に関しちゃ、俺様もちと懲こりたぜ……あいつの狡こう猾かつさは、おそらくアルティメギルーだ。今も裏で何か企たくらんでるだろうから、お前らもマジで気をつけろよ」

　マーメイドギルディという危険分子の存在を、トゥアールと愛香にも語って聞かせる唯乃。

「ホント、科学者ってろくな奴やつがいないわね……」

「ええ。私以外の科学者は全て、裏がないか疑ってかかるべきです」

「……」

「……」

　愛香とトゥアールは無言で視線を合わせ、やがて同時に真顔で乾

いた笑いを浮かべた。

「そのマーメイドギルディというエレメリアン。神の一剣ゴー・デイア・ソードの幹部であるヴァルキリアギルディを、結果的に自分の野望のために利用したのでしょう？　さすがに組織の長である首領に咎とがめられないはずはないと思いますが」

　気を取り直して唯乃に質問するトゥアール。

「前にも言っただろ、首領は反逆とかされた方がむしろ喜ぶんだ、ヒマしてっからよ」

　それを聞いた愛香は、不機嫌を滲にじませて皮肉めいた返しをした。

「じゃああんた、総そう二じじゃなくて首領に戦い挑みに行けばいいでしょ、ヒマしてんだから!!」

「……ん……」

　バツが悪そうに俯うつむく唯乃。

　俺は弾はじかれたように唯乃の肩を抱くと、夢中でこいつを引き留とめる言葉を探した。

「……駄目だ、首領なんて放っておけ。俺だけを見ろ、唯乃」

「お、おう……」

　何な故ぜ顔を赤らめているんだ、唯乃は。

「あんま見んなよ……。お前に見つめられっと、腹の下の方がむずむずするんだ」

　俺をちらちらと見ながら、唯乃は身をよじる。

「そうか、悪い……」

「と、とりあえず今日は帰るわ、俺様。出口は知ってっからよ、お前らそのままでいいぜ！　じゃあな!!」

　妙に挙動不審になり、椅い子すに蹴け躓つまづきながら立ち上がると、唯ゆ乃のはコンソールルームをそそくさと出て行ってしまっ

た。

「……どんどん女の子っぽくなってく……何なのあいつ……！　あたしもエレメリアンに因縁つけまくってるのに、何でそーじは俺だけを見ろって言ってくれないのよ……!!」

「私も性に無む頓とん着ちやくで無防備なキャラでいけば、今頃ごろ清い身体からだではなかったはず……！　ああ、記憶を維持したまま去年の四月にタイムリープしたいです!!」

愛あい香かとトゥアールがぼそぼそと呟つぶやきながら、憎にく々にくしげに唯乃を見送る。

やっぱ俺がエレメリアンと仲良くするのを警戒してるのかな、二人とも……。

けど、うかうかしていられないぞ。

唯乃は以前、首領との再戦を前に、俺に不安を吐と露ろしてきた。

俺との戦いを渇望するのは、自分の強さに自信を取り戻したい気持ちも大きいんだろう。

愛香にあんなふうに焚たき付けられたんだ、あいつは引くに引けなくなってすぐにでも首領に勝負を挑みに行ってしまうかもしれない。

俺はトゥアルフォンをポケットから取り出し、メールのアドレス欄を確認。

イースナの次に登録されている、結いわ翼ばね唯乃の名前をタップした──。

◇

やっぱ冬休みって短いよな。

　それなりに遊んだはずなのに、いざ新学期を迎えると全く休んだ気がしない。

　昨日始業式を終え、今日から本格的な三学期の授業が始まる。

　家を出てすぐ襲おそい来る、厳しさを増した寒さ。俺は喫茶店アドレシエンツアの入り口の前で足を止める。

　一緒に家を出た愛香、トゥアールは朝から何やらじゃれ合っていて、今日も元気だ。

「制服の前開けんじゃないわよ！　谷間が目立って余計寒く感じるじゃない!!」

「女の子が胸の谷間を露出して殿方を温かな気持ちにしないと、地球は氷河期になるんです！　温暖化に貢献できない恐竜絶滅級の貧乳はもっと申し訳なさそうに生きてください!!」

　現代に恐竜が蘇よみがえっても絶滅できそうな拳こぶしが、今日も地球に快音を響かせる。

　しかし、トゥアールをブッ飛ばして振り返った愛香の目の前には、再び胸の谷間が。

「やるじゃないトゥアール。あたしにブッ飛ばされたと思ったら、もう後ろに回り込んでるなんて──」

　胸への怒りよりも好敵手への敬意が勝り不敵な笑みを浮かべる愛香だが、

「じゅらしっく────────────っ!!」

　その好敵手は今、軽快な叫び声とともに地面に落下してきた。

「……あれ？」

　愛あい香かは女性を見る時、顔より先に忌いむべき胸の谷間に視線をロックオンする習性があるため、気付くのが遅れたのだ。よく見ると、目の前のそれがトゥアールより控え目であることに。

「おーう、一昨日ぶりィ、総そう二じ！」

　胸の谷間の上から聞こえるその声に反応し、恐る恐る視線を上げる愛香。

　程なく、驚きの声が冬空に木こ霊だました。

「……っ……えええええええええええええええ!?」

　喫茶店アドレシエンツアの前で俺たちを待っていたのは──制服に身を包んだ、結いわ翼ばね唯ゆ乃のだった。



「唯乃っ⁉　あんたその制服、陽月ウチのじゃない！　どういうつもりっ⁉」

　陽よう月げつ学園高等部の女子制服に身を包んだ唯乃を見て、愛香が驚き慌あわてる。

「早とちりすんなよ青の姉ちゃん、俺様をここに呼んだのは総二だぜ」

「マジで⁉」

　何してくれてんの、と批難めいた目で俺を見てくる愛香。

「こいつに社会勉強して欲しくてさ……。慧え理り那なには許可を取った。例によって、留学生ってことにしてもらってな」

　俺は、一昨日の話し合いの後で、基地を出て行った唯乃にすぐ連絡を取った。

　学校に来てみないか、と。

　唯ゆ乃のは何でも興味があると言っていたから、ある程度はいけると思っていたが……それにしてもこちらが驚くほどの快こころよい返事をもらえたのだ。

　外国人っぽくない名前なのが難点だけど、ゆるい校風だし、偽名は必要ないだろう。

「…………」

　先駆者である「観み束つかトゥアール」の反応を窺うかがうが、こちらは無言で不服そうに唯乃を見ているだけで、積極的に絡んでいこうとはしない。

「ふーん、あたしに相談無しにそういうことしちゃうんだ」

「う、わ、悪い……」

　相当お冠だな、愛あい香か。

「相変わらず過保護だなあ、青の姉ちゃんよぉ。総そう二じが自分の意思で俺様を求めたんだぜ、あんたに伺うかがい立てる必要なん

ざねーだろうが!!」

「か、過保護かもしれないけど！　求めたとか言うんじゃないわよ!!」

　俺はあらためて、唯乃の制服姿を観察する。

　ブレザーの上から羽は織おる学校指定のカーディガンを、唯乃は腰に無造作に巻いていた。

　ソックスも女子は指定のものがハイとローの二種類の長さがあり、学年で色分けされたラインがサイドに入っている。こいつはその中でも愛香と同じニーソックスをぶかぶかに履いて、さながらルーズソックスのようになっている。

　シャツはこの真冬に袖そでまくりをし、しかも第二ボタンまで開けて胸の谷間が丸見えだ。

　……何かギャルっぽいな。

「おい唯乃、もう少し目立たないように着た方がいいぞ。スカートもかなり短くしてるし」

「元の結いわ翼ばね唯乃は、こんな感じに制服着てたぜ！」

　さりげない会話の中で、興味深い情報を得た。こいつやペガサスギルディが憧あこがれた結翼唯乃──オリジナルの──は、制服をこんなに着崩すぐらいアクティブな子だったのか。

「それよりも、上よ。胸元そんなに開けて、谷間を強調して……何様のつもり？」

「俺様！」

　唯乃に一本取られ、さらに怒りの炎を強めるかと思いきや……愛香は唯乃をまじまじと見入ると、悔しさ交じりに賞嘆した。

「……悔しいけど、あんた本当に可か愛わいいわね……」

「おうよ！　俺様はみっちりポニーテールを鍛きたえてっからな!!」

　純粋に女の子として可愛いと言われても、こいつにとってはポニーテールの練度を褒ほめられているってことなんだな。何かその気持ち、わかるぜ。

「……って、あっ！　もしかして、唯乃が着てる制服──」

　愛香もようやく気づいたようだ。

「ああ、部室の大掃除の時に出てきただろ、俺がソーラになった時に着てたやつさ」

「ソーラ？　ああそういえば、お前女になって戻れなくなった時があるんだったなあ。写真とかねえのか？」

　同じ制服をどんなふうに着ていたか、参考にしたいのだろうか。俺はトゥアルフォンを取り出し、ソーラの写真を表示した。

「はー、ほうほう。ホントにテイルレッドがちょびっと大きくなった感じだな。胸だけだいぶデカくなってっけどよ。だからこの制服、俺様にはところどころ少し窮屈なんだな」

　ソーラと比較するように、自分のシャツの胸元を引っ張る唯ゆ乃の。無防備な胸の谷間がさらに強調される。

　それを見た瞬間、愛あい香かは唯乃への敵意を剥むき出しにした。

「いくら何でもこいつのこと信用しすぎでしょ！　学園にはポニーテールにしてる女の子だっているのよ!?」

「でもこいつは、誰だれかのポニーテール属性を奪ったことはないだろ」

「それに戦闘狂だし！　そーじと再戦したがって校内で急に暴れだしたらどうするのよ！」

「その時は、俺が責任持って止めるさ。絶対にないだろうけどな」

　愛香だってもう、わかってるはずなんだけどな。唯乃がそんなことするはずないって。

　俺たちの口論を、唯乃は苦笑しながら聞き流していた。

　ツインテールの気配に、後ろを振り向く。慧え理り那なと桜さくら川がわ先生、その他のメイドさんたちが歩いてくるところだった。

「おはようございます、観み束つか君、皆さん！」

　俺たちに挨あい拶さつをしながら、慧理那は一緒にいる唯乃に気づいて嬉うれしそうに手を合わせる。

「結いわ翼ばねさん、制服とても似合っていますわ！　ですが、もう少し崩さずに着てくださいね」

　唯乃の服装が気になったようだが、さすが慧理那。注意するにしても、まずは褒ほめるところから入る。

「おっす、黄色の姉ちゃん！　珍しいな、あんたがお小言なんて」

「わたくし、この陽よう月げつ学園高等部の生徒会長を務めていますわ。学園の風紀を取り締まるのも立派な仕事です」

「ほおう、あんたはこの学校の生徒の隊長か！　そりゃあ、規範に厳しいのも当然だな!!」

「隊長じゃなくて会長よ、エレメリアンじゃないんだから」

　肩を落とす愛香。そして、トゥアールに援護を求める。

「トゥアール、あんたは文句ないの？　エレメリアンが留学してくるのよ!?」

　事実だけど、端的にまとめるとすげえパンチあるな……。

　トゥアールは焦あせる愛香とは裏腹に、いつしか顔の険を解いていた。

「ククク……この調子なら血と戦いを求める蛮族と結翼唯乃は殺し合いを始めて共倒れするでしょう！　そうなれば私はノーマーク……総そう二じ様との平和な学園性活の始まりです!!」

　何やらよからぬことを企たくらんでるようだが、トゥアールがこういう薄笑いを浮かべる時って、例外なく数時間以内に「ぶぇあああああああ」とか叫んで飛んでいくんだよな……。

「ま……つうわけで、まずは今日一日、よろしくな！　生徒隊長さん!!」

「ええ。陽よう月げつ学園高等部が、あなたの輝く未来を開花させる道標となることを約束しますわ」

　留学生である唯ゆ乃のに、生徒会長の慧え理り那なは入学式などのスピーチでよく口にしている校訓を優しく贈るのだった。

　昨日始業式で全校生徒が集まったばかりの体育館で、今度は臨時の全校集会が開かれた。

　俺がソーラになった時と同じく、慧理那が留学生の唯乃を紹介するようだ。

　登壇した快活な美少女に、全校生徒の眼めは釘くぎ付づけになっている。

『では、自己紹介をお願い致しますわ、結いわ翼ばね唯乃さん』

『よっしゃ！　ポニーテールは世界を繋つなぐ架け橋！　太陽の戦士、フェニ──』

『あわわわ、そういう自己紹介ではありませんわ!!』

　早速慧理那のご厄介になっている唯乃。

　隣の列前方に並んでいる愛あい香かが俺を振り返り、「ほら見ろ」と視線で訴えてくる。

『お前らよろしくなー！　俺様ポニーテール極めてっからよ、ポニーテールのことで聞きたいことがあったら俺様のとこに来いよな!!』

　最初の自己紹介こそ失敗したけど、めっちゃくちゃ場慣れしてるじゃねえか、あいつ！　俺なんてソーラの時同じように自己紹介したら、速攻で噛かんでグダグダになったんだぞ!?

「俺の記憶違いであって欲しいんだが、あの子、前に観み束つかを訪ねてきた子じゃ……」

「だよなぁ……。畜生……どうして観束にばっかり美少女の知り合いが……」

「この世にテイルレッドたんがいなかったら終身刑だよな、観束」

　周囲から木こ霊だまする、冷たく凍いてついた声。

　何だ、朝も早くから俺の周囲に渦うず巻くこのドス黒い怨えん嗟さの波動は……!?

「だから何で私以外の女の子だとこういう学園ラブコメなリアクションをするんですかクラスの皆さんはーっ!!」

　トゥアールは全校集会中ずっと、白衣の裾すそを噛んで悔しがっていた。

◇

　アルティメギル基地。大ホールへと向かう廊下で、スワンギルディとメデューサギルディは肩を並べて歩いていた。

「あの……メデューサギルディ殿は、ツインテイルズの手て強ごわさを警戒し、何度も出撃と退却をしておられるのですか？　その……思うところはないのでしょうか」

　スワンギルディが困惑気味に尋ねると、メデューサギルディは大笑を廊下に響かせた。

「がっはっはっはっは、退却してばかりで誇りが傷つかぬか、ということか？　つまらんぞスワンギルディ、そんなものにこだわる奴やつほど弱いのだ！　いや、何人にも束縛されず勝手気ままに妹を愛めでる自由こそ、俺の誇りだ!!」

　雄大な信念は、全てを包むよう。まるで、流れゆく雲のような生き様のシスコンだった。

「はあ、しかし……」

　その信条は素晴らしい。だが、出撃を待つ士気高き一般兵の手前、本腰を入れて属性力エレメーラを奪おうとする素そ振ぶりも見せないことに少し困っているのだ。

「急ぐな急ぐな!!」

　歯切れの悪い隊長の肩を、メデューサギルディはソフトタッチで撫なでた。

　全精神力を動員し、悲鳴を漏もらすまいと耐えるスワンギルディ。

「お前たちは、この世界を征服するのであろう？　最後の一人まで、ツインテール属性を……全ての属性力エレメーラを奪うのだろう？」

「む、無論です。それが我われら、アルティメギルなのですから」

「その通りだ。だから俺は少しでも多く、この世界の妹をこの目に焼き付ける。妹を愛する者をこの目に焼き付ける。……そうすれば俺たちに心を奪われた後も、その輝きは俺たちの記憶へと姿を変えて永遠に生き続けるのだからな」

「メデューサギルディ殿……」

　スワンギルディは、その悲しくも強い光を帯おびた双そう眸ぼうに感銘を受ける。

「もうっ！　しんみりするなんて、バカ兄にいらしくない！　しゃんとしなさいよね!!」

　筋肉質のおっさんが可か愛わいらしくそっぽを向き、スワンギルディは白目を剝むく。

「──今、俺の甘え声を聞いてお前の心に生まれた温かさ……それが兄性あにせいだ。大事にしろ」

　何かが生まれるどころか、生命力が消失して死にそうになるスワンギルディ。

「よーし、それじゃあこの部隊の連中にも、妹いもうと道どうを叩たたき込んでやるとするかぁ!!」

　大ホールに到着し、高難易度の講義をしに中へと入っていくメデューサギルディ。

　一方で自分の貫禄の無さに肩を落とすスワンギルディに、背後から陽気な声がかけられた。

「あははー、あいついつもあんな感じだからさー、でも慣れると楽しーぞ！」

　小さなエレメリアン、アポロギルディ。メデューサギルディのお気に入りの〝妹〟だ。

「その代わりもう一体知り合い連れてきたから、こいつ先に行かせてもいいかー？」

　アポロギルディの合図で、やはり白ローブをまとったエレメリアンが歩いてくる。

「はっ。お任せ致します、アポロギルディ殿」

　さすがに神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士なら、メデューサギルディの前に割り込んでも問題はないだろう。

◇

　集会の後、唯ゆ乃のは俺たちと一緒の教室へとやって来た。これも、慧え理り那なの計らいだ。

「こんな字だったよな」

　カクカクした字体だし、〝結〟の字の士が土になってたり、と細かい間違いはあるが、唯乃は立派に自分の名前を黒板に書いた。

「結いわ翼ばね唯乃だ！　よろしくな！」

　拍手に応こたえ、大きく手を振る唯乃。

　クラス中の視線を一身に受けながら、堂々としたものだ。

「えー、交換留学生だそうです、代わりに誰だれがどこに行ったかは知りませんけど～。結翼さんは観み束つか君の親戚だって、生徒会長が言っていました～」

　担任の樽たる井い先生が、興味なさそうに唯乃のことを紹介する。三学期になっても、テキトーな態度は改まることはなさそうだ。

　唯乃は教壇から降りて俺の方へとずかずかと歩いてくると、俺の右隣の男子に声をかけた。

「おいお前、席交換してくれ！　俺様、総そう二じの隣がいいからな!!」

　急で無茶なお願いだが、何せこの美少女の言うことだ。隣の席の男子は、締まりのない笑顔で了承した。

「…………観束、お前海外に何人いるんだよ親戚だの知り合いだの……」

「俺が知りてえよ……」

　クラスの男子たちの乾いた問いに、俺もまたカッサカサに乾燥した声で答える。

「留学生」って肩書きだけで十分誤ご魔ま化かせたはずなのに、どうして俺の親戚って設定を追加してしまったんだ、慧理那は。

　二時間目の数学が始まり、樽井先生と入れ替わりで数学教師が教室の中へ。

「おっし総二、教科書見せろ！」

　唯乃は机をガタガタと揺らして、俺の机とくっつける。そしてわざわざ、椅い子すの上で脚を組み始めた。

「こら唯乃。椅子の上で胡座あぐらかくな。みんなにパンツ丸見えになるぞ……」

「お、そっか。お前以外に下着見せたら駄目なんだったな!!」

「そんな取り決めしてねーよ!!」

　男子がスイッチで一斉操作する機械のように同時に振り返り、俺を血走った目で見てきた。

　くっ……駄目だ、いつもどおり突っ込むとみんなの視線が痛い!!

「いい加減にしなさい唯乃……そーじに迷惑かけるなら火星まで留学させるわよ」

　俺の斜め前の席に座っている愛あい香かが、ツインテールを揺らめかせながら唯乃を睨にらみ付ける。

「ヘッ……いい闘気だ、青の姉ちゃん……隙すきあらば俺様の首をヘシ折ろうってぐらいの殺気を感じるぜ」

　授業中にクラスメイトの首ヘシ折る隙すきを伺うかがう女子高生とか参るよね、もう。

「そ、それでは……この問題、誰だれか前に出て解きなさい……結構難しいぞ」

「任せろ、俺様が解くぜ！」

　数学教師が黒板の計算式を示すが早いか、唯ゆ乃のが小学生のように元気よく手を挙げた。

　今さらだけどクラスのみんな、一人称が「俺様」な女の子のこと、どう思ってるんだろう。留学生だからでスルーしてくれてるのかな。

　黒板と睨にらめっこして「やっぱわかんねえ！」とでもオチをつけて席に戻ってくるかと思っていた俺は、唯乃がすらすらと黒板にチョークを滑らせているのを見て、目を丸くした。

　やがて黒板には、何列もの証明式が羅列される。

「正解だ」

　数学教師は指で眼鏡めがねのずれを直しながら視線を上下二往復させ、戸惑いがちに言った。

　難しい証明問題を、唯乃はあっさりと解いてしまったのだ。

　自然なターンで柔らかにポニーテールを揺らし、教壇から俺の隣の席へと戻ってくる。

　男子はもちろん、女子もその姿にすっかり見とれていた。

　さすがに先生を気にしてか、今度はひそひそ声で抗議してくる愛あい香か。

「何でフツーに問題解いてんのよあんた!?　ギャルっぽい見た目してるんだから、そこは期待に応こたえなさいよね!!」

　ギャルの皆さんに謝れ……。

「あの二兆倍ぐれえ難しい公式を、毎日毎日ピコピコ打ってる変わり者が親友だったんでな」

　だけど横で見てただけでそこそこ頭よくなったのは、友達のペガサスギルディのおかげじゃなく、こいつの資質なんだろうな。

　その時、教室の後ろのドアが控え目にノックされ、ゆっくりと開けられた。

　入ってきたのは……慧え理り那なと、桜さくら川がわ先生だった。

「あ、あれ……どうした慧理那、今授業中だけど……」

　あまりにも堂々と入室してきたので、逆に俺の方が遠えん慮りよ気味に聞いてしまう。

「ええ。わたくしは生徒会長として、留学生のサポートをする責務がありますので」

「授業中はサポート時間外だろ!?」

「いいや、万全の二四時間体制だ。チャットでもサポートするぞ」

　慧理那がノリノリだと、桜川先生もこうして全乗っかりなんだよな……。

　手て篤あついサポートセンターの責任者らしき慧理那は、俺の左

に座っている男子に申し訳なさそうに声をかける。

「あの、すみません……少しの間だけ、席をお借りしてよろしいですか？」

　急で無茶なお願いだが、何せこの美少女の言うことだ。隣の席の男子は、締まりのない笑顔で了承した。……デジャブ過ぎるぞ。

「ほおう、俺様と勝負ってか、生徒隊長!!」

「いいえ、サポートするだけですわ！　わからない問題があったら聞いてくださいね！」

　……それは先生の役割なんじゃ……。

　生徒会長が授業参観じみたノリで現れたことで、教室はさらに渾こん沌とんを極める。

　こちらを不安そうに見ていた愛あい香かだが、何やらクラスの女子に詰め寄られているようだ。

「留学生にも会長にも負けたら駄目だからね、愛香!!」

「ん……あたしは大丈夫！」

「あれ……あれ、その自信……どうしたの愛香!?　あれ、もしかして冬休みに!?」

　クラスの女子が、めっちゃ俺を見てくる……しかも、いささか邪悪な笑顔で。

「総そう二じ様！　私もサポートします、もう隣が空あいてないから総二様の股間に──」

　こちらのノリに交ざりたかったのか、唐突に俺に飛びかかってくるトゥアール。しかし専用のサポート業者である愛香に回収され、あえなく廊下を転がされていく。

　何がすごいって、このカオスな状況で粛しゆく々しゆくと授業を進める先生だよな。……と思ったが、よく見たら眼鏡めがねの奥の目から光が消えていた……。ご面倒おかけします。

　慧え理り那なと唯ゆ乃のはそれから午前の間ずっと、俺を挟んで仄ほのかな視殺戦を繰り広げていた。

　昼休み。飲み物はともかく、食べ物はあまり積極的にとらない唯乃は、校内見学を希望。

　俺はツインテール部の部室にも案内し、普段の活動内容などを紹介した。

　隅々まで校舎を練り歩き、その美貌を学園に振りまいた後の五時限目は……体育だ。

「結いわ翼ばねさん、脚めっちゃ綺き麗れい……」

　体操服に着替えた唯乃は、クラスの女子の羨せん望ぼうを集めていた。

　グラウンドに集まった俺たちのクラスの前で、桜さくら川がわ先生が始業の挨あい拶さつをする。

「おう、メイドの姉ちゃん！　あんた先生だったのか!!」

「フッ……口調は不ふ遜そんだが、姉ちゃんという呼び方は良いぞ。私の受け持ちは体育だ、今日は留学生のお前に、好きな競技を選ばせてやろうじゃないか」

　あの先生、メイド服でスポーツに参加するからすごいぞ。見ておけ、唯乃。

「じゃあ、サッカーだな！　漫画で見てルール知ってるからよ!!」

　こいつ、熱血スポ根とか滅茶苦茶好きそうだもんな。

「サッカーか、いいだろう。それでは男子、女子それぞれチーム分けを──」

　唯乃は、桜川先生の指示に待ったをかけた。

「俺様は総二と一緒にサッカーしてえから、男女混合にしてくれ!!」

「ふーむ。まあ、私が審判として注視していれば大丈夫か。男子はくれぐれも女子に怪け我がをさせないように。あと津つ辺べは……怪我をさせないように」

　あえて対象を限定しないことで、愛香の脅威が男子以上だと周知させようとしている……。

　審判の桜さくら川がわ先生のホイッスルで、試合が開始された。

　俺と唯ゆ乃のとトゥアールが同じチーム、愛あい香かが敵チームだ。

　男女混合サッカーだが……始まってすぐ二人の女子がレベルの違いを見せつけ、男子の方が及び腰になり始めた。

　その一人は愛香。ツインテールを風にたなびかせ、プロ顔負けの切り込みでフィールド狭しと爆走する。

　そして当然もう一人は、唯乃。均整の取れた肢し体たい、そこに弾はじける珠たまの汗に、男女問わず魅了されている。さすがにポニーテールは、スポーツが似合うな……！

　もちろん、ツインテールだって負けちゃいないぜ。

　競いたい。だけど俺は、変身しないとこいつと競い合えないんだよな……。

「愛香さーん！　こういう時にしか役に立てないんですから、あなたが自慢のラフプレーで唯乃の選手生命を終わらせてください！　脛！　アキレス腱！　膝ひざの皿ーッ!!」

　……トゥアールは絶対そんじょそこらの女子より運動神経いいのに、何な故ぜか体育ではふにゃっとした動きしかしないんだよなあ。しかも、敵チームの愛香の応援しているし。

「ッ……やっぱ速い……！　胸デカいくせに……!!」

　一瞬の隙すきを突かれ、唯乃にボールを奪われる愛香。

　ポニーテールが地面と平行にたなびくほどの猛ダッシュで敵陣を突破し、開脚が一八〇度に達そうかというほど蹴けり脚をしならせてシュート体勢に入った。

「フェニックスゴ────────────────ルッ!!」

　せめてフェニックスシュートにしろよ、何でボール蹴る瞬間に結果が確定されてんだよ!!

　──などという突っ込みすら生温いほどに、唯乃の蹴ったボールは衝撃だけで地面を軽く抉えぐりながら驀ばく進しん。キーパーが身み動じろぎすらできない間にゴールネットに突き刺さったばかりか、そのままゴールポストを転倒させてしまった。

「っしゃあ、まずは一点！」

「アホかああああああああああああ！　やり過ぎだ!!」

「でも俺様が読んだ漫画じゃ、だいたいこのぐれーのパワーでボール蹴り合ってたぜ!?」

「漫画と現実をごっちゃにすんな！　普通の人はサッカーボールでゴールポストひっくり返したりできないんだよ!!」

　俺は漫画を基準に人間生活を語る唯乃を厳重注意するが、クラスメイトは何故か唯乃のシュートにそこまで驚いていない。

　再キックオフ。負けず嫌いの愛香が、借りを返すとばかりにそれまで以上のキレのドリブルでこちらの陣地を襲撃する。

　俺と唯乃は同時に愛香にかかるが、互いの動きを邪魔するようにお見合いしてしまう。その隙に愛香は、前線を突破した。

　ツインテールとポニーテール……愛する髪型が無意識に重心の違いを生み、息が合わないのだろうか。

「一点で浮かれてんじゃないわよ、唯ゆ乃の！　これで…………同点ッ!!」

「助けてください総そう二じ様、生物としてオフサイドな蛮族が力を持て余してぶぇあああああああああああああああああああ!!」

　ＤＦデイフエンスのトゥアールは、明らかに愛あい香かのシュートコースを避けた。

それなのに、愛香の蹴けったボールは勢いを殺すことなく急カーブ、トゥアールに直撃。

そのままボールはトゥアールもろとも、ゴールに飛び込んだ。

そしてやはり、シュートの勢いでゴールポストが倒れてしまっている。

唯乃は、先ほどの俺の警告に納得がいかないとばかりに見てきた。

「……あっちは人間ごとゴールポストふっ飛ばしてるぜ、総二」

「俺が悪かった」

女子高生が女子高生を校舎の壁に埋めるような光景が、日常の学校だもんな。

シュートでゴールポストひっくり返すぐらい、何でもなかったか……。

◇

「ゆーのゆのゆのゆーのゆのー!!（はいっさー）」

「ゆーのゆのゆのゆーのゆのー!!（ほいっさー）」

学ランを羽は織おったガタイ自慢の応援団による大だい音おん声じようが、放課後の廊下に響く。

一躍時の人となった唯乃は、この真冬にＦＵＮＤＯＳＨＩな男たちによって御み輿こしに乗せられ、廊下を進んでいた。

タイムスリップしたかのような既視感が、俺に激しい頭痛をもたらした。

「どうです結いわ翼ばねさん、これが日本の伝統芸能、ＭＩＫＯＳＨＩです!!」

　太眉まゆの筋肉男子が、唯乃に笑いかける。

「あはははははは、面白ぇーぜ！　おい総二見てっか、これすげーぞー!!」

　御輿に担かつがれそして揺られて、そんな笑顔を振りまけるお前こそすげーな……。

　今日まで執念で活動を続けていたソーラちゃんファンクラ部は、期間限定活動の名の下に「ゆのゆのファンクラ部」へとエヴォリューション。

　彼らが唯乃を持て囃はやし始めると、対抗するかのように多くの勢力が出現した。

　唯乃の笑顔を旗印に日本から独立を宣言してしまった「八や重え歯ばで甘噛がみされ帝国」、留学生に観光案内をすると言っておきながら自分たちの理念は迷子な「唯乃りん迷宮案内」、やはり女生徒だけで編成された「私たちの競走馬」なる過激派まで存在する。

　なお、唯乃の制服の着崩しに魅せられた特殊部隊「胸の谷間ＳＱＵＡＤ」は、ワンマンアーミー愛あい香かの手で即座に壊滅したことを加えておく。

「ゆのゆのー、ポニーテールのこと教えてっ！」

「おう、いいぜ!!」

　唯ゆ乃のは廊下に立つ女子の声に応こたえ、軽やかに御み輿こしから降りた。そして、その女子にポニーテールの結び方を教え始める。

　やがて他の女子たちもリボンを、ヘアゴムを手に取り、唯乃を中心とした輪が生まれた。

　慧え理り那なはもちろん、愛香やトゥアールまで苦笑しながら、その光景を見守っている。

　俺がソーラになった時と決定的に違うのは──みんな、唯乃のポニーテールに興きよう味み津しん々しんだということだ。

　俺はあの時、状況に翻ほん弄ろうされるばかりでソーラという新

たなツインテールを、サプライズツインテールを楽しむという心の余裕が全くなかった。そのせいだろう、ファンクラ部にしても他の派閥にしても、ツインテールに注目してくれる生徒はほとんどいなかった。

　けど、唯乃は違う。自己紹介で宣言したというのも大きいだろうけど、戸惑いも後ろめたさもないこいつの純粋なポニーテールは、架け橋のように人と人の心を繋つなぐんだ……。

◇

「いやー、遊んだ遊んだ！」

「学校は遊ぶ場所じゃないんだけどな…………一応」

　御輿行あん脚ぎやの後で俺は唯乃と屋上へと足を運び、二人でのんびりと喋しやべっていた。

　愛香やトゥアールは先に、ツインテール部部室へと行ってもらっている。

「いい学校じゃねえか。生徒隊長がしっかりしてっからだろうな、メリハリがついてるぜ!!」

　すっかり定着しちゃったな、その呼び名。なんだか俺も使いたくなってきちゃったよ。

「お前に影響されてポニーテールにする女子、かなり増えたなあ」

　すれ違う多くのポニーテールを見て、俺は唯乃のカリスマを実感した。

「それでもツインテールの多さには勝てねえよ。この世界じゃ当分、テイルレッド一強は変わんねーってこった」

　唯乃は、何でも興味があると言っていた。事実、今日もあらゆることを楽しんでいた。

　だったらこの一日留学の締めは、この授業が相応ふさわしいんじゃないだろうか。

「なあ唯乃、ツインテールにしてみないか？」

　俺が意を決してそう告げると、唯乃はしばらくぽかんとしていたが──

「……おいおい、それがどんだけ困難なミッションかわかって言ってんのかあ？」

　やがて、からかうようなにやけ笑いで問い返してきた。

「わかってるよ。だから、今言ったんだ。学校で色んなことを体験した締めに、脇わき目めを振るのも悪くないだろ。それが、自分の一番好きなものを見つめ直す機会になるしさ」

「……だったら、先にお手本を見せてもらわねえとなあ？　まずお前がポニーテールになりな、総そう二じ!!」

　さらに悪戯いたずらっぽい笑みを向けてくる唯ゆ乃の。そうしたいのは、山々なんだが……。

「俺がツインテールにできるのは、変身して女になるからだろ」

「そりゃそうだ」

「でもポニーテールにするためにツインテール解ほどくと、変身が解とけるんだよ」

「駄目じゃねーか!!」

　面目ない。俺も無念なんだ。

「ちくしょー。お前のポニーテール、見てみたかったぜ！」

　大の字に寝転び、沈み始めた太陽に眼めを細めながら……唯乃は言った。

「……お前らの頭脳ブレイン。トゥアール……なら、ポニーテールにできるんだろ？」

　いつものように声が弾んでいないので、それが本気の提案ではな

いとわかる。

「トゥアールが別の髪型にしているところ、俺も見たことないんだ」

「やっぱ、ツインテールがいいんだろうなあ。お前が無理矢理にでも結んでやれよ……案外できるかもしれねえぞ、究極のツインテールさんならよ」

「断られたよ。究極のツインテールさんになる前にな」

　苦い記憶だ。俺のエゴをトゥアールに押しつけ、傷つけてしまった。

　俺なら、今のトゥアールにもツインテールを結んであげられるかもしれない──と。

　だからあの時よりさらに属性力エレメーラが強くなった今でも……俺はトゥアールに、ツインテールを結ばせてくれとは言っていない。

　フェニックスギルディ……結いわ翼ばね唯乃。

　こいつの最終目的は、首領への復ふく讐しゆうだ。いわば、世界をわたる復讐者──。

　ある意味じゃ、唯乃とトゥアールは似ている。共感できるところもあるのだろうか。

「……ちなみに俺様も、ツインテールにはできねえ。ポニーテールを解いたらこの姿を維持できなくなって、元の怪人に戻っちまうからな」

「そっか……」

「ああ。俺様には、ポニーテールだけだ」

　俺と唯乃は同じだ。

　心のツインテールと心のポニーテールは誰だれよりも強くても、現実でたなびくそれらは変身することで手に入れたものなんだ。

　それを卑下するつもりもない。むしろ、誇りでさえある。

　でも……確かにあるそれを、戯たわむれに交換することもできないのは、少し寂しいな。

　唯乃は腿を叩たたいて快音を響かせると、スカートを舞わせて立ち上がった。

「さて……。そろそろいいだろ、総そう二じ」

　俺を見下ろす唯ゆ乃のの寂しげな横顔に、何を言わんとしているかを悟ってしまう。

「……学校、楽しくなかったか？」

「馬ば鹿か言え。こんだけよくしてもらって楽しめねえほど、俺様はスレちゃいねえよ！」

「それならよかった……」

「けど、お前も思い知っただろ。俺様のポニーテールとお前のツインテールは、戦いの中でしか競い合えないんだよ」

　唯乃は俺の制服のネクタイを掴つかみ、自分の方へと顔を引き寄せた。

「他に厄介な敵がいるから俺様は後回しでいいなんてよ、馴れ合いすぎじゃねえのか」

　唇くちびるが触れ合いそうなほどの距離。唯乃の熱っぽい吐と息いきを、肌に感じる。

　互いの瞳ひとみには……互いしか映っていない。

「お前の望み通り、俺様はお前だけを見てんだ、総二。だから――――俺様と戦え」

　馴れ合い――そのとおりだ。何度も助けられたせいで、ともすれば忘れてしまいそうになるが……こいつこそがもっとも手て強ごわい敵であることも、紛まぎれもない事実なんだ。

　俺が結いわ翼ばね唯乃と向き合うためには……戦いはもう、有う

耶や無む耶やにはできない。

「──わかった。受けて立つぞ……唯乃!!」

　俺は自分でも不思議なくらい穏やかな気持ちで、挑戦に応おうじた。

　唯乃はダンスを踊るように俺の腰を抱くと、背中に炎の翼を展開させた。

　屋上から炎の火柱が上がり、戦いの場へと飛ひ翔しようする。

　俺をデートにエスコートするのは、いつだって唯乃の方だ。

　こうして俺と唯乃は、四度目の戦いを迎えた。

　決着戦となるであろう、因縁の戦いを。

　ツインテールが好きだと。ポニーテールが好きだと。

　不器用な馬鹿二人が、それぞれの属性を誇り、信念をぶつけ合う──。

第五章　ツインテール＋ポニーテール。

　相そう克こくするツインテールとポニーテールの生み出す炎が、周囲の大気全てを焼き尽くす。

　呼吸すらままならない熱波の地獄の只ただ中なかで、アルティメットチェインに最強変身チエインエヴォルブした俺とテイルギアＴＹＰＥ-Ｐをまとった唯ゆ乃のの戦いは、果てしなく続いていた。

　全ての能力、全ての武器、全ての形態を駆使してぶつかり合う……二種ふたつの髪型テール。

「テイルカリバー、希望装填ホープモード！　──教師属性テイーチヤー!!」

　発動した希望装填ホープモードの力で、教師属性テイーチヤーの属性玉エレメーラオーブがテイルカリバーの柄つかへと吸い込まれる。

　空を割るほど巨大化したテイルカリバーの光波剣を、一直線に振り下ろす。

　しかし、唯乃は俺の切り札の一つであるこの超弩級斬ざん撃げきを、紙一重で回避した。

「っとお！　へへっ、危ねえ危ねえ！　俺様の必殺技みてえなバカデカい剣使いやがって!!」

　そうか、炎の巨大剣はこいつの得意技でもあった。見切られるのも当然か……！

　けれど、俺にも見えてきた。こいつの闘法には、ポニーテールならではの息遣いがある。

　今まで何度もこいつと戦って、出たとこ任せを極めたみたいな無軌道な攻撃をしてくるように思えていたけど……その実、重心は全て一直線。軌跡はポニーテールへと集束するんだ。

　やがて俺の回避は徐々に少なくなり、攻撃の数がじわじわと増え

ていく。

　唯乃は息を荒らげながら、心底嬉うれしそうに破は顔がんした。

「……本当に楽しかったぜ、テイルレッド――そろそろ、終わりにするか!!」

　ファイナルラウンド開始のゴングのように、今一度互いの剣を撃ち合わせる。反動で飛びすさった唯乃は、不死鳥の翼を展開。炎を吹き上げて飛び立ち、地上目掛け急墜する。

「バーニング！　フェニックスキ――――――――――――――ック!!」

　前回の勝負では、撃ち合ったキックは完全に互角なまま終わった。

　この戦いに終止符を打つに相応ふさわしいのは―これしかないということか!!

　俺はテイルカリバーを放り投げると、炎の流星となって飛ひ翔しよう。

　全属性力エレメーラを右足に集束させ、唯乃のキックを迎え撃った。

　互いの全霊を籠こめた炎の蹴しゆう撃げきが、天高く邂かい逅こうする。

　右足同士が激突した状態で、完全に威力が拮きつ抗こうする。両者のまとう炎が、ツインテールとポニーテール、それぞれの属性力エレメーラのエンブレムを描いて空に猛たけった。

　まるでそのまま時間が止まってしまったかのように、周囲の音が消えていく。

『―俺様は異世界を旅して、諸悪の根源であるツインテールを消して回ってるのさ!!』

　そんな中、頭に直接声が響いた。……いや、響くのは……心の中か。

『空想装甲テイルギアは、ツインテールの専売特許じゃねえってことだぜ！』

　唯ゆ乃のとの戦いが、会話が、記憶が、色鮮やかに蘇よみがえっては消えていく。

『──テイルレッドをやめてくれ。お前はこのままじゃ……ツインテールそのものになっちまうかもしれねえ』

　思えば俺には、多くの好敵手と呼べる存在がいたが……エレメリアンとの戦いは一期一会。

　これほどまでに長い間競い続けたライバルは、こいつだけなんだ。

　胸に、熱いものがこみ上げてくる。

「唯乃……お前の心に結ぶぞ！　俺のツインテールの……全てをっ!!」

　俺は眦まなじりを決すると、背中の翼・ブレイザーセイバーを後方に屹きつ立りつするように変形させた。

「この俺を……！　飛ばせっ！　セイバ──────ッ!!」

　ブレイザーセイバー全基を、リング状の連結パーツごと射出。その莫大な反動を正真正銘の最終噴射ファイナルブーストとまとい加速した俺は──不死鳥の足を蹴けり抜いた。

「ぐっ……おおおおおおおおおお!?」

　テイルギアＴＹＰＥ-Ｐの右脚装そう甲こうがひび割れ、砕けた破片が大気に煌きらめく。

　唯乃は何な故ぜか嬉うれしそうに笑いながら、空の彼方かなたへと吹き飛んでいった──。

　一度成層圏まで吹き飛んでいった唯乃が一直線に墜落してきたのを確認し、俺は慌あわてて落下点へと向かう。

　俺は驚き、立ち尽くした。なんとそこには、巨大なクレーターの中心で腕組みをした唯乃が、マフラーをたなびかせて仁王立ちしていたのだ。

　俺はファイティングポーズを取るが、唯乃はじっと俺を見るだけで、動こうとしない。

　風にそよぎ揺れていた唯乃のポニーテールが──静かに舞い落ちる。

「────俺様の負けだ、テイルレッド」

　そして、清すが々すがしいほど真っ正直に、敗北を認めた。

「てめえ、俺様のポニーテールをバッチリ見切ってやがったな。ツインテールにそんなことされたら、立つ瀬がねーぜ!!」

「お前だって、俺のツインテールをけっこう見切ってたじゃないか!!」

「それに俺様は、お前が何かを……誰だれかを守るために戦う時に、一番強くなるのを思い知ってる。今のお前を押し切れねえってことは、互角じゃねえ……俺様の負けなんだよ」

　そんなことまで、勝負に勘案しやがって……。

　負けず嫌いなくせに……それ以上に、実直なんだよな、こいつは。

「唯乃……感謝してる。お前と出で逢あわなかったら、俺はツインテールで他の髪型と競う楽しさを、知ることはできなかった」

　しがらみや、疑念や、使命感や……ありとあらゆる不純物の介在しない戦いができたのは、相手がこの結いわ翼ばね唯ゆ乃のだったからだ。

「それを言うなら、俺様の方だぜ、総そう二じ。お前というツインテールを見なきゃ、きっと俺様は未み来らい永えい劫ごう、ツイン

テールは悪だって思いに凝り固まってただろうからな!!」

　屋上で果たせなかった最後の授業。

　俺は唯乃の心をツインテールに結び、唯乃は俺の心をポニーテールに結んだ。

　決着に頓とん着ちやくすることなく、俺たちの語り合いは終わりを迎えたのだろう。

「笑えるよな。こんだけお前との再戦にこだわってた俺様が……はっきり負けを認めたのに、全然悔しくねえ。不思議なくらい、後味の悪さがねえんだ」

「逆の結果でも……きっと、俺も同じだったと思う」

　戦うことでしかわかり合えないと思っていた俺たちは、その先に行けた。

　全てを超越した無想の極地で、ただ、互いの髪型をぶつけ合ったんだ。

「……ま、ここで一度負けを認めても、お前と二度と戦えなくなるわけじゃねえからな。もっともっとポニーテールを磨いて、いつの日かリベンジだ!!」

「ああ。俺もその日までに、さらにツインテールを成長させておくぜ!!」

　清すが々すがしい充足感に満たされながら──俺と唯乃は、固く握手をし合う。

　晴れがましい気持ちで見つめ合っていると、トゥアールから通信が届いた。

『総二様！　エレメリアンが出現しました！　メデューサギルディともカトブレパギルディとも違う、別の神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士と思われます！』

「何だって！　よし、わかった現場で……」

　合流する、と伝えようとして──俺は、ふと考え至った。

　そしてトゥアールに、愛あい香かたちに待機してほしいと伝える。

「何だよ総二、通信でもしてたのか？」

　俺は唯乃と握手をしたままの右手に力を込める。そのまま唯乃を連れ、空高く飛び立った。

「──おおっ!?　おいおい、何だ、何のつもりだっ!?」

「今まで散々俺をデートに連れ回したよな、唯乃。今日は、俺がエスコートするぜ!!」

　どこまでも続く雲──そんな色気のないデートコースを飛び、やがて辿たどり着いたのは、大規模な総合病院の外庭。トゥアールに案内された、エレメリアンの出現地点だった。

　空から降下ざまにエレメリアンの姿を認め、肝を潰す唯乃。

「なっ……エレメリアンがいるじゃねえか!?」

　よほど俺との勝負の後で気が抜けてたんだな。ここまで近づくまでに、こいつがエレメリアンの反応を察知できなかったなんて。

「テイルレッド……こんにゃろー、俺様をハメやがったな！」

「ああ、ハメてやったぜ!!」

　地面に着地すると、唯ゆ乃のは怒って俺の手を振り払ってしまった。

　お前だって、似たような不意打ちよくしてるくせに……。

『無む垢くな友情から無防備なエロ台詞ぜりふが生まれるのが最高に興奮しますね……録音録音また録音です、はあはあ、ひ……みきさあああああああああああああ!!』

『そーじっ！　わざわざあたしたちを待機させてんだから、しっかりやんなさいよっ!!』

「サンキュー！」

　愛あい香かに礼を言ったのはいいが、嬉き々きとして何か作業を

していたトゥアールの声がやがて悲鳴に変わったのはスルーして大丈夫だろうか。

「よし、エレメリアンは……」

　空から見えたエレメリアンの元へと向かう。

　足にギブスをしている女性に、エレメリアンが肩を貸して歩いていた。

「早く怪け我がを治して、レギュラーに復帰するのだぞ」

「離して、私は文化部よーっ!!」

　……愛香が危き惧ぐするとおりだ。自力で逃げられない人がたくさんいる病院を狙ねらうようなエレメリアンは、やっぱり危険だよな……。

「逃げてください！」

　俺はエレメリアンを蹴けり飛ばし、側そばにいた看護師さんに怪我人の女性を託した。

　邪魔をされたエレメリアンは、俺のツインテールを見てぼそっと呟つぶやいた。

「…………巻きやすそう……」

　……何!?　俺のツインテールに何を巻くつもりだ……!?

　神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士らしいが、すでにいつもの白ローブは脱いでいる。

「私は、怪我人属性インジユリドのマミイギルディだ……!!」

　全身を包帯でぐるぐる巻きにされたような見た目の、おどろおどろしいエレメリアン。その異様はまさに、王家の眠りを妨げるものを誅ちゆうする墓守だ。

「人の怪我を喜ぶってことか、お前は!!」

「生きるとは、傷つくこと。それに耐え、力強く進んでゆく姿に輝きを見み出いだすことは、何らおかしなことではないだろう!!」

　俺はマミイギルディを前に戦闘態勢を取るが……俺に一杯食わされた唯乃は、露骨に不機嫌になってあっさりと踵きびすを返した。

「冗談じゃねえ、俺様は帰るぜ！」

「あれ!?　戦わないのか!?」

　時じ期き尚しよう早そうだったか？　さっきの握手で、すっかりわだかまりは解けたもんだと……。

　去って行く唯乃に気を取られていた一瞬。

　マミイギルディの手から、俺目掛けてクラッカーのように分散した包帯が放たれた。

「のわ――――――っ!?」

　俺もまた、真剣勝負の後で気が緩んでいたのだろうか。

　手を、足を、身体からだを……次々に包帯で絡め取られ、マミイギルディと繫つながってしまう。

　巻きやすそうって、包帯のことか！　咄とつ嗟さにツインテールを巻かれるのは避けたが……！

　少しずつ包帯を自分の腕に巻き込み、俺を引き寄せていくマミイギルディ。

　背中の翼刃・ブレイザーセイバーを放ち、この窮地を脱しようとした瞬間。

　幾条もの紅こう線せんが宙に疾はしり、俺とマミイギルディを繫ぐ包帯を全て絶ち斬きっていた。

「……ったくよぉ、見てらんねえな！　俺様を倒した戦士が、こんなしょぼい奴やつに包帯グルグル巻きにされるのなんてよ!!」

　フェニックスラッシューターを肩に担かつぎ、仏頂面で吐はき捨てる唯ゆ乃の。

　素直ではない言葉に苦笑しながら、俺は唯乃との戦いでの取り決めを思い出した。

「そういえば……一応お前が先に負けを認めたんだから、俺には命令する権利があるよな？」

「うっ……。いや、けどよお……」

「だけどこれは、強制じゃない。俺の心からの頼みだ」

　前もって考えていたわけじゃない。

　しかし俺は驚くほど淀よどみなく、その名を口にしていた。

「俺と一緒に戦ってくれ、テイルフェニックス」

　そう呼びかけると、唯乃は放心したように立ち尽くした。

　確信が後押しする。この新戦士には……間違いなく、この名が相応ふさわしいと。

「ゆけ、強戦闘員メガアルテイロイド！　テイルレッドを包帯でデコレーションするのだ！　眼帯もいいぞ!!」

「モケー」

「モケケケ」

　その隙すきにマミイギルディは強戦闘員メガアルテイロイドを投入してきた。

　戦闘力強化を施ほどこされた戦闘員アルテイロイド──それが俺たちを隙すき間ま無く取り囲むほどの数が集まったとなると、油断できない戦力だぞ。

　マミイギルディは、俺の隣に立つポニーテールの少女をじっと観察する。

「さっきから気になっていたが、その少女は何者だ！」

「──俺の……俺たちの、頼もしい仲間だ!!」

　唯乃──テイルフェニックスとともに強戦闘員メガアルテイロイドを斬り散らし、俺ははっきりと断じた。

神の一剣ゴー・デイア・ソード。大いに喧伝するがいいぜ、俺たちの新たな仲間を――!!

「アルティメットチェインの維持がもう限界だ……戦いは長引かせられない!!」

「俺様のギアもしんどいな……一気にいくぜ！　合わせろレッド!!」

テイルギアＴＹＰＥ-Ｐに装備された伸縮自在のマフラーが、意趣返しのようにマミイギルディをぐるぐる巻きにする。

「おおおおおおおおらあああっっ!!」

唯ゆ乃のはその場で勢いよく回転しだすと、ハンマー投げの要領でマミイギルディを空高く放り投げた。

ツインテールとポニーテール。アイならぬヘア・コンタクトで互いの呼吸を合わせ、俺はテイルカリバーを、唯乃はフェニックスラッシューターを完全解放ブレイクレリーズした。

「俺様の―」

「「完全解放ブレイクレリーズ!!」」

「―テイルカリバー、究極装填アルテイメツトモード!!」

自身を高めていく過程と言葉こそ違えど、その先に待つ技は、互いに必殺。

二つの灼しやく熱ねつが今、一つに交わる。

「バーニング……フォース……フィニィ――――――――ッシュ!!」

「ファイナルブレイザ―ッ!!」

合わせろと言っておきながらめちゃくちゃ溜めて叫びやがるので、さすがに技名は揃そろわなかったが、この急増コンビもなかなかのもの。

「合体必殺！　フェニックスブレイザ――――――……お前も言

えよレッド!!」

「事前に打ち合わせしてくれよ!!」

黄金の光波剣はさらに灼熱をまとい、巨大な鳳ほう凰おうを象かたどった斬ざん撃げきとなって猛然と飛ひ翔しようした。

「怪け我がでは……済まんな、これは━━━━━━━━━━━━っ!!」

雄叫び上げる黄金の鳳凰が、黄金墓の守人を直撃する。

満足げな声を空高く響かせ、マミイギルディは爆散した。

……サッカーじゃてんでバラバラだったけど、戦闘こつちは息ピッタリだな、俺たち。

雲の代わりに揺らめく火炎を空に臨のぞみながら、俺はテイルフェニックスに礼を言う。

「ありがとう唯乃、周囲に被害が及ばないように戦ってくれて」

「当たり前だ。俺様は別に、世界をブッ壊したいわけじゃねーんだぞ！」

戦いの規模を察してかなり遠巻きに見ていたギャラリーが、決着と同時に俺たちの元へとなだれ込んでくる。

「強つえぇー！　またレッドちゃんがパワーアップしてるぞ!!」

「翼の生えたレッドちゃんだ！　天使すぎてつらい!!」

あれ、アルティメットチェインって一般人にはっきり見られるの初めてだっけ……。

「しかも新しいツインテイルズ、めっちゃ可か愛わいくて強いぞ!!」

「ついに、ついに！　普通な人間の仲間がレッドたんにできたのね!!」

ギャラリーの予想外の歓迎。テイルフェニックスは、自分を指差して狼ろう狽ばいする。

「ツ、ツインテイルズ？　俺様が!?　いやよく見ろよ！　俺様、ポニーテ……」

　皆まで言わせず、俺は唯ゆ乃のの手を取って空に掲げた。あたかも、試合を終えたボクサーが相手の健闘を讃たたえるかのように。

「みんなー、この子もたまに一緒に戦ってくれる俺たちツインテイルズの仲間なんだ、よろしくなーっ!!」

「ちょ、おい！」

　民衆に手を振られながら、俺は唯乃を連れて空高く飛び上がった。

「てんめえ……俺様今まで目立たないようにしてきたのに、完かん璧ぺきに外堀埋めやがったな!!」

　確かに……反逆者のこいつにとって目立つのは御ご法はつ度とかもしれないが、それはイースナも同じだ。逆にここまで注目を集めてしまえば、こいつも観念してくれるだろう。

「レッド。お前さっき、俺様のことをテイルフェニックスって呼んだよな。それが、この姿の俺様の名前か？」

「俺たちみたいにパーソナルカラーで名付けてもいいけど……お前、俺とは親友ダチではあっても仲間じゃないってのが持論だったろ？　だったら、最初はこの方がいいと思ってな」

　エレメリアン・フェニックスギルディと、ポニーテールの少女・結いわ翼ばね唯乃。

　どちらもこいつ自身なんだ。だったら、両方を尊重した戦士名コードネームの方がいいもんな。

　俺は空で静止し、テイルフェニックスと向き合った。

「一緒に出撃してくれなんて言わない。お前の好きな時に来て、お前の信念のままに戦ってくれればいい。その名前だって、気に入らなかったらお前が好きに変えてくれ」

　譲歩や妥協じゃない。こいつは元々、そういう戦士だ。

四六時中一緒にいるだけが、仲間じゃないからな。

「……ああ。こんな戦いも面おも白しれえや！　またいつかこうやって一緒に戦ろうな、レッド!!」

俺に別れを告げ、空の彼方かなたへと飛び去っていくテイルフェニックス。

俺の申し出への答えこそはぐらかされてしまったが、ついに結翼唯乃は、俺と決着を着けることにこだわらなくなった。

偉大なる一歩……ツインテールとポニーテールの歴史的和解、ってところかな？

……さて、帰るまでに愛あい香かたちのフォローを考えないとな。

先ほどの、世間の熱烈な唯乃の歓迎ぶりを見て、えらいことになってるだろうから……。

◇

テイルフェニックス。総そう二じの名付けたその戦士名を噛かみしめ、天空を飛ひ翔しようする唯乃。

空に炎の飛行機雲を残し、深い森へと急降下する。

テイルギアＴＹＰＥ-Ｐを解除し、生身の唯乃の姿へ。そこからさらにフェニックスギルディに変化しようとしたところで、ふと背後を振り返る。

穏やかな微ほほ笑えみを浮かべ、テイルブラックが立っていた。

「やっぱあんたか。気配消して尾つけるのうめえな！」

「フッ……総そう二じにもよくそう褒ほめられておる」

総二はいつの間にか自室に侵入してくるイースナをやんわりと窘たしなめているだけなのだが、本人には全く伝わっていないよう

だ。

「基地で待機してたんだろ？　何の用だい、俺様とリベンジマッチでもしに来たか？」

　当然のように唯ゆ乃のはそう尋ねるが、ブラックは真っ向から否定した。

「貧乳といいお前といい、乙おと女めが訪ねてきて真っ先に思いつくのが何な故ぜそれなのじゃ、暑苦しい！　ガールズトークをしに来ただけじゃ!!」

「んん？　ガールズトークだぁ？」

　神眼鏡ゴツドめがねのレンズが、光彩に揺らめく。

「総二の誘いだけで迷っているのなら、わらわからも頼む」

　決意を込めるように一呼吸置き、ブラックは告げた。

「――焼き鳥よ、ツインテイルズになれ」

　ブラックは……唯乃の決断の後押しをしに来たのだ。

「これは、わらわたち皆が思っていることじゃ。イエローは大歓迎じゃろうし、貧乳とてそのうち慣れるわ。貴様を敵視しておるのはエレメリアンだからではない、乳があるからじゃ。あやつの憎悪は全て、乳に集約されるからのう」

「余計根が深くねえか、それ!?」

　所在なさげに頭を掻かく唯乃。

「でもあの科学者……トゥアールは違うだろ」

「そう、一番の問題が、エレメリアンを憎んでいるトゥアールじゃったが……最近、態度が軟化したようでな。むしろ、エレメリアンに理解を示し始めて葛かつ藤とうしているようなのじゃ」

「……そか」

　確かに、先日地下基地で会った時、前ほど棘とげのある感じはなかったが……。

「仲間になったら、毎日遊べるぞ。そうだ、総二とわらわとお前とで、仲良くエロゲーをしようではないか。きっと楽しいぞ!!」

　ブラックの脳裏には、ファミリーゲームのコマーシャルのように居間のソファーに仲良く座ってゲームに興じる温かな光景が浮かんでいるのだろう。

　それがエロゲーなのが、若干の問題だが。

　唯乃は手近な岩場にどっかと腰を下ろし、脚を組んだ。

「なあテイルブラック、どうしてそこまで俺様のことを気にかける？　元々、俺様の処刑に失敗したのがあんたの転落の始まりじゃねえか。メガ・ネだっけ？　あのロボかーちゃんも、ひどい目に遭っちまったしよ」

「転落ではない、新生じゃ。おかげでわらわとメガ・ネは救われた。過程はどうあれ、貴様と関わって辿たどり着いた結果いまを、むしろ感謝しているほどなのじゃ」

　強い意志の光が、ブラックのレンズの奥の瞳ひとみには宿っている。

　それは、一度地獄を潜くぐり抜けた者だからこそ持ち得る、真実の優しさだった。

「あの時お前がわらわを助け、ツインテイルズを頼るよう背中を押してくれなければ……わらわもメガ・ネも、毎日を笑顔で過ごすことはできなかった。お前はわらわの恩人じゃ」

「よせよ。あんたの恩人なんて、他にいくらでもいんだろ！」

　照れくさそうに、鼻先を指で掻かく唯ゆ乃の。

「うむ、わらわには恩人が多すぎる……。一人一人、しっかりと恩を返していくつもりじゃ」

「あんたと俺様は違う。俺様は今でも、ツインテール属性の拡散を止めることは正義だと思ってる。俺様はツインテールの敵だ。ツインテイルズにとっちゃ、相あい容いれない存在のままだ!!」

「それを認めることができるようになっただけ、お前は成長してお

る。わらわと同じなのじゃ！　総そう二じと出で逢あい、触れ合うことで、変わることができた!!」

　瞳を潤うるませながら、感情をぶつけるブラック。そう言う彼女こそ、こんなにも他人を思いやれるほど成長したのだ。

「フェニックスギルディという存在に固執せず、人間・結いわ翼ばね唯乃として生きるのじゃ。そして……テイルフェニックスとして戦うがよい」

「……!!」

　その一言で、唯乃ははっと息を呑のんだ。

「テイルブラック……」

「わらわのことはイースナと呼べ。わらわも、お前のことは唯乃と呼んでやる」

「わかったよ……あんがとな、イースナ!!」

　観念したように笑う唯乃。

「おお！　確かに聞いたぞっ!!」

　瞬間、華が咲いたように破は顔がんするブラック。

　大おお仰ぎような口調で大人ぶってはいるが、彼女は子供だ。緊張の糸が切れたのだろう。

「わらわのアドレスは変わっておらぬ！　いつでもメールしてくるがよい！」

　嬉うれしそうに手を振り、何度も振り返りながら……ブラックは帰っていった。

　口うるさい姉のようでもあり、手のかかる妹でもある。

　そして最初の好敵手でもあるイースナの熱意は、決定的に唯乃の心を動かした。

「……テイルフェニックスとして戦う──か。それもいいかもな」

◇

「妹は大別するとこのようになる！　いいか、妹心とは複雑なもの！　その扱い方も千差万別、臨機応変なお兄ちゃんになるんだぞ!!」

　今日もアルティメギル基地の大ホールで、メデューサギルディの講義が開催されていた。

「反抗的な妹も最高だ！　普段はゴミを見るような目で『兄貴』と吐はき捨てている妹が、秘めた想いを隠しきれなくなり上目遣いで『お兄ちゃん』と言ってきた時を想像してみろ!!」

　モニターには生命セフイロトの樹にも似た難解な枝分かれ図で、非常に詳細な妹の解説が。

　天井からは大きな垂れ幕が提げられ、「センター試験に間に合う！　理系お兄ちゃんと文系お兄ちゃん、それぞれの妹の伸ばし方」と書かれている。

　センター試験には間に合うかもしれないが、生物として手遅れになりそうな講義だ。

　特に、眼めをかけられているせいかスワンギルディが執しつ拗ように注意されているのが不ふ憫びんだった。

「いやー、ししょーやっぱさすがっすわー……眠ねっむ」

　基地内でも素顔を露あらわにしたカトブレパギルディは、隅で堂々と欠伸あくびをしていた。

　その眠気顔が、にわかに引き締まる。カトブレパギルディが視線を向けた先は、出入り口の先の通路だった。

最近の楽しみである新米隊長おとこと熱血上司おとこの語らいを見に行こうと、マーメイドギルディは浮かれた足取りでホールへ向かう。

廊下の角を曲がってすぐ、彼女を待ち構えるかのようにアポロギルディが立っていた。

「うふふ。メデューサギルディ君に時間稼ぎしてもらっている間に、色々と動き回っていたみたいだけど……」

マーメイドギルディはそこで大きく嘆息し、

「――私の身辺調査は済んだ？　探偵さん」

とうとう、今まで気づかないふりをしていた事実を言い捨てた。

「うーん、アウトだな!!」

アポロギルディは特に動揺することもなく、無邪気に指を突きつける。

「元・神の一剣ゴー・デイア・ソードのあなたは……首領様に盾たて突こうとする奴やつはやっつけなきゃ、ってわけ？」

マーメイドギルディは廊下の壁にもたれかかり、幼い戦士に詰問する。

「あははー！　神の一剣ゴー・デイア・ソードの奴らも、みんなそう勘違いしてるんだよな！　僕らの仕事は、首領様を守ることじゃないのに！」

隊の大義であり、存在理由を、いともたやすく全否定するアポロギルディ。

「首領様は絶対に誰だれにも負けない。僕らの仕事はさー、首領様がわざわざ戦って落胆するような雑魚ざこを、辿たどり着く前に振るい落とすことだぞ!!」

「門番の戦いくさ女め神がみが倒されちゃったから、あなたがその仕事を代理でやってるんだ？」

マーメイドギルディは鼻白みながら、アポロギルディの横を通り

過ぎようと歩き出す。

　刹せつ那な。あらゆる感情の消え去った機械じみた声で、アポロギルディは告げた。

「──だから頑張れよ、マーメイドギルディ。お前は何とかふるいに引っかかってるだけの、一粒の粉に過ぎないんだぞ？」

　殺気も、怒りも、そこには何一つ存在しない。

　興味を失ったおもちゃを無感情に捨て去る子供のようだった。

「じゃーなー、あははー!!」

　まるであの無機質な声こわ音ねは、時の狭はざ間まに聞こえた幻聴だったかのように。

　普段の愛あい嬌きようを取り戻し、とことこと廊下を走っていくアポロギルディ。

「なぁるほど、こりゃペガサスギルディ先輩も大変だったわけだ。すごいわね」

　おそらくは首領から残酷なほどの期待をかけられ、同じような苦境に立たされたであろう最高科学者の先達に、口先だけの敬意を表する。

　四面楚歌の重圧。あらゆる勢力に敵視されるこの状況をも愉たのしみ、マーメイドギルディはのほほんとホールに入っていった。

　行われている妹講義は想定内だが、モニターに映っている映像に違和感があった。

「あら珍しいわね、どうしてテイルレッドちゃんじゃなくて、他のコを映してるの？」

　表示されているのは、度たび々たびエレメリアンの前に現れる白衣の少女の映像だ。物珍しさから、メデューサギルディに理由を尋ねるマーメイドギルディ。

「この少女は仮面ツインテール。〝守りたくなる妹〟の講義の教材サンプルにちょうどいいのでな」

「この部隊の資料で何度か見たわよ……侵略を受けた世界から来て、ツインテイルズのサポートをしてるっていうコでしょ？　ツインテール属性を奪われた女の子なんて星の数ほどいるのに、わざわざ仮面で顔を隠してるコを教材サンプルに選ばなくても……」

　興味のないものにはとことん興味のないマーメイドギルディだ。仮面ツインテールは資料で確認した後、研究の対象外と結論づけていた。そんな彼女とは裏腹、メデューサギルディは一目見て何かを感じた仮面ツインテールについて、しっかりと調べたようだ。

「違う。資料をよく読まなかったのか？　彼女はエレメリアンに奪われたのではなく、自分自身でツインテール属性を摘出し、ツインテイルズの力の礎いしずえにしたということらしい。その上で我われらと戦い続ける健けなげさが、たまらなく俺の胸を打ったのだ!!」

「――――え」

　それを聞いた瞬間。

　かつてない邪悪な笑みが、マーメイドギルディの美貌を彩いろどった。

◇

　テイルレッドとの戦いの翌日──地下基地で、結いわ翼ばね唯ゆ乃のはトゥアールと向かい合っていた。

　今日はドレス姿ではなく、以前未み春はるにもらった私服を着ている。

「おう、トゥアールさんよ。今までは許可しなきゃこの基地に入れてくれなかったじゃねえか。あんたがわざわざ俺様を呼ぶなんて、どういう風の吹き回しだい？」

　しかも、コンソールルームには他に総そう二じも愛あい香かも、誰だれの姿もない。

疑問に首を傾かしげている唯乃を、トゥアールは椅い子すに座るよう促うながした。

「……仲間になりたければ、勝手になってくださいと言っておきたかっただけです。総二様の盾たてが増える分には、私は文句ありませんから」

昨日のイースナの言葉を思い出し、苦笑する唯乃。

不器用な和解の言葉だが……もちろん、それだけを言うためにわざわざここまで案内したわけではない。トゥアールは本題に移った。

「ところであなたは、アルティメギル首領と会ったことがあるのでしょう？　少しでも情報を提供してください。どのぐらいの強さなのか、どんな能力を持っているのか」

「わかんねえ。情けねえが俺様、再生復活する間もなく封印されちまったからよ」

肩透かしを食らい、大おお仰ぎように溜ため息いきをつくトゥアール。

「強しいて言うなら、テイルレッドとの相性は最悪かもな。総二は……相手が属性への愛が強ければ強いほど、負けまいと燃えて強くなる奴やつだ。けど首領は何な故ぜか、属性への愛とかねえように感じるんだ。それで強いんだから曇るだろうなあ、総二」

「そうですか……。エレメリアンである以上、首領も核の属性があるはず。それだけでもわかれば……と思ったんですが……。そうなると頼りは、あなたの持っているという一度のみ首領の間に行ける転送ゲートだけですね」

「あ……そうか。俺様がいると……首領んとこに行けちまうんだな、総二は」

自分の呟つぶやきを聞いて不審な視線を向けるトゥアールに、愛想笑いで誤ご魔ま化かす。学校でも羨せん望ぼうの的だった脚を無造作に机の上に載せ、唯乃は尋ねた。

「ところでアルティメギルとの戦いが終わったら、あんたどうするんだい。レッドのブレスをバラして、自分のツインテール属性を戻

すのか？」

「一度加工した属性力エレメーラを元に戻すのは不可能です。造った私が一番よくわかっています」

「だったら、総二を頼って一からツインテール属性を創ればいいじゃねえか。究極のツインテールならできるかもしれねえだろ？あんた、あいつに惚ほれてるくせに何で遠えん慮りよすんだよ」

「惚れているから……好きだから、遠慮するに決まってるじゃないですか!!」

　激情のままに机を叩たたき、立ち上がるトゥアール。

　踏み入って欲しくない心の領域に、エレメリアンは平気で入ってくる。トゥアールが彼らを嫌う理由の一つだ。

「……私が冗談半分でもツインテールに戻りたいと口にしたら……きっと総二様は、どんな犠牲を払ってでも……どんな苦痛に耐えてでも、それを叶かなえようとしてくれます。絶対に無理なことなのに……」

「だろうな。だがそれを、あんたが気に病む必要はねえだろ。総そう二じは、あんたのツインテールを見たくてそうするんだろうからな。そりゃあ、単なるあいつの我わが侭ままさ」

「それでも私は……そんな苦痛ことには耐えられません。それは、私の我が侭です」

　唯ゆ乃のは、初めてテイルレッドと戦った時のことを思い出していた。

　あの時はまだ、自分と大きな力の差があったテイルレッドだが……トゥアールに危険が及ぶかもと思った瞬間、凄すさまじい力で自分を止めてきた。

　そして二度目。総二が禁断の暴走に身を窶やつしてまで守ろうとしたのは——やはり、トゥアールだった。

「……幸せもんだな、総二は。あんたみてえな人から、ツインテールをもらってよ」

　その声があまりにも優しくて……トゥアールは、毒気を抜かれてしまった。

「私だって、あなたが羨うらやましいですよ。やりたいことは何でもする……言いたいことは全部口にする。そんな気持ちのいい生き方……人間にはできないんです」

　だからだろう。強がりでひた隠し続けた唯乃への本心を、始めて口にした。

「……俺様、あんたのことも結構好きかも！　親友に似てっからかな？」

　無邪気に白い歯を見せる唯乃とは対称的に、トゥアールは赤面してそっぽを向いた。

「～～～～～～ッ……！　も、もう用はありません、早く帰ってください！　私はまた、ペガサスギルディの研究データを調べることにします!!」

　唯乃が基地に来た時はお馴な染じみとなった、口先だけの邪険な態度であしらわれる別れ。

　席を立って出口に向かいながら、唯乃は忘れ物でも思い出したように振り返った。

「あんたも総二も、首領なんかに関わるべきじゃねえよ。これからは……自分のツインテールだけを考えて生きりゃいい。ピンポイントで漁あさるのは、別のデータにしときな」

「別のデータ……？」

「ペガサスギルディはよ、俺様とは別の方法で、ポニーテールの人間になろうとしてた。多分、それについてのデータもわんさと入ってる。そいつを当て込んでみたらどうだい？」

「何が言いたいんです、あなたは」

　苛いら立だつトゥアールに、唯乃は懐っこい笑顔で伝えた。

　今まで幾度もの確執があり、それを乗り越えた自分たちの間だからこそ伝えられる、心からの激励を。

「総二を頼るのが偲しのびねえなら、あんた自身でケリをつけるしかねえだろ。自分の心によ」

　それだけ言い残すと、唯乃はポニーテールを翻ひるがえして去って行った。

　出入り口のドアが閉まると、トゥアールは穏やかに微ほほ笑えみながら嘆息する。

「……総二様のライバルは……エレメリアンのくせにお節介焼きばっかりですね……」

　基地から地上に上がると、唯ゆ乃のはそのまま喫茶店アドレシエンツアへと足を運んだ。

　半ば指定席のようになったカウンター席で、コーヒーの香りを楽しむ。

　その横顔には、開放感と、彼女には珍しい、淡い憂うれいが見て取れる。

「やっぱ美う味めえな、マスターのコーヒー！」

　カウンターの奥でカップを拭いている未み春はるに向け、唯乃は実直な賛辞を送る。

「唯乃ちゃん、いい表情かおしてるわね。吹っ切れたみたい」

「……ホントに普通の人間かよマスター、あんた鋭すぎんだろ」

「……ま、普通の人間じゃない――かもね」

　などと言いつつ、未春はちゃんとテイルレッドとの戦いを基地で見ていたのだ。

　息子が、また独りの少女に手を差し伸べる瞬間を。

　カウンター越しで唯乃に顔を近づけ、未春はある提案をした。

「ねえ、唯乃ちゃんさえよければ……この店でアルバイトしてみない？」

「え、俺様が？」

総そう二じが指摘しているとおり、もはや店員など不要で回ってしまっている謎なぞ空間だ。アルバイトなどどう考えても必要ない。

仲間となった唯乃への……テイルフェニックスへの、未春なりの思いやりだった。

「俺様が看板娘になったら、お客さんみんな、ポニーテール好きになっちまうかもな!!」

「ふふ、考えておいてね？」

晴れ晴れとした笑顔で頷うなずくと、唯乃は席を立った。

「ごちそーさん！　また来るぜ、マスター!!」

「……うん。いつでも来て、唯乃ちゃん」

未春はもっといつものように、おちゃらけて送り出すつもりだった。

しかし今日は何な故ぜか……ただ優しく、唯乃に微ほほ笑えんでいた。

「――――さって、と……」

背中に聞こえるカウベルの音も快こころよく、唯乃は空を振り仰いだ。

見上げる太陽が雲に隠れているのが、少し残念だった。

◇

唯乃の一日留学から数日経たった。

校内には唯乃ロスが蔓まん延えんし、その人気の程が窺うかがえる。

　俺たちツインテイルズはというと、打倒メデューサギルディの対策を練る日々だ。

　その日の放課後。ツインテール部部室にはまだ俺と愛あい香か、トゥアールしかいないが、これまでの行動パターンから打開策を話し合う。

「あいつの魔ま眼がんの有効範囲は、ずばり『視界』そのものだと思う。あいつに見られなきゃ動きを止められることもない……分散して、挟み撃ちにする戦法ならいけるはずだ」

「気づかれないように空中から急降下して、一気に倒すって手もありじゃない？」

　トゥアールは、話し合いに参加する一方で、手元のノートＰＣでは何か別の作業をしているようだ。俺は気になって聞いてみた。

「トゥアール、最近時間を惜しんで作業してるみたいだけど……何を作っているんだ？」

「ええ、ツインテイルズの新アイテムです。調子に乗っている焼き鳥娘に目にもの見せてやらないといけませんからね、一番総そう二じ様のお役に立てるのが誰だれなのかを」

　トゥアールが戦闘用アイテムの製作に着手するの、結構久しぶりだな。

　最近元気がなかったトゥアールだけど、唯ゆ乃のが俺たちと絡む時間が増えてから、負けじと張り切るようになったと感じる。それって、すごくいいことだよな。

　トゥアールはノートＰＣを回転させ、俺たちに画面を見せる。

　プログラムは全くわからないが、別ウィンドウに属性玉エレメーラオーブのような３Ｄモデルが表示されているのは見て取れた。

「その要かなめはずばり、属性力エレメーラの製作です！」

「えっ⁉」

　俺はすぐに疑問が浮かんだが、それも想定内なのだろう、トゥアールは説明を続けた。

「はい、お考えの通り、属性力エレメーラを人工的に生み出すことは絶対に不可能です。ペガサスギルディの研究データにもやはり、幾度と挑戦して失敗したことが記されていました」

　当然か。それができれば、エレメリアンは人間世界を侵略しなくて済むんだ。人間より遥はるかに進んだ科学力を持つアルティメギルが、そういう研究をしていないわけがないからな。

　だから、あいつらの考える本来の究極のツインテールには……全ての人間に強制的にツインテール属性を芽吹かせるなんていう、悪魔の能力が求められたんだから。

「ですが、ヴァルキリアギルディにしろフェニックスギルディにしろ、属性玉エレメーラオーブの無い状態から精神生命体を……エレメリアンを復活させているんです。これはおそらく、彼女たちが擬似的な属性力エレメーラを自らの能力で顕けん現げんしているからだと考えられます」

「疑似的な、属性力エレメーラ？」

「私はそれを、疑似属性力オルタエレメーラと名付けました。つまり、元ある属性を補助するための属性です」

　……なるほど、人間も臓器を完かん璧ぺきに一から造り出すことは今の医学でもまだまだ不可能だが、人工臓器で体機能を補助することはできる。それと同じような理屈かな。

　その瞬間、俺の横を疾風が吹き抜けた。

「トゥアール様、お茶が入りました」

　メイド服を着た愛あい香かがトゥアールの側そばで恭うやうやしく膝ひざをついている。

「え～、何してるんですか愛あい香かさん。あなたの出すお茶なんて、利尿剤とか入ってそうで怖くて飲めないんですけど～」

「トゥアール様におかれましては本日はお日柄もよくその偉大なる叡えい智ちに我われ々われは感服するばかりでございますがところで擬似的に属性力エレメーラを作る研究をなさっておられると聞き及びここは是非とも巨乳属性ラージバスト作ってください」

合成音声じみた抑揚のない声でトゥアールに懇願する愛香。

親の顔ほど何度も見た展開が、俺に冷や汗を促うながす。

「巨乳属性ラージバストですかぁ～？　そんなの作ってもー、私はもうおっぱい超大きいですしー？　補助する意味ありますかね～？」

わー愛香の持ってる鉄製のお盆が紙製のコースターみたいにくしゃくしゃになってくー。

「重々、重々承知致しておりますが、ここはトゥアール神しんのご威光を満天下に知らしめるために……やはり、巨乳属性ラージバストをまず量産すべきかと」

いま量産しろって言わなかったか。何度も失敗してるから、もはや数で攻める気なのか。

「んもー、私の研究を応援したいならその辺で愉快に腕立て一〇〇回しててくださいねー」

「はい、連続五〇〇〇回まででしたら余裕です」

青筋どころか、顔の筋繊維が浮かびかねない無理な作り笑顔でトゥアールに媚こびる愛香。

雄お々おしくプッシュアップを始めた愛香に代わり、俺はトゥアールの制作風景をしばらく見ていることにした。

「疑似属性力オルタエレメーラの技術が確立すれば、テイルギアほどの出力は出せないにしろ、皆さんのサポートアイテムをばんばん作れるはずです。期待していてくださいね、総そう二じ様!!」

「あ、ああ……」

何な故ぜ俺は、こんなに歯切れの悪い相あい槌づちを打ってしまったんだろう。

疑似属性力オルタエレメーラ──説明を聞く限りは、頼もしい発想だ。

何より、今度こそトゥアールが明るさを取り戻し、自分の大好き

な子供たちの平和のために、そして俺たちの助けになるようにと、頑張ってくれている。それが嬉うれしいじゃないか。

　それでも不安を感じてしまうのは……俺が一度、自分が究極のツインテールであると知った時に、激しい恐怖と戦った経験からだろうか。

　人工的に属性を産み出すことが、どれほど恐ろしいかを知っているから──。

◇

　何なん人ぴとの来訪も拒こばむ、神秘の空間。

　多次元宇宙を凝縮した底無しの迷宮の最奥に、それは存在する。

　──アルティメギル首領の間。

　組織の中でも、限られた強者しか来訪を許されない。

　またその資格が無くなった者は、二度と自力で辿たどり着くことはできない。

　マルチバース・キューブの名で畏おそれられるこの場所は、無数の異世界を侵略するエレメリアンの頂に相応ふさわしき、一個の魔界だ。

　そんな不可侵の聖域に──数年ぶりに知人と再会したかのような、陽気な挨あい拶さつが響く。

「よう、久しぶりだな──首領ッ!!」

　不死鳥のエレメリアン、フェニックスギルディだ。

　その双そう眸ぼうに迷いは無く、拳こぶしに震ふるえは無い。

脚はただ傲ごう然ぜんと歩みを進め、闘気はごく自然に溢あふれ、揺らめき昇る。

迷いの晴れた、清すが々すがしき一人の戦士の立ち姿がそこにあった。

多くの優しさに触れ。多くの厚意に感謝し。

その上で戦士は──独り、この場所に立つことを選んだのだ。

「ほう……貴様か」

迎える首領の声こわ音ねにも、喜色が滲にじんでいる。

（悪ぃな、総そう二じ。このままじゃお前は、本当にこいつの元に辿り着いちまう。けどお前は……こんな奴やつに関わっちゃいけねえんだ。こんな闇やみを見ないで、生きていって欲しいんだ）

フェニックスギルディは、心の中で総二に詫わび入る。

信念を正義と掲げ、時に侵略紛まがいの方法を用いてまで、多くの異世界を守ってきた不死鳥。

（それが、俺様に本当の心をくれたお前らへの礼だ───）

ポニーテールの戦士は今日初めて、本当の意味で何かを守るために戦う。

首領の座る玉座は、聖布ヴエールによって覆おおわれている。うっすらとシルエットが見えるのみだ。

その聖布ヴエールの奥で、厳おごそかにパイプオルガンを奏かなで始める首領。

演奏のクライマックスに合わせ、聖布ヴエールの前を白い鳩が何羽か飛び去っていった。

あの鳩は何ど処こから来て、何処へ飛んでゆくのか。

「これで幾久方の退屈も止まる……。再びの来訪歓迎するぞ、フェニックスギルディ」

「コーヒーは出さなくていいぜ。とびきり美う味まいのを、もう飲んできたからな!!」

　聖布ヴエールを隔へだて、並び立つ両雄。

「乗り込んで来たのはよいが……帰りの扉は、用意しているのか？」

「ねえよ。戻りのアシなんざ、てめえをブッ倒して考えらあ!!」

　容た易やすく手の内を見透かされても、フェニックスギルディはあっけらかんと言い捨てた。

　フェニックスギルディはマーメイドギルディとの取引で、不可侵たる首領の間への転送ゲートを手に入れた。しかしそれは……使えるのは一回限り。いわば、片道切符だ。

　こうなった以上、フェニックスギルディは首領を倒さない限りこの空間から二度と脱出することはできない。背水の陣へと、自らを追い込んだのだ。

　決戦の時――来たる。

「曲くせ者もの！　この聖域を何と心得る!!」

　だがこの因縁の邂かい逅こうを邪魔する、無粋な声が響く。

　白いローブをまとった巨きょ躯くが、静厳な空間に乗り込んできた。

「なんだあー!?」

「不埒な反逆者めが、首領様の御前に立つだけで畏おそれ多いわ!!」

　白けたような声を上げるフェニックスギルディの前で、その戦士はしゃがれた大声を響かせながら、白いローブを脱ぎ捨てる。全ぜん貌ぼうを露あらわにしながら、高らかに名乗り上げた。

「私は誇り高き神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士、トロルギル

ディ！　首領様に手出しはさせぬぞ!!」

　まるで森林をそのまま生物にしたかのような、木々の葉のような緑色の体毛で恰かつ幅ぷくのいい全身を覆おおわれた、野性味溢あふれる外観。

　トロルギルディは無骨な剣と円盾ラウンドシールドを出現させて構え、フェニックスギルディの前に立ちはだかる。

「おい！　名乗るなら属性もセットが礼儀だろうが！　てめえの属性は何だ!!」

「……………………いや、それは言えぬ。どうせドン引きするし……」

　ただでさえ横槍やりを入れられて苛いら立だっていたところに、この煮え切らない態度。

　沸点の低いフェニックスギルディは、即座に沸ふつ騰とうした。

「じゃあすっこんでろ、お飾りが!!」

　焔えん銃じゆう剣けんフェニックスラッシューターを出現させ、手首のスナップで柄つかを折り曲げると、銃形態へ変形させるフェニックスギルディ。

　そのライフルのような長銃から放たれた炎弾を円盾で防ぎながら、トロルギルディがじわじわと後あと退ずさりしていく。

「ぬぐっ……!!」

「てめえの愛も誇れねえ戦士が、戦士であることを誇れるはずがねえだろう!!」

　エレメリアンとしても、強部隊の隊長レベルの強さを持つフェニックスギルディだ。

　神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士相手とはいえ、一般兵相手ならば変身するまでもなく互角以上に戦える。

　炎弾の連射で円盾を弾はじき飛ばすと、フェニックスギルディは翼を羽ばたかせて急迫。

　トロルギルディが反射的に振り下ろした剣を紙一重の見切りで躱かわし、猛たける不死鳥の業火を右拳こぶしへと集束させた。

「フェニックスパ――――――――ンチッ!!」

　灼しやく熱ねつの剛拳が巨漢トロルギルディの腹筋を深々と貫き、天高く吹き飛ばす。

「ぐわああああああああああああああだって絶対理解してくれないだろ、ブス専の不細工属性アグリーなんてえええええええええええええ!!」

　ブス専――。

　秘め隠した嗜し好こうの暴露を悲しき辞世の訴えと遺のこし、トロルギルディは爆散。激しい炎を巻き上げた。

　フェニックスギルディ自身の発する炎と融とけて交ざり合い、爆炎は巨大化。

　瞬く間に、首領の間を一面の火の海へと変えてしまった。

「トロルギルディよう。そこにふんぞり返ってる奴やつのためを思うなら、俺様よりもそいつ自身と遊んでやりゃよかったんだよ。忠臣だって褒ほめてもらえただろうぜ!!」

　聖布ヴエールを力強く指差すフェニックスギルディ。

　直後、周囲の空間が奇妙に捻れていく。そのまま、ブス専の怨念のごとく燃え盛っていた炎があっという間に霧散してしまった。

　フェニックスギルディにとって、この空間はアウェイ。首領の力に支配された結界の中なのだと痛感し、気を引き締め直す。

「お飾りか。耳が痛いものだ。神の一剣ゴー・デイア・ソード……最強部隊であることは紛まぎれもないが、肩書きに溺おぼれた思い違い者が多いのも事実」

「ただ力が強つええだけの奴かき集めりゃ、そうもならあ。いつしか、熱く心を燃やすことを忘れちまってんのさ!!」

「左様。トロルギルディも、憐あわれな戦士であった。戦うべきツ

インテールの戦士は、突出した美しさを持つ世界の偶像……奴の好む造ぞう詣けいであるはずもない」

　理解を得づらい属性を持つ戦士の多い神の一剣ゴー・デイア・ソードに属した戦士の、末路は二つ。

　諦てい観かんし心を燃やすことを忘れていくか……メデューサギルディのように、開き直って更なる研けん鑽さんを積むかだ。

「それに……どうも今は、神の一剣ゴー・デイア・ソードという部隊そのものが〝遊び場〟になっているようだがな」

「あの女め狐ぎつねのこと、知ってて見過ごしてんのか。いい性格してるぜ!!」

　フェニックスギルディはたっぷりと嫌みを込めて吐はき捨てるも、首領は全く動じない。

　首領は、神の一剣ゴー・デイア・ソードが正常に機能していないことを知っている。その原因であるエレメリアンも看かん破ぱしている。その上で、捨て置いているのだ。

〝その方が面白い〟と。

「フ……思い違い者も多いが、本物も確かに存在する。ヴァルキリアギルディや……その上に立つ戦士のようにな」

「それを統すべるてめえはどうだ？　本物か、ええ!?」

　フェニックスギルディの挑発への返礼とばかり、首領のシルエットが右腕を掲げた。

　ガラスを刃物で掻かくような、耳障ざわりな高音が反響する。

「今より、この場所には何人なんぴとも立ち入れぬようにした。お前への褒ほう美びだ」

「ヘッ、取り巻きどもの助けを自分で拒否ったのか、後悔するなよ!!」

　かつて玉座に坐したままメガ・ネを破壊したように、首領の能力は底知れない。

　軽口で応おうじながらも、フェニックスギルディは全方位へと神経を研とぎ澄ませていた。

「助力が必要なのは、貴様のはず。何な故ぜ、一人でここに舞い戻った？　一房ひとつを愛するが故ゆえに孤高を貫くが、ポニーテール属性の戦士の矜きよう恃じか」

「……んな小難しい信条なんざ持っちゃいねーよ。勝算があるからに決まってんだろ」

　フェニックスラッシューターを豪快に素振りし、切っ先を聖布ヴエールへと突きつけるフェニックスギルディ。

「てめえに封印された時、俺様は本当の力を見せちゃいなかった。……見せたくなかったってのが正しいかな。今日はとことん見せるぜ。しかも今の俺様は、あの時より遥はるかに強い!!」

　総そう二じたちとの出で逢あいで成長した、自分の全てをこの戦いで爆発させるべく。

　今、不死鳥は信念を吠ほえる。

「俺様は、自分のポニーテールを信じる！　勝負だ、首領!!」

「存分に参れ──不死鳥」

　まずは首領の全ぜん貌ぼうを露あらわにしなければ、この再戦は始まらない。

「フェニックスチョ──────────ップ!!」

　必殺の手刀を、聖布ヴエールへを見舞う。

「おっ……!!」

　手刀が聖布ヴエールに弾はじかれ、身体からだを泳がせるフェニックスギルディ。

　ただの薄布にしか見えない聖布ヴエールはその実、硬度という概念すらも超えて鉄壁。

　首領とその前に立つ者とを、世界もろとも隔絶するかのようだっ

た。

「貴様を封印した時も、余はこの玉座から一歩も動かぬままであったぞ。此こ度たびもその繰り返しになるとすれば、ひどく興醒めであるな」

　今度は両の拳こぶしを連続して撃ちつけるも、やはり聖布ヴエールはビクとせずただ揺らめくだけだ。

　一呼吸置いた瞬間、フェニックスギルディの全身を落雷じみた光が襲おそう。

「っ……ぬぐおおおおおおおおお！」

　聖布ヴエールの奥で、首領が右手を突き出していた。

　とうとうフェニックスギルディは、首領の放った光の威力に耐えきれず爆発してしまう。

　……もちろん、ここで終われば不死鳥の名が廃る。

『ヘッ、まだまだだぜ!!』

　気迫溢あふれる声が首領の間に響き、噴き上がった炎が人間大に凝縮していく。

　フェニックスギルディの真骨頂、完全再生。

　粉々に吹き飛んだはずの身体からだが、瞬く間に再誕を果たした。

「倒しても斃たおれず、殺しても死なぬ猛者とは、ダークグラスパーの評であったが……貴様の不死は本当に強さか？　フェニックスギルディよ」

「あん？」

「お前は、死とは何か──考えたことはあるか？」

「死だぁ？　んなもん、常に小こ脇わきに抱かかえて生きてきたぜ！　ぜってー死なねえのが、俺様の取り柄えだからな!!」

「そもそも、何を以もつて死とする？」

　首領の禅問答じみた問いに、フェニックスギルディはじっと耳を傾けている。

　面倒臭がりではあるが、相手の信念や信条ならば理解しようと努める。それがフェニックスギルディのポリシーなのだから。

　自分では決して認めないだろうが、ことさらに中二台詞ぜりふを愛する首領とフェニックスギルディは、相性はいいのだ。

「生とは、死タナトスの声を傍かたわらに聞くこと……。死無き戦士フェニックスギルディよ、死の声が聞こえなくなった瞬間、お前の生は終わっていたのだ」

「終わってねえから今、てめえをブン殴なぐれるんだろうが!!」

　詰まるところは、再生力に頼った戦いでは自分に勝てない──首領の挑発と受け取ったフェニックスギルディは、全身からおびただしい炎を噴射。

　炎で自身を包み繭まゆ状に集束させると、羽化を遂げるように勢いよく砕き割った。

　炎のドレスをまとった少女──結いわ翼ばね唯ゆ乃のが姿を現し、不敵な笑みを浮かべる。

　再生力など、ただのおまけのようなもの。ポニーテールこそが自分の真骨頂。

「さあ、ここからが本番だぜ!!」

「……よいポニーテールだ。不死鳥の最終闘体……まやかしではないな」

　首領は唯乃のポニーテールを目まの当たりにし、心底嬉うれしそうに賞賛する。

「いい加減、布っきれと遊ぶのは飽き飽きなんだよ!!」

　唯乃は全身に火炎をまとうと、天井高く跳躍。

　炎で形成された翼をはためかせ、首領の玉座を包む聖布ヴエール目掛けて急降下した。

「バーニングフェニックスキ――――――――――――――――ック!!」

　かつてノーパンで蹴けりを繰り出し、イースナを絶句させた迂う闊かつさは、今の唯乃にはない。

　股を護まもりしは、純白のパンツ。

　これこそ、唯乃が人と触れ合い育はぐくんだ、心の証あかしなのだ。

「ぐっ……！」

　それでもなお、聖布ヴエールの護りは鉄壁。

　渾こん身しんのキックを受け止められ、襲おそい来る反動に歯を食いしばりながらも……唯乃は決して弾はじき飛ばされまいと、全身にまとった炎の勢いを高め続けた。

「キックキックキック……！　キ――――――――――――――――ック!!」

　滞空したまま、足踏みのように連続して両脚でキックを撃ち込んでいく。

　絶え間なく積み重なっていく衝撃が、ついに聖布ヴエールの神秘を打ち崩した。

　行き場を失ったエネルギーが爆発し、再び首領の間が炎の海に呑のみ込まれる。

　吹き飛び、床に尻しり餅もちをついた唯ゆ乃のは……氷細工のように砕けた聖布ヴエールを見た。

「へっ、ざまあみろ！　さあ、引きこもりは終わりだ！　とっとと出てきやがれ、首領!!」

　すかさず立ち上がり、自慢げにポニーテールを掻かき上げる唯乃。

「……………………よかろう」

　突とつ如じよ、首領の間に女性の……少女の声が、鈴のように

鳴った。

「お前はその資格を得た、フェニックスギルディ」

　その少女の声が、これまで底気味悪く何重にもぶれて聞こえていた首領の──聖布ヴエールを通さぬ本当の声なのだと悟り、唯乃は全身を総毛立たせた。

「余が貴様を封印した真意、今こそ教えよう」

　炎の向こうで、聖布ヴエールの加護が消え、丸裸となった玉座から首領が立ち上がる。

「究極のツインテールの真理を知った、ペガサスギルディの仲間であること……」

　一言一言を重く紡つむぎながら、ゆっくりと歩を進める。

「ツインテール属性に仇あだなす、ポニーテール属性を持つこと……」

　ゆっくりと、ゆっくりと。

「組織に従わぬこと……完全再生能力が脅威であること……」

　今、この瞬間を……首領自身、愉たのしんでいるかのように。

「そのどれもが、違う」

　しかし首領がついに炎を肩で切り、全ぜん貌ぼうを現したその時。

　好奇心で強く吊つり上がっていた唯乃の口くち端はは、しだいに力無く解けていった。

「貴様はエレメリアンの禁断の最終闘体に……人間になってしまった」

　戦いくさ女め神がみヴァルキリアギルディが、身命を賭して拝謁を望んだその素顔が。

「先の戦いで余に見せまいとしたその姿ポニーテールこそ、唯一余が警戒したもの。何な故ぜなら──」

今──白日の元に晒さらされることとなった。

「────余と同じだからだ」

首領は。

無限数にも等しきエレメリアンたちを束ねる巨きよ魁かい、アルティメギル首領は。

人間の、少女の姿をしていた。

紅あかの衣装ドレスをまとう唯ゆ乃のと似て非なる、血のように赤い聖装ドレスで首から下を覆おおっている。

神聖さと邪悪さを兼ね備えたその装衣は、まとう者を神にも悪魔にも見せるようだ。

だが……ただ人間を模した姿だというだけならば、唯乃もここまで衝撃は受けない。

その外見は、ある少女に酷似していた。

「……その顔……テ、テイルレッドか!?　いや……」

テイルレッドによく似ているが、幼さは残りつつも少女としての面影が色濃い。唯乃と同じぐらいの年齢に見える。

何より……テイルレッドが生命いのちと等価に守り、結んでいる自慢のツインテールが、たなびいていない。髪はただ無造作に、腰まで伸ばされているだけだ。

それはツインテールを解ほどいたテイルレッドという、ありえるはずのない異常事態。

どこかにリボンを置き忘れた、ツインテールだった少女──。

立ち尽くす唯乃へ、首領は透き通った声で穏やかに告げた。

まるで神話を綴った書を、厳おごそかに繙ひもといていくかのよ

うに。

「この者の名は、ソーラ。全次元全異世界で初めてツインテールを結んだ少女。ツインテールの女神だ──」



第六章　アルティメギルの頂点。

　首領の正体を前に、困惑する唯ゆ乃の。

「ソーラ、だとぉ……!?」

　究極のツインテール、テイルレッドの姿を模したというのならば、まだわかる。

　だが首領は今はっきりと、ソーラという名前を口にしたのだ。

（ソーラてなあ、総そう二じが女になっちまった時に仲間と一緒に決めた名前って言ってた……あいつら元ネタなんて知らねえで名付けたはずだ。見た目がそっくりな女の名前を、偶然思いつくなんて……できすぎだぜ!!）

　首領に悟られぬよう、口に出さず心の中で疑問を渦うず巻かせる唯乃。

「貴様がポニーテールの少女に心奪われたように、余もその女神に憧あこがれた……。ツインテールに魅せられた。まだその頃ころはアルティメギルなどという組織も存在しない。ツインテール属性がもっとも効率のいいエネルギー源であることを、余ですら知らぬ頃であったが──」

　唯乃の驚きよう愕がくを嘲あざ笑わらうかのように、首領はさらに子細を語り聞かせる。

　もし仮に、首領の言葉の通り女神ソーラが本当に存在するとしたら、全ての元ネタ──オリジナルは彼女のはず。

　女神の存在を知る首領がその姿を模すのはともかく、何な故ぜ総二はソーラの姿になった。

　何故仲間たちは、ソーラという偽名を思いついたのだ。

　まさか……総二がソーラという少女になったのは、アクシデントではない。

　二人の間には、ツインテールのように深く結ばれた因縁があるのでは――。

　ただただ戦慄わななく唯乃を見て、首領は冷たく眼めを細めた。

「驚愕のあまり声も出ぬか、フェニックスギルディ」

「……拍子抜けしたんだよ！　クソッ、俺様やペガサスギルディが翻ほん弄ろうされ続けた、アルティメギルの頂点が……不完全な人間に化けて粋がってたとはな！」

　亡き親友の分まで、無念がこみ上げる。

「正直に言うぜ……俺様はな、ちょっとお前にビビってたんだ！　再戦して本当に勝てるか不安だった！　それが蓋ふたを開けてみりゃ、出てきたのはこんな紛まがいモンかよ!!」

「紛い、とは？　何を以もつて紛いと断じる？」

「肝心要のツインテールができちゃいねえだろ！　ツインテールの女神サマとやらに憧れたって割りによぉ！　そりゃこんな所に引きこもりもするぜ、んな偽物の姿、部下に見せるわけにはいかねーもんな!!」

　唯ゆ乃のが人間の姿になって見せた時、ダークグラスパーは仰天していたが……それはフェニックスギルディが、エレメリアンでありながら人間に完かん璧ぺきに変身したからだ。

　上っ面だけ人間に化ける程度なら、できるエレメリアンは少なくはない。

　首領の不完全な人間の姿の再現は、まさにその低レベルな変化の範はん疇ちゆうだ。少しリアルなマネキンに過ぎない。

　今の首領からは、息遣いも体温も、人間らしさを何一つ感じない。

　何よりそれらの再現クオリティと引き替えにしてでも完成度を高めねばならないはずの、ツインテールができていない。

　自分が恐れた目標がこの程度だったと知り、唯乃は羞しゆう恥ちにも似た怒りに震ふるえていた。

「ツインテールにできずに物真ま似ねされるなんざ、その女神さんが不ふ憫びんでならねえ！　聖布ヴエールみたいにブチ砕いて、引いん導どうを渡してやるぜ、首領ッ!!」

　もはや、首領を守る聖布ヴエールは存在しない。

　今度こそ炎の拳こぶしを叩たたき込まんと、唯乃は吠ほえ走った。

　しかし、首領がその細腕を緩慢に突き出した瞬間。

　唯乃はまるで、正面からダンプカーにでも跳ねられたような勢いで吹き飛ばされた。

「うわああああああああああああっ……!!」

　宇宙空間を押し固めたような昏くらく冷たい床を、為なす術すべ無く転がっていく唯乃。

「部屋のカーテンよりも惰だ弱じやくな家主が、いると思うてか？」

「ひたすら自宅を警備してる奴やつは、言うことが違うねえ……!!」

　軽口を挟む暇いとまもなく、唯乃に次々と衝撃が打ちつけられていく。

　襲おそい来る弾丸が、全く見えない。

　念動力の塊かたまりのようなもので、四方八方から殴なぐりつけられているかのようだ。

「どういう理屈か知らねえが、そんな半端な見た目でもパワーだけは最強ってわけかい！」

　その事実が、ますます唯乃の闘志に火を点けた。

　ポニーテールを誰だれよりも愛していたから、ここまで強くなれた。生半なまなかな憧あこがれの果てに得た強さなどに、負けるわけにはいかない。

　フェニックスラッシューターを手にし、実体化させたテイルレインフォーサーを一いち瞥べつする。

（見ててくれよ──親友）

　唯乃は親友の形見を……テイルレインフォーサーを焔えん銃じゅう剣けんに合体させ、首領に見せつけるようにして構えた。

「テイル……オン!!」

　エレメリアンと人間、二人の天才科学者の邂かい逅こうが生み出した、空想装そう甲こうテイルギア。

　その試作機たるＴＹＰＥ-Ｐをまとい、エレメリアンの頂点に君臨する者の前に立つのは──人間の心と身体からだを手にした、ただ一体のエレメリアン。

　機甲の翼をまといし不死鳥は、雄叫びとともに炎を全身から噴き上げた。

「ほう……その装そう甲こうが貴様の切り札か、フェニックスギルディ」

　首領の賞嘆に対し、不死鳥は堂々と名乗りを上げた。

「今の俺様は、テイルフェニックス。てめえが執着してる、テイルレッドが名付け親だ。覚えておきな!!」

「皮肉よな……。せっかく名付けてもらったその戦士名は、戒かい名みようとなる。貴様の墓石に、しかと刻んで進ぜよう」

　ピアノの鍵けん盤ばんを爪つま弾びくように、空中を両の五指でなぞる首領。

　不可視の念動波が急襲し、したたかに打たれながらも構わずに疾しつ駆くし、テイルフェニックスは拳こぶしを繰り出す。

　首領の胸に命中するが、薄衣の下の身体からだは鉄のように硬く、火花を散らして拳を弾はじいてしまった。装甲を着込んでいるわけではない。生身が、無機質な硬さなのだ。

「ほら見ろ、胸がマネキンみてーに硬いじゃねえか！　女の胸は

な、柔らかいんだぜ!!」

「何も理解しておらぬな━ポニーテールよ。ツインテールにとって首から下など、無意味。意識を捧ぐ価値もない」

「だから、んなこだわりがあるくせに何でツインテールにしねえんだ、てめえは!!」

　ギアのマフラー型パーツを伸長させ、ところ構わず振り回す。首領が放ったのであろう不可視の念動波がそれに直撃し、爆音を立てて弾け飛んでいった。

「ッ……らあああああああああああああ!!」

　掌てのひらに練り上げた炎を無造作に宙へと乱射し、マフラーを再び伸長操作してバレーのスパイクのように首領へと撃ち放っていく。

　自ら放った無軌道な炎弾を縫ぬって、テイルフェニックス自身も首領へと迫撃。嵐のような徒と手しゆ空くう拳けんを見舞っていった。

「ッ……む……」

　ひたすらに不動と直立を堅持していた首領が、その猛攻の前についによろめく。

　今度は首領が、回避を許さぬ終わりなき連撃に晒さらされることとなった。

　炎弾を念動波で弾き、大きく後方に飛び退のく首領。

　翻ひるがえった紅あかい聖装ドレスから垣間かいま見みえた脚は……体温が通っていないかのような、イミテーションじみた白肌だった。

「……強い━。よくぞここまで成長した、フェニックスギルディ……いや、テイルフェニックスよ。余が敵と認識したのは、貴様が初めてだ」

　この勢いのままに押し切る。テイルフェニックスはフェニックスラッシューターを正眼に構えると、夥おびただしい爆炎をその身に

まとわせていった。

「そのツラで出てきたのは失敗だったな！　そいつがツインテールにしてねえなんて、あまりにも現実感がねえ！　俺様の正義が！　許すなって叫んでんだよ!!」

　テイルギアＴＹＰＥ-Ｐの背中にある鳳ほう凰おうの翼が分離し、猛然と旋回。周囲を炎の竜巻で覆おおい尽くした。

「俺様の――完全ブレイクッ！　解放レリーズッッ!!」

　天高く掲げたフェニックスラッシューター。その刀身の銃口が開き、炎の凝縮された巨大な刃やいばが形成されてゆく。

「受けやがれ首領！　この剣が……てめえに倒された俺様の親友と！　俺様自身の！　怒りの一撃だあああああああああああああああっ!!」

　太陽の斬剣が今、偽いつわりのツインテールを屠ほふり去る。

「バ―――――ニングフォースフィニイイイイイイイイイイイイイイイッッシュ!!」

「！　む、お……!?」

　常に余裕の微笑を湛たたえていた首領の口くち許もとに、初めて驚きよう愕がくが張り付く。

　そしてその時には、全てが決していた。

　怒りの、悲しみの……積年の思いを結集した、渾こん身しんの一いち斬ざん。

　それは空間に立ち込めていた神秘もろとも、首領を直撃した。

「み、見事だ……テイルフェニックスよ―!!」

　首領の間そのものが、真っ二つに斬裂される。

「……はあ……はあ……」

　息を荒らげながら、眼前を睨にらみ続けるテイルフェニックス。

　これまで何度も、油断をして煮え湯を飲まされてきた。

　この大一番で、テイルフェニックスに慢心はない。

　放った炎が勢いを弱め、消え去る瞬間まで、瞬まばたきもせず警戒し続けた。

　五体は炎に呑のまれ、欠片かけらも残っていない。どこかに転移した気配もない。

　首領は……完全に消滅した。

　テイルフェニックスは、勝利の実感を握り込んだ拳こぶしを、天高く衝つき上げる。

「……やった……。とうとう、やったぜ……!!」

　アルティメギル首領という巨凶は、不死鳥の執念の前に消し飛んだのだ。

「見ててくれたか、ペガサスギルディ!!」

　無念を分かち合った親友へ、勝利の報を手た向むける。

　あとは、出口の無いこの迷宮からどう脱出するかだが……今しばしの間は、この勝利の余韻に浸ひたっていたかった。

◇

　地下基地に、俺と愛あい香か、慧え理り那な、イースナ、メガ・ネが集まる。

　トゥアールから、重要な発表があるとのことだ。

「ご覧ください皆さん！　ついに完成した新アイテムを!!」

　嬉うれしそうに勿もつ体たいつけた動きで、テーブルの上に何かを載せるトゥアール。

それを目にした俺たちは、一様に身を乗り出した。

「えっ……ええええええええええ!?　これは、新しいテイルブレスですの!?」

真っ先に声を上げ、目を輝かせたのは、慧理那だ。

なんと、そこにあったのは新たなるテイルブレスだったからだ。

「その名もテイルブレスオルター！　この先の戦いの鍵かぎを握るであろう、ツインテイルズの新たな力です!!」

「オルター……つまり擬似的なテイルブレスってことやね！」

メガ・ネが初めて立ち会うブレス誕生の瞬間に、声を色めかせる。

俺はそのテイルブレスオルターを、まじまじと見つめる。

形はテイルブレスそっくりだが、全体的に灰がかった色だ。

何よりブレスで一番特徴的な、色鮮やかな宝玉コアの部分……加工されたツインテール属性がなく、それがあるべき部分が窪くぼんでいる。当然か。

「もちろん、これはまだまだ試作品、今はおもちゃみたいなものですが……」

それでも、新しいテイルブレスが作られるなんて、それこそイエローが初めて変身した時以来だ。そう考えると、かなり久しぶりだ。

俺たちが舞い上がるのも、無理はない。

「今は疑似属性力オルタエレメーラ自体が試行段階ですので、変身機能はありませんが……いずれこれが完成品になって尊みことさんが恒常的に変身できれば、ツインテイルズの戦力アップに繫つながります!!」

「…………えっ？」

トゥアールの予想外の言葉に、つい驚きで声を上げてしまった。

　この場に桜さくら川がわ先生がいたら……同じように驚いていただろうか。

　俺は……このブレス、疑似属性力オルタエレメーラの研究は、トゥアール自身のためのものだと思っていた。

　ツインテール属性を取り戻す足がかりにすべく、頑張っているのだろうと……。

　いや、ここで無理に聞く必要もないだろう。

　テイルブレスオルターの制作は、その本番に向けての試作てところだろうしな。

「…………」

　イースナは、難しそうな顔をして黙り込んでいる。

　トゥアールの発明が嬉しくないのだろうか。それとも彼女も、この研究に何か言い知れぬものを感じているのだろうか……。

　そんな一抹の不安を殴なぐり飛ばす、一等星にも似た明るい声。

「トゥ・アー・ル・さ・ま☆」

　摺すり足でトゥアールに近寄っていく愛あい香か。

　何かもう、言葉から星が飛び散ってるみたいに浮かれている。

　愛香は満面の笑顔で、トゥアールに向かって手を差し出した。

「あたしの巨乳は？」

「そんなものはありません」

　そして始まる、親の顔ぐらい何度も見た終局。

　俺が何かを悩んだり疑問に思ったりすると、ほぼ必ずトゥアールの悲鳴で中断されるから、もう悩むなってことだよなこれ。

「騙だましたわね……騙したわねえええええええええええええええええええええええええええええええ!!」

「勝手に尽くして勝手に絶望して勝手に病む……よく見てください総そう二じ様！　これです！　これがこの重すぎる女の本質ですぎゃああああああああああああああああああああああ!!」

　積み重なった恨みを晴らすかのように放たれる、組み技投げ技打撃技の総集編。

　筋肉をつけすぎないように気をつけているという愛香だが、それでもトゥアールの悪戯いたずらで何千回も腕立てをしまくった分、多少腕力は上がってしまっているかもしれない。

　トゥアールは今、自分が育てた力によって滅びようとしているのだ……。

　その時、地下基地内にけたたましいアラートが鳴り響いた。

　慧え理り那ながコンソールに駆け寄り、モニターに情報を表示する。操作方法覚えたんだ……。

「メデューサギルディの反応ですわ！　出撃しましょう!!」

　凛り々りしい表情で敵の出現を告げる慧理那。サポート体制は今日も万全だ。

　普段それを伝える役目の人が今、自分自身の生命いのちの警報アラートを発令してるからね……。

「エレメリアンに救われたわね、トゥアール」

　トゥアールをぺいっと投げ捨てる愛香。

　救われてないように見えるぞ、エレメリアン全然間に合ってないぞ。

　この数日の間に立てていた作戦を、俺は再度みんなと一緒に確認する。

「俺がメデューサギルディを逃がさないように引きつけるから、ブルーはカトブレパギルディを頼む。イエローとブラックとメガ・ネはメデューサギルディの死角から攻撃だ。とにかく、全員が魔ま眼がんに囚われることがないよう、常に奴やつの視界を意識して戦おう」

「ほんと、気をつけてねそーじ……レッドが一番狙ねらわれているんだから」

　いつものことさ──。俺は心の中で、寂しく微ほほ笑えむ。

　トゥアールは這ほう々ほうの体ていで俺の足にしがみつくと、震ふるえる手でテイルブレスオルターを差し出した。

「も、持って行ってください、総そう二じ様……。変身機能はありませんが、疑似属性力オルタエレメーラの補助による出力強化は可能なはずです……。そして私の仇かたきを、テイルブルーを倒してください……」

「すまないトゥアール……そんなボロボロの身体からだで、俺たちを気遣ってくれて……!!」

　倒すべき敵が、違っていたような気がするが……。

　俺はテイルブレスオルターを受け取り、左手首へと装着。転送ゲートへと急いだ。

◇

　メデューサギルディたちが現れたのは、小学校の校庭だった。

　子供や学生どころか、自分で資質ありと見なせば大人の女性だろうと妹扱いするとんでもない奴やつだ。なるべく人の多い場所に現れることだけが、これまでの唯一の共通点だった。

「みんな、早く逃げて!!」

　俺はメデューサギルディのガン見から生徒たちを遮さえぎるよう

に着地、側そばにいる教師に避難を促うながした。

　続いて降下したブルー、イエロー、ブラックも、壁となって生徒たちへの視線を遮る。

　メガ・ネは、そのおかん力で生徒を引率し、避難を手助けし始めた。

「おうおう、今日は左腕にもブレスレットを着けているのだな。可か愛わいいぞ、テイルレッドよ」

　メデューサギルディは、構えている俺の左腕に目ざとく視線を寄よ越こした。苦虫を噛かみ潰したような表情になるブルー。

「速攻でブレスに気づいてる……キモすぎるわこいつ!!」

「馬ば鹿かめ、妹のオシャレにマメに気づいてあげることが、愛され兄さんのコツなのだ!!」

「はぁ!?　常識みたいに言わないで！　女の子はそういう外の変化じゃなく、内な心かに気づいてくれる方が嬉うれしいんだから!!」

「当然それも気づくぞ！　妹とはこの世でもっとも心移ろう難しき存在だからな!!」

　ブルーは早くも、メデューサギルディと口論を繰り広げている。

「どんなに気遣いを主張したって、お前が世界中の人たちを不安にさせていることに変わりはないんだ！　メデューサギルディッ!!」

　長く続いたこの不毛な後手打ちを終わらせるべく、俺はツインテールに闘志を漲みなぎらせる。

「兄に守られるべき妹でありながら、見事な闘気！　今日こそ戦うか、テイルレッドよ」

「ふざけんな、今日こそ逃がさ……え？」

　メデューサギルディの方から勝負を挑まれ、俺たちは怪け訝げんな表情を浮かべた。

　何な故ぜだ……俺たちはまだ何の作戦も実行していない。こいつ

が観念するような要素は、何もなかった。何故今日なんだ。

「逃げないのなら好都つ合ごうじゃ、普通に戦って普通に倒せばよい!!」

　神眼鏡ゴツドめがねのブリッジを指で押し上げ、ダークネスグレイブを構えるブラック。

　四の五の言うより、千せん載ざい一いち遇ぐうのチャンスを逃のがさない。確かにその方が建設的だな。

「待て、場所を移そう。そんな猛たけ々だけしさでは、妹たちの通うこの学校が消滅しちゃうゾ」

　そう提案するメデューサギルディに、お前が言うな──という言葉を呑のみ込む。

　俺たちはその場を離脱。少し離れた場所にある、廃工場へと戦いの場を移した。

「さあ、今日はお兄ちゃんの熱い眼まな差ざしをとことん受けてもらうぞ、テイルレッド！」

「はいはい、ししょーもレッドちゃんも勝手にやって頂戴ね～」

　やる気満々のメデューサギルディとは裏腹に、カトブレパギルディが全くやる気がないのは、今日も変わりがないようだった。

「……ねえ、カトブレパギルディ」

　また呑のん気きに化粧を始めるカトブレパギルディに向かって、ブルーが一歩進み出る。

「あんた、弟が好きな属性なんでしょ？　ずっと気になってたんだ」

　そのまま問答無用でウェイブランスを突き込む様を想像していた俺は、やけにフレンドリーに話しかけるブルーに驚きよう愕がくした。

　ブルーがエレメリアンに「ねえ」って言ったら、続く単語は「死ね」じゃないのか……!?

「え、何よテイルブルー、あなた話せるの？　弟クン談議いけるの？」

「あたしも手のかかる弟がいたようなもんだから、ちょっとしたもんよ」

「わー、ちょっとちょっと！　いいじゃんいいじゃん、語ろうよ!!」

　そのまま俺たちから少し離れ、ガールズトークを始めてしまった。

　馬ば鹿かな……あれほどエレメリアンを憎み続けたブルーが!?

　巨乳の疑似属性力オルタエレメーラが完成しなかったショックで、心が裏返ってしまったのか!?

「きっとブルーはああして理解を示すふりをして、敵を引きつけてくれているのです」

　疑念に駆られる俺に、イエローが小声で説明してくる。そうか、作戦の一環だったのか。

「確かに。ブルーが敵と話に花を咲かせるなんて、普通ならあり得ないもんな……」

「ブルーがカトブレパギルディを……作戦どおりですわ。レッドはメデューサギルディを！　わたくしとブラックとメガ・ネさんで、お二人をそれぞれサポートします!!」

「よしわかった!!」

　ブレイザーブレイドを手にし、メデューサギルディと相対する。

「テイルレッド、もっともっとお兄ちゃんを『む～』と睨にらむのだ！　とても嬉うれしい!!」

　こいつ、願望がストレートな分、こっちのダメージがデカいんだよな……。

　念のため、気が変わって逃走されないようにメガ・ネはメデューサギルディの背後の空中で浮遊し警戒している。気になるのか、メガ・ネをチラ見するメデューサギルディ。

「大好きなくせに言葉に出さないのぉー。すーぐムキになっちゃったり、それに──」

「わかるわかる、何でも強がるのよね。お風ふ呂ろ長く入れるとか、自分の方が早く着替えできるとか、あと──」

　……あの会話は作戦だと信じよう。とにかく今は、メデューサギルディを倒すのに集中だ。

　まずは小手調べにと、ブレイドを振りかぶった俺は……空をつんざくようなカトブレパギルディの声に、思わず足を止めてしまった。

「ッはあああああああああああああああ!?　テイルブルーあなた、それって最終的に弟に支配されたいってコト!?　わかってないわー全然わかってないわー主導権とかいらないわー!!」

「あんたこそ、弟を自分の操り人形にしたいわけ？　対等な関係でもいいじゃない！　っていうか、いつかは追い越して力関係が逆転するから弟って可か愛わいいんでしょ!?」

「いやそれは普通の男子でもいいわけっしょー!?　弟はそーゆーのいらないし！　弟はいつまでも可愛いままでいて欲しいの！　それがお姉ちゃんゴコロなの!!」

「無知は罪ね。弟が日に日に男らしくなってくときめきを知らないんでしょ、エレメリアンだから!!」

　あっれ、何か話してるうちにすげーヒートアップしてるぞあちらさん……。

　俺とメデューサギルディは同時にブルーたちを注視し、また互いに視線を交わした。

「邪教徒！　あんたに弟萌えの何たるかを語る資格はないわ!!」

「わざわざあんたに資格をもらわなきゃいけない筋合いもないわ」

　常に言い返す側のブルーの声のトーンが、どんどん低くなっている……。

「あぁ～あこれだから下等な猿は！　低脳すぎて泣けちゃうし！　弟っていう神聖な存在のいいところぜーんぜん理解してないんだから！　キモッ!!」

「──は？　虫ケラが何吠ほえてんの？　どうせ弟の魅力なんて理解する脳も搭載してないんだから、おとなしく踏み潰されなさいよ」

　……怪人より人間の悪口雑言の方がドスが利いてるってのが、おかしくないかね……。

「ああやってエレメリアンの趣味嗜し好こうに物申すのは、仮面ツインテールの専売特許だと思ってたけど……今日のブルーはすげえな」

　俺はブルーの演技力に圧倒される。メデューサギルディはというと、女の戦いから目を逸そらし、わざとらしく身体からだを掻かき抱いだいた。

「怖い怖い、弟好きは多様性を認められずすぐ争いになる……だから常日頃ごろから、妹好きの寛容さを見習えと言い聞かせているのに」

『やっぱりそうだと思ってたんですよ！　愛あい香かさん、過去へ飛んだ時に何を見てきたか、これで確信しました！　今日の録画映像で当分からかえます!!』

　トゥアール、何かブルーの弱みを握ったって感じだな。だけどそのパターンで逆襲されなかった例しがないので、止やめておいた方が……。

『ですが、ブルーたちの議論自体は、早く止めた方がいいですね。あの議論の先に待つのは殲せん滅めつ戦です。大きい方がいい小さい方がいい、仲間を呼ぶのはありなしなど、どんどん主張が激化し、相打ちとなるでしょう!!』

　トゥアールの説明は抽象的すぎてよくわからんが、危険なのは理解した。

「くーたばりなさいエセブラコン!!」

「いや、殺すのはあたしだから」

　って、ちょっと遅かった。気がついたらボコり合ってるぞあっち……。最初はあんなに仲よさそうに話し合っていたのに、何が二人の仲を引き裂いてしまったんだ。

「……な、何かタイミングを逃のがしたけど……勝負だっ!!」

　ブルーがハッスルして一人でカトブレパギルディを食い止めているので、メデューサギルディには俺とイエロー、ブラック、メガ・ネの都つ合ごう四人がかりとなる。

「……演技には見えなかったが……役割ご苦労、カトブレパギルディ!!」

　だが、まるでこちらと同じく作戦行動を取っていたかのようなメデューサギルディの言葉に、俺は嫌な予感を覚えた。

「……あわっ!?　なんや、身体からだの自由がきかへん……!?」

　愛あい香かが想定していた死角の一つ、空中に待機していたメガ・ネが、推進力を失ったロケットのように不自然に降下。地面に着地し、たたらを踏んでいた。

「……レッド！　わたくしたち……また動けなくなっていますわ!!」

　そしてイエローが、顔色を変えて声を上げる。

　いつの間にか奴やつの魔ま眼がん、〝愛しき妹へ捧ぐ熱視線アイマイアイギス〟の術中に嵌はまっていたか……!!

「けど、こんな時のために二手に別れたんだ！　ブルー、頼む!!」

　俺はこちらの伏兵たるブルーに逆転を託すが、

「──いや待って、あたしまで動けなくなってる……!!」

　なんと、ブルーまで身動きが取れなくなっていた。

　馬ば鹿かな、どうして俺たち全員を捕捉できた!?　上空の死角に回り込んでいたメガ・ネや、カトブレパギルディと対たい峙じして

いたブルーまで能力に囚われているなんて!?

「ムフフ。対策を講じてきたようだが……残念だったな。妹とは難しき存在！　お兄ちゃんが愛いとしくとも、ついつれない態度を取ってしまうもの！　そんな妹にはガン見ではなく、チラ見を繰り返して優しく見守ってあげなければならん！　チラ見の積み重ねでも、俺の魔眼は十分にその効果を発揮するのだあーっ!!」

　──こいつ、想像を絶するほどの変態だった……！　カトブレパギルディと口論するブルーを何度もチラ見したのは、少しずつ魔眼の効果をかけるための下準備だったのか!!

　初戦の焼き直しどころか、今回は伏兵までまんまと魔眼の効力に捕らわれてしまった。より状況は厳しいものとなってしまったんだ。

　それにしても、直接目を合わせる必要すらないなんて、神話のメデューサより余程タチが悪い呪のろいじゃないか!!

　今度こそ、動けない俺の元へとゆっくり歩いてくるメデューサギルディ。

「フッ……もう頑張らなくていいのだ。あとはこのお兄ちゃんに、うんと甘えるがよい」

　そしてメデューサギルディは、俺の頭を撫なでてきた。

「───！　何てソフトタッチだ……!!」

　そのあまりの優しい手つきに、俺は少なからず動揺してしまう。

「強くなればなるほど、俺のこの手は妹を傷つけてしまう……。しかし強くなることは止められぬ。だから俺はせめて、愛いとしき妹をなでなでしてあげる時だけは、羽根のように軽く……そう在あれるよう、弛たゆまぬ努力を重ねてきたのだ」

「撫でない方向で努力しろよ!!」

「撫でたいだろうが」

　メデューサギルディの自由すぎる生き様に目め眩まいを覚えた俺だが、咄とつ嗟さに閃ひらめいた。

「そうだ、イエロー！　ミサイルでもレーザーでもいい、撃って爆圧で俺たちを吹き飛ばせ！　悪いみんな、多少の怪け我がは我慢してくれ!!」

　こいつは俺たちの意識まで停止させられるわけじゃないんだ。直接手にする武器は振るえなくても、意思を込めることで発動するテイルギアの装備までは止められない!!

「それではッ──」

　イエローが胸アーマーを展開し、ホーミングミサイルを左右二発発射する。

　ミサイル同士を空中でぶつけて誘爆を狙ねらおうとしていたようだが……その二発は、宙に煙の尾を残したまま、ピタリと静止してしまっていた。

「え……ええっ!?」

「言ったっしょ？　私はししょーのお目付役だって。ししょーの眼のアシストをするのが、私の役割なんだよねー」

　こちらへ悠々と近づいてきたのは、これまで戦闘に介入することのなかった、カトブレパギルディだった。驚きよう愕がくするイエローと俺たちに、絡から繰くりを明かす。

「私の魔ま眼がんはししょーのみたいに有機物──生物じゃなくて、無機物──つまり攻撃そのものを金縛りにするの。こんなふうにねー」

　空中に浮かぶミサイルを、悠々と手で掴つかむカトブレパギルディ。そのまま空あき缶でも放るように、背後へと投げ捨ててしまった。

「二段構えだったのか……!!」

　魔眼を持っていたのは、メデューサギルディだけじゃなかった。

　メデューサギルディが戦士の動きを止め、カトブレパギルディが攻撃そのものを封じる。

　こいつらは、二人合わさることで真価を発揮する戦士だったん

だ。

「それでは、わらわが神眼鏡ゴツドめがねから光線を放っても同じか……!!」

　歯は噛がみするブラック。動きも、攻撃も封じられ、絶体絶命に陥おちいる。

　こいつが初戦で最強を自負していたのも、あながちハッタリじゃない。

　強力な自分の能力に驕おごらず、さらに仲間も頼る……。誇りよりも結果を優先するその在あり様ようは、ヴァルキリアギルディと同じ。戦闘のプロフェッショナルだ!!

「名な残ごり惜おしいが仕方ない。究極のツインテール属性……もらい受ける!!」

「私はこっちの邪教徒を成敗しーちゃおっと」

　メデューサギルディ、カトブレパギルディの瞳ひとみが、勝利を確信したように妖あやしく輝く。

　駄目だ──このままじゃ、ツインテール属性を奪われる!!

「そうはさせませんよ、メデューサギルディ!!」

　メデューサギルディたちの背後から響く、凛り々りしい声。

「私は世界をわたる復ふく讐しゆう者、仮面ツインテール……(怒いかり)!!」

　今日のマスクは赤色で、怒りを表現しているのか。

　だけど来ちゃ駄目だ、こいつらは危険すぎる……!!

「馬脚を現しましたね！　妹を守るだのとご大層なお題目を並べようと、しょせんあなたたちエレメリアンは人間の心奪う怪物！　ハナから理想の兄などになれはしないのです!!」

　仮面ツインテールの糾きゆう弾だんに、メデューサギルディは寂しそうに自じ嘲ちようする。それでも、動じてはいない。精神を乱

して魔ま眼がんを解除してしまった、初戦の経験を活いかしているのだろう。

「レッド！　左腕に属性力エレメーラを集中してください！　テイルブレスオルターを発動すれば、その呪じゅ縛ばくを破れるはずです!!」

　そうだ、左腕に装着したこのテイルブレスオルターには、属性力エレメーラの増幅効果があるとトゥアールは言っていた。それぞれが進化装備エヴオルブアームズを手にしなければいけない強化形態と違って、初めから装備しているこれなら、束縛されたままでも力を底上げできるはず！

　すぐ様左腕に意識を集中したものの、明らかに挙動がおかしかった。

「ッ……ぐ……!!」

　切れかけた電球のような断続的な発光の後、激しい震動が俺の左腕に襲おそい来る。

「うわあああああああああっ……!!」

　とうとうブレスは激しいスパークを起こして俺の左腕を弾はじき、弧を描いて吹き飛んだ。

「開発してもらった装備が……初めて、失敗した……!?」

　俺は首もろくに動かせないままに、地面に転がったブレスを見た。

　ブレスが放電を始めた、次の瞬間。大爆発が起こり、辺り一面に土煙が立ち込める。

　煙が晴れる頃ころ……アスファルトには、深々とクレーターが形成されていた。

　粉々だ。もう、影も形も残っていない……。

「あ、あ……」

　へたり込む仮面ツインテール。

「嘘うそです、いくら失敗作でもこんな大爆発が起きるなんて……！　も、もしレッドの腕から外れていなかったら……。私は、何てことを……!!」

　さすがのトゥアールも、目の前の光景を信じられずに激しく動揺している。

『――惜しいところまでいったんじゃない？　あなたの研究』

　戦場に響く新たな女性の声に、俺は真っ先に反応した。メデューサギルディの背後に突とつ如じよとして現れた、白衣をまとったような出いで立ちのエレメリアンを見て、その名を叫ぶ。

「マ……マーメイドギルディ!!」

　忘れもしない……自分の研究のために多くのエレメリアンを翻ほん弄ろうした、悪魔の科学者だ!!

「この、無駄に胸デカいエレメリアンが……!?」

「アルティメギルーの科学者……」

「そして……アルティメギルーの邪悪……!!」

　ブルー、イエロー、そしてブラックが、それぞれ動けぬままに新たな危機を警戒する。

「すっかり有名人ね。そう―私は世界をわたる探求者、マーメイドギルディよ」

　仮面ツインテールの口上を皮肉るかのように名乗り上げる科学者。

「何だ。お前も結局、仮面ツインテールを妹にしたくなったということか？」

　メデューサギルディは口でこそマーメイドギルディの登場を歓迎しているが、その挙動に用心しているのがわかる。仲間みんなに疑われてるのか、この科学者は。

「そうね、姉妹の契りでも何でも構わないわ。私、あなたとじっくり話がしたくなったの。自身の属性力エレメーラを捨ててテイルギ

アなる装そう甲こうを開発した後方支援者……仮面ツインテールさん」

「！　な、何な故ぜ私のことを……!!」

　そうか……トゥアールはドラグギルディやティラノギルディといった強敵たちの前では、自身の背景まで語り聞かせて魂たましいをぶつけてきた。だがその戦いで散っていったあいつらは、ヴァルキリアギルディの力で復活し、ネオアルティメギルとして残存部隊に合流した。

　仮面ツインテールの……トゥアールの情報は、もうかなりの精度で侵攻軍に共有されてしまっているんだ!!

「さっきのあのブレスレット……。新しいテイルギアを作りたくても肝心の核コアがない……だから、擬似的に属性力エレメーラを生成して代替品として使おうとした……ってところでしょ？」

　間近で見たわけでもないのに、マーメイドギルディはテイルブレスオルターの設計思想を看かん破ぱしてしまっている。失敗のショックも相まって、仮面ツインテールはいつもの調子でエレメリアンをあしらうことができずにいた。

「隠さなくていいわよ。優れた科学者なら、そこに辿たどり着くのは当然だもの。夢よね、自分で好きなように属性力エレメーラを生み出すのは──究極のツインテール、みたいに」

　動けない俺へと、値踏みするような視線を投げてくるマーメイドギルディ。

「あ、ち、違……わ、私は、そんな……!!」

　仮面ツインテールは言葉すら上う手まく紡つむげず、頭かぶりを振ってか細く否定の意思だけを示す。

「──妹にほど遠き女め狐ぎつねよ。これ以上その耳障ざわりな戯ざれ言ごとを続けるなら、会員情報破棄アカバンされると思え。俺は一人の兄として、最高の妹と幸せな時間を過ごしているんだが？」

「まあ待ってよメデューサギルディ君、これは組織のためにもなる話し合いなんだから」

　苛いら立だつメデューサギルディをやり過ごし、マーメイドギルディは続ける。

「私と手を組まない？　仮面ツインテールちゃん」

「……な……!?」

　学生が友人を遊びに誘うような当然さでなされた、恐ろしい提案。

　仮面ツインテールは元より、その場にいる俺たち全員が言葉を失う。

「大方あなたも、自分の研究に限界を感じ始めてるんでしょう？　私もそうなの……同じ天才同士、悩みも同じはずよ。新しい刺激が必要なのよ、私たちには」

　へたり込んだまま後あと退ずさる仮面ツインテールへ、マーメイドギルディはさらに歩み寄る。

「自分の科学の進歩のために、自分のツインテール属性を捨て去る合理的な判断ができるあなたですもの。私の提案がどれだけ魅力的なものか、理解できるわよね？」

「——合理的、だとっ……」

　瞬間。俺の右腕が、大気に火花を散らす。

　絡みついている鎖を、無理矢理に砕いていく感覚だ。

「……仮面ツインテールは……ツインテール属性を捨てたんじゃない、俺たちに託してくれたんだ！　お前たちアルティメギルの脅威から、世界を守るために……!!」

　全身の激痛と引き替えに、俺の身体からだは魔ま眼がんの呪じゆ縛ばくを剥はぎ落としていく。

「それを、合理的だと!?　自分の大好きなものをあえて失う……それがどれほど悲しいことだったか……どれほど勇気のいることだったか！　お前にはわからないだろう!!」

　俺のテイルギアが、熱く脈動する。そこに籠こもった魂たましい

を、心を代弁するかのように。

「俺の……ツインテールは……！　怒りだッッ!!」

　初めて、純然たる感情をツインテールの理ことわりと変え、俺は灼しやく熱ねつの炎を吹き上げた。

「おお!?　魔眼の呪縛を打ち破っただと!?」

　魔眼の呪のろいを砕き輝く俺のツインテールに、メデューサギルディが目を見開いて驚く。

　だが俺の怒りは魔眼の術者ではなく、その後ろに悠々と立つ科学者へと向けられた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

　拳こぶしに炎をまとわせて疾しつ駆くし、マーメイドギルディの身体へと叩たたき込む。

「ひぃっ……!!」

　為なす術すべも無く被弾し、地面を転がっていくマーメイドギルディ。

「わらわも一度体験しておる……レッドはどれほど強固な封印で閉じこめようと、仲間の心を傷つけられれば猛烈な怒りを力と変えて打ち破ってくる。熱い戦士じゃ!!」

　懐かしさで自然と口角を上げるブラック。カトブレパギルディは、囃はやし立てるようににヒュー、と口笛を吹いた。

「あ、あたたた……ナイス腹パン……。ちょっと煽あおりすぎちゃったわね、反省……」

　激情の凝縮した一撃だったとはいえ、パンチ一発で大ダメージだなんて……こいつ──

「私、戦闘力は一般兵程度しかないの。肉体労働はメデューサギルディ君たちにお任せ～」

　俺の困惑を読んだかのように、マーメイドギルディはあっさりと

白旗を上げる。

「じゃあねー、この戦いを乗り切れたらまた会いましょ、ツインテイルズのみんなー♪　……それと、私の言ったこと……よーく考えておいてね？　仮面ツインテールちゃん」

　例によってそのまま、脱だつ兎との如ごとく転送ゲートに中に身を躍らせた。

　カトブレパギルディは、塩でも撒まきかねないほど嫌そうな顔をでそれを見送る。

「ししょー、なーんか私、アポロギルディの狙ねらいわかっちったんだけどー。私らでツインテイルズ追いつめて、マーメイドギルディをああやってはしゃがせるためっしょー？」

「言うな。妹のお願いとあらば笑顔で遂行するのがお兄ちゃんの務めだ。何より……どんな邪魔が入ろうとも、我われらの兄きよう妹だい喧げん嘩かは決着を見ねばならない。そうだな、テイルレッド！　兄の抱ほう擁ようを解くほどやんちゃな妹ならば……何度でもこの魔ま眼がんで見つめるだけだ!!」

　そうはさせるか──これ以上、俺のツインテールは歩みを止めはしない!!

「ツインテイルオン!!」

　自由になった左腕にツインテイルブレスを顕けん現げんさせ、究極の炎を総身にまとう。

　アルティメットチェインへの進化で迸ほとばしった爆炎が、メデューサギルディの視線を遮さえぎった。この炎が暗幕の役目を果たしている間に……奴やつの魔眼を、完かん璧ぺきに粉砕する!!

「テイルレガリア──────────ッ!!」

　召喚したテイルレガリアを、即座にブレイザーブレイドへと合体。

　初めて自分の心に打ち克った輝光の理ことわりが、テイルカリバーに眩まばゆい輝きを溢あふれさせる。

「テイルカリバー！　輝光装填ブリリアントモード!!」

　フォースリヴォンに触れ、もう一刀のブレイザーブレイドを引き抜く。

「みんな、目を瞑つむれっ!!」

　俺は仲間に素早く伝達すると、右にテイルカリバー、左にブレイザーブレイド──魂たましいの二刀を頭上でクロスさせ、ツインテールの閃せん光こうを放射した。

「くっ……おおおおおおおおおお、俺の魔眼がっ!!」

　能力の起点となる眼め、そのものを眩くらまされ、悶もん絶ぜつするメデューサギルディ。

　ブルーたちは次々と呪じゅ縛ばくから解き放たれ、同じ轍てつを踏まないよう散開した。

「この二体の能力は、ハマると脅威だ！　一体ずつに分断して戦うぞ!!」

　俺の言葉に、ブラックも続く。

「よし！　このシスコンはわらわとレッド、妹っ娘こコンビで葬り去る！　お前はイエローと共にカトブレパギルディを討つのじゃ、非妹!!」

「非じゃないわよ本職よ！　その分け方なら普通、あたしとレッドでしょ!?」

　ブルーは反論するも、自分がカトブレパギルディと戦うことに異論はないようだ。

　俺は消沈している仮面ツインテールへと歩み寄り、そっと仮面に触れた。

　この手の温ぬくもりが、仮面越しに髪の毛に届くと信じて。

「あいつらが何か言ったら、俺が言い返してやる。あいつらが何かしようとしたら、俺が守る。何度だってな。だから君は……自分の心を信じてくれ。誰だれにも否定させはしない」

「……レッド……」

　マーメイドギルディ。お前の科学なんて、断じて必要ない。

　お前たちアルティメギルが侵略に利用しようとした心の輝きを、トゥアールが自分の科学で正義の力に変えた……それが俺たちのまとうテイルギアだ。

　その力──今こそ見せてやるぞ!!

◇

　レッドとブラックの戦いを背に臨のぞみながら、イエローは黄金の首輪を手にした。

「絶対服従首輪アブソリュートリング！」

　攻撃を止められるというのならば、止めることができなくなるまで撃ち続ける。最強形態アブソリュートチェインへと変身し、まずはイエローがカトブレパギルディへと猛進する。

　その間にブルーは、立ち尽くしている仮面ツインテールの肩を叩たたいた。

「いい加減、無茶して戦場にやって来たりしないで。死の二菱ダー・イノ・ランヴアスとの決戦の時みたいに……あんたが泣くところ、もう見たくないのよ」

　ブルーの不安は杞憂だった。仮面ツインテールにはもう、慰なぐさめの言葉など必要ない。

「……泣きませんよ。我慢します。泣くと、ごついストーカーが追っかけてきますから……」

「ごついストーカー？」

　ブルーは想像できないだろう。黒いマントをたなびかせる、百ゆ合りの帝王のことを。

「確かに、あんな科学者なんて気にしてられませんよね。今この世界の平和を脅おびやかす、目の前の敵を倒さなければ。後は任せました、テイルブルー!!」

「オッケー!!」

　トゥアールを傷つけられた怒りの爆発は、いつも総そう二じに先んじられる──。

　総二へ、そしてトゥアールへ。それぞれへの甘やかな嫉しつ妬との痛みを胸に感じながら、ブルーは飛ひ翔しようした。

　空中でエターナルパッドを装着、着地を待たずにエターナルチェインへと変身し、カトブレパギルディへと拳こぶしを見舞う。

「っと……！」

　慌あわてて魔ま眼がんを向けながら、その拳を回避するカトブレパギルディ。

「拳これはあんたには止められないでしょ!?　迫ってるのは無機物じゃない、熱の籠こもった生物のカラダなんだから!!」

「どうかなぁ!?　あなたのまとっているその鎧よろいは生命じゃない、完全静止は無理でも多少の弱体化はしてるっしょ!!」

　確かに、拳足が鈍い。ブルーは、粘度の高い液体の中でもがいているような、激しい抵抗に囚われていた。無論、その程度で今のブルーは怯ひるみはしない。

「絶対脱衣形態アブソリユートブラストモード───!!」

　静止されるのも構わず、イエローはがむしゃらに全身武装を撃ちまくった。

　ミサイルが、バルカンが、レーザーが、陽電子砲の光帯が、色とりどりの軌跡を宙に残しながら発射され、そして次々と静止していく。

　その間ブルーも、空から降り注ぐ雨粒全てを躱かわすかのような超人的な運足でイエローの弾撃を回避。カトブレパギルディへ、少しずつ、確実に攻撃をヒットさせていった。

「やっぱりね。あんたは、自分の眼めで視たものしか静止できない！」

「視るっていうのは、生き物にとってもっとも容た易やすい動作よっ!?　あなたたちがどれだけ私の死角から攻撃しようとしたって、私がそれを視認する方が確実に速いしっ!!」

「じゃあ競争してみる!?」

　そしてついに、カトブレパギルディの周囲全てが静止したイエローの爆撃で覆おおい尽くされたその時。ブルーとイエローは勝機を頷うなずき合い、属性玉変換機構エレメリーションを発動させた。

「属性玉エレメーラオーブ――巨乳属性ラージバスト!!」

「属性玉エレメーラオーブ―貧乳属性スモールバスト！　涎属性スロバー！　頬属性パフ！　体操服属性ブルマッ!!」

　巨乳属性ラージバストと貧乳属性スモールバストの同時発動により、弾性を持った防御壁を発動するブルーとイエローの合体技、リフレクション・バースト。それはエターナルチェインの属性玉エレメーラオーブ複数同時発動でさらに他属性を重ね掛けすることにより、ブルーとイエローとカトブレパギルディをまるごと包むドーム状の大きさにまで極大化した。

「「リフレクション・ギガバースト!!」」

　なんとブルーは、防御膜の結界内に閉じこめたイエローの爆撃を―殴なぐり、蹴けり始めた。

　当然、カトブレパギルディはそれを視る。再静止する。そしてブルーが殴る―。

　目まぐるしく繰り返される停止と再始動の中で、カトブレパギルディの瞳ひとみは徐々に光を取りこぼし始める。見み逃のがされた弾丸は防御膜に激突・反射し、加速。別の弾丸をビリヤードのブレイクショットのように弾はじき、それが周囲に拡散していく。

　僅わずかなひび割れで決壊するダムのように、趨すう勢せいは決した。

　もはや神ですら、乱舞する極彩色の攻撃軌道を予測することはできない。

「ひっ……ああああああああああああああっ!!」

　乱反射する絶対脱衣形態アブソリュートブラストモードの爆撃を総身に浴び、苦く悶もんの声を上げるカトブレパギルディ。

「完全解放ブレイクレリーズ！　エクストリーム…………ウェ——イブッ!!」

　ひるんだ隙すきを見み逃のがさず、ブルーは必殺の槍そう撃げきを撃ち放っていた。

「！　と……止まれ……止まれえええええええええええええ!!」

　瞳ひとみに最後の力を集中させ、自身の身体からだに槍やりが直撃した瞬間、何とか静止が間に合った。無機物を—武装を投とう擲てきする必殺技という特性上、これは避けられぬ運命だった。

　しかし。ツインテイルズにはただ一人、己を肉弾と化して必殺の一撃を放ち続けてきた戦士がいる。

「今よ！　イエローーッ!!」

　ブルーが合図する時にはすでに、イエローは背に超合身巨大砲スーパーユナイトウエポンの雷光を背負っていた。

「コズミック！　ジャッジメント————————ッ!!」

　未いまだ勢い死なず力をほとばしらせ続けているウェイブランスエクシードの柄え尻じりに、静止叶かなわぬ生身の蹴しゅう撃げきを重ねるイエロー。

　ついに二人の必殺技が、石化の悪魔を貫いた。

「こんな、ことなら……この世界の弟クン、たくさん探しておくんだった……なぁ……!!」

　怠たい惰だが招いた敗因に苦笑しながら、カトブレパギルディは潔いさぎよい爆発と消えた。

◇

「ブラック、行くぞ！」

　攻防の間かん隙げきにブルーたちの勝利を確認し、俺もブラックと呼吸を合わせる。

　俺は無軌道な回避運動でメデューサギルディのチラ見を躱かわしながら、距離を詰めていった。

「いい眼めだ、テイルレッド……俺の方が痺しびれてしまいそうだぞ。甘えたくてたまらん!!」

「お前、妹を甘やかしたいのか甘えたいのか、どっちなんだよ!!」

「馬ば鹿かめ！　妹を甘やかすだけの兄など三流、ノーマル会員よ！　ゴールド会員たる真の兄は、特典として妹に目一杯甘やかしてもらえるのだ!!」

　メデューサギルディは両手の人差し指を俺に突きつけ、そう言い放った。

　しかもよく見ると両手ともフレミングの法則の形なのが、地味にイラっとする……!!

「魅力的な兄を前にしては、妹も甘やかさずにはいられない……俺はそんな兄だ!!」

「なんて論理の飛躍だ……！」

　だが──今の俺のツインテールに、甘えはないぞ!!

　テイルカリバーとブレイザーブレイド。

　力強く手にしたままの二本の剣を、大上段に構える。

「グランドクロスブレイザー────────────ッ!!」

　不死鳥との戦いで体得した炎の二刀斬ぎりを、メデューサギル

ディへと叩たたき込む。

「ぬぐぐ……なんのお！」

……耐えきった……タフさも怪物だな、こいつは!!

「お前が怒りでツインテールを高めたように！　お前が猛たければ猛るほど、俺もまた大いに高まる！　妹であるお前を見れば見るほど、俺は遥はるかに限りなく強さを増すのだ!!」

「望むところだ！　その高まりを、俺のツインテールはさらに超えてみせる!!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお可か愛わいい!!」

猛る感情のままに、魔ま眼がんで俺を凝視──いわば魔眼見まガンみしてくる。

しかし、浅い。俺が睨にらみ返すと、メデューサギルディは明らかに視線を僅わずかに逸そらした。

「お前さては……女の子に正面から見返されることに慣れていないな!!」

「ひ、ひどい……僅かな視線の揺れで見破ったな、俺の純情ピュアを……!!」

「チラ見の積み重ねで能力発動できるようになったのは、必要に迫られてのことだったってわけか！　神話の怪物も、完かん璧ぺきじゃないってことだな!!」

追撃を任せようとブラックを窺うかがうと……ぽかんとして立ち尽くしていた。

「……はっ、いかん、あの熱さについていかねばならんのに、いつも一歩引いてしまう!!」

「無理はあかんで、ブラックちゃん!!」

気を取り直すように爆走機形態メガネストライカーに変形したメガ・ネで疾走、強烈な体当たりをお見舞いするブラック。

「ぐあああああああああああああっ……!!」

　そのままの勢いでバイクごと天高くジャンプ。

「メガ・ネ！　インフィニットコンバインじゃ!!」

　空中でインフィニティチェインへの合体を完了すると、大気に波紋を残して飛ひ翔しようした。メデューサギルディが視線を向ける頃ころには、視界から消え去っている。

　ブラックの誇る超絶機動が、メデューサギルディを幻惑した。

「ちょこまかと元気なことだ……！　テイルブラック……先ほどの妹宣言、口先ばかりのものでないか、試してやるぞ!!」

「よかろう、メデューサギルディ！　貴様が魔の眼めならば、わらわは神の眼鏡めがね！　今度は貴様がじっくり見られる番じゃ、セラフィックインフィニットの幻たちにな!!」

　ブラックの神眼鏡ゴッドめがねから放たれた∞型の光輪が、メデューサギルディを包み込んだ。

『フフフお兄ちゃん』

『遊んでよう』

　実体化した幻覚──黒光りしたマッチョな男たちが輪になってメデューサギルディを取り囲み、じわじわと輪を縮めながら近づいていく。

「グワーッ、声も野太いしマッチョだしそもそも男だし、何だこの雑な幻覚は───っ!!」

「口先ばかりなのは貴様の方だったようじゃな！　妹の多様性を説いておきながら、このザマよ！　ちょっとくらいむさい妹でも、見事受け容いれてみせぬか!!」

　いや、さすがに俺もこれに関してはメデューサギルディのリアクションの方が……。

「ぐぬう、この兄あんちゃんどもでは、お兄ちゃんになるのも妹になるのもキャンセル必至だ!!」

　迫り来るマッチョの幻覚を、気力で消し飛ばすメデューサギルディ。

「今じゃ、レッド！　完全解放ブレイクレリーズッ!!」

「今か!?」

　タイミングを逸するような光景だったが……とにかく、メデューサギルディがひるんだ!!

「インフィニットバニッシャ──────────ッ!!」

　無限の黒矢が発射された瞬間、ブラックはインフィニティチェインの装そう甲こうをイジェクト。

　即座に再合体させたメガ・ネを戦闘機形態メガネウインガーに変形させ、自らはコックピットに搭乗。俺を機体前面に立たせて飛び立った。

「完全解放ブレイクレリーズ！　テイルカリバー究極装填アルティメットモード!!」

　発射すべき黄金光波を刃やいばにまとわせたまま、俺はメガ・ネに乗って突とつ貫かんする。

　メデューサギルディへと先だって放っていた渾こん身しんの一いつ矢しが命中し、身体からだに無限の刻印が刻まれる。それを目掛け──テイルカリバーを振りかぶった。

「ファイナルブレイザ─────────────ッ!!」

　黄金の斬裂で上下に別たれた∞の刻印は───二つのツインテールの形を描く。

「ぐあああああああああああああああああああああっ!!」

　呪のろいの魔ま眼がんはついに、ツインテールの信念の前に砕け散った。

◇

地面に倒れ伏し、全身から放電しながら……メデューサギルディは、こみ上げるように笑い出した。

「いやあ、強い強い……お兄ちゃんの負けだよ、テイルレッド」

兄きよう妹だいのじゃれ合いでわざと負けてあげるお兄ちゃんのようにそう言うのは、こいつの意地なんだろうか。

「それでもアポロギルディたんのお願いを聞かず、最初から全力でお前たちに戦いを挑んでいれば……勝負は違ったかもしれん。未練だな……」

カトブレパギルディも口にしてたな、アポロギルディって奴やつのことを……。やっぱりこいつらは、命令──作戦行動で、あんな中途半端な侵攻に甘んじていたのか。

「……しかし、未練といえば……仮面ツインテール。お前、擬似的にツインテール属性を造ろうとしていたのか。とんでもないことをするお茶目さんだ」

先ほどのマーメイドギルディの話を聞いて、メデューサギルディはトゥアールの目的を知ったのだろう。

「俺も勝手気ままに様々な異世界を流れ、多くの妹を愛めでてきたが……ツインテール属性を失い未練を感じている女など、初めて見たよ」

仮面の奥で、はっと息を呑のむ仮面ツインテール。

属性力エレメーラを失うということは、心の輝きが失われること。未練……悔しさや悲しさを懐いだいていることが、トゥアールの苦しみであり……しかし、希望でもあるのだ。

「その未練が財産になるかもしれんな、仮面ツインテールよ。永久ポイントだ──」

世話焼きの兄は最後に、妹を励まそうとしたのだろうか。

魔ま眼がんを閉じたメデューサギルディは、その妹への撫なで方のような穏やかさで爆散した。

　久々の苦戦だったが、何とか切り抜けることができたな……。

「ありがとう、トゥアールが来てくれなかったら全滅していたよ」

「いいえ、私の方こそ、失敗作を渡してレッドを危険な目に遭わせてしまいました……」

　紙一重の戦いだった。これからの神の一剣ゴー・デイア・ソードとの戦いに向けて、気を引き締めなきゃな。

「うー、唯ゆ乃のが来てくれなかったのじゃ……」

　ブラックは、ついに現れなかった救援に不満を零こぼしている。

　さりげなくイースナが焼き鳥ではなく唯乃と呼んでいることに気づき、微ほほ笑えましくなる。

「総そう二じ様から教えてもらった結いわ翼ばね唯乃の番号に、電話したんですけど……出ませんでした」

　トゥアールもここに来る前に働きかけてくれていたようだが、唯乃の奴やつは普段何してるか全然わからないからなあ。

「彼女のテイルギアに、こちらとの通信機能を付けておけばよかったですね……まあ絶対触らせないでしょうけど」

　繫つながらなかったのなら、今回は俺たちの力で乗り越えなければいけない戦いだった。そういうことなんだろう。

「俺たちが本当に唯乃の力を必要とする時は、きっと駆けつけてくれるさ。今までだってそうだったんだから」

　そして仮面ツインテールが気にしたのは、その唯乃も危き惧ぐしていた科学者だった。

「噂通りとんでもない悪女でしたね、マーメイドギルディは。私がここまで脅威を感じた女は、愛あい香かさん以外ではあいつが初めてです。胸囲は愛香さんと比べ物にならなかったですが」

　脅威を感じられたというブルーは、飛びかかろうとするのを堪こらえていた。

仮面を外し、吹っ切れたように清すが々すがしい顔を見せるトゥアール。

「あんなエセ科学者に好きなように言われっぱなしじゃ終われません、次はもっとすごい発明をして、あいつらをあっと言わせてやります!!」

彼女の前向きさに、救われた気持ちになる。

これでよかったのかも知れない。正直、俺はまだ疑似属性力オルタエレメーラの研究に不安があるからな。

トゥアールは笑顔になると、それをたなびく俺のツインテールに向けた。

「嬉うれしかったです、レッド。私のために怒ってくれて。それだけで、私は幸せです──」

最近ずっと複雑そうに俺たちのツインテールを見ていたけれど……やっと、いつものトゥアールの笑顔に戻ったような気がする。

だからだろうか、サービスなんて言うのも烏滸がましいが……俺のこの喜びを、トゥアールに伝えてあげたくなった。

「……今日もありがとう！　トゥアールお姉ちゃん！」

いつかの起きがけにトゥアールがやったみたいに、頑張って妹を演じてみる。精一杯の笑顔でそう言いながら、俺はトゥアールの手を握った。

「……なーんて……」

さすがに恥ずかしくてすぐに手を離したが、時すでに遅し。

「ああああああああああああ皆さん例の勝負ここで決着でちゅうううううううううううううう!!」

俺の迂う闊かつな行動でトゥアールの眼めが血走り、新たな魔ま眼がんと化してしまった。

「レッドの時は無効よ！　ったく、ちょっと見直せばすぐこれなん

だからっ!!」

　そしてブルーは新たに爆誕した魔物を止めるべく、サービス残業に取りかかるのだった。

◇

　神秘をも灼やく魂こん魄ぱくの炎剣が、首領の間を二つに裂さいた。

　宇宙の凝縮体と評されし空間が朱の線で別たれた様は、恒星の超新星爆発を遠目に見るような圧巻の光景だった。

　これまで多くの幹部エレメリアンたちを畏い怖ふさせてきた玉座は、聖布ヴエールごと消滅している。

　目撃者のいないこの戦いは、アルティメギルという組織の歴史に刻まれる一大事となったことだろう。

「空間ごとブッた斬ぎっちまったか……」

　空間の裂け目を見つめながら、周囲に燻くすぶっている火炎でポニーテールを揺らすテイルフェニックス。

　これが、脱出の突破口となるかもしれない。

　一度退路を塞ふさがれれば、脱出不可能……無限迷図であるこの首領の間も、こうして空間を斬り裂くことはできる。

　多少のリスクはあるが、空間が裂ければそこを出口にできるではないか。

　空間の裂さけ目に近づこうとしたテイルフェニックスは、裂け目から飛び出した強烈な閃せん光こうに思わず腕で顔を庇かばった。

　視界が遮さえぎられた、僅わずかな一瞬。

　それまで確かに消滅していたはずの悪しき気配が──再び胎動を始めた。

「重ねて讃たたえる。見事なり、テイルフェニックス」

　聞こえるはずのない声で賞賛を受け、激しく動揺する。

「ッ……な……!?」

「言葉に偽いつわり無し。余が貴様を封印した彼かの日よりも、遥はるかに力を増した。よくぞそこまで属性力エレメーラを……ポニーテールを育はぐくんだ」

　閃光が止やむと同時。テイルフェニックスの眼前には、変わらぬ首領の姿があった。

「待った甲か斐いがあった……。これほど昂こう揚ようするのは初めてやも知れぬ。願わくば、長く長く愉たのしみたいものだ」

　空間に亀裂を入れるほどの超斬ざん撃げきが直撃しながら、その整った顔立ちには一条の切り傷さえ刻まれていなかった。

　無論、冷たくたなびく髪の毛には文字通り毛ほどの傷みすら見て取れない。

「無傷……だとォ!?」

「いいや、多少は傷んだ。余の核コアに一撃を届かせたのは、貴様が初めてである」

　身体からだへ視線を落とす首領。聖装ドレスはボロボロになり、ところどころ肌が露あらわになっている。

　首から上は美しき少女、その下は人間の輪郭をなぞっただけの〝ただのパーツ〟だ。

　衣服を剥はいだマネキンでさえ、これほど無機質な見た目はしていないだろう。

「だがてめえの気配は確かに一度、完全に消滅した……まさか、俺様と同じく再生能力を持ってるってのか!?」

勝利したと安あん堵どする相手に復活を以もつて驚きよう愕がくを与えるのは、不死鳥の戦士たる自分の十八番だった。

フェニックスギルディは初めて、不死身の厄介さをその身で体験しているのだ。

「消滅も再生もしておらぬ。死に辿たどり着けぬ生命いのちが、再誕を果たせぬは道理」

賞賛を終えた首領の双そう眸ぼうが、妖あやしい紅の輝きを放つ。

「じゃあ、てめえの気配がさっぱり消えちまったのは……」

「単に貴様がこの空間そのものを斬きり裂いた余波で、数世界ほど彼方かなたまで足を滑らせただけのこと。なかなかに愉快な体験であったぞ」

さすがに、別世界に転移した気配まで察知することはできない。

絡から繰くりが知れれば大した謎なぞではなかったが……動かざる事実として、首領はテイルフェニックスの攻撃でほとんどダメージを受けていないのだ。

「素直に白状するのはいいがよ、どっちが先にくたばるかの我慢比べなら、俺様のもっとも得意とするところだぜ!!」

仕切り直しとばかり、属性力エレメーラの炎を立ち昇らせるテイルフェニックス。

何度死のうとそれ以上に蘇よみがえる、不滅の存在。

一度たりとも死すことのない、無敵の存在。

ともに不死者である二人だが、その性質は明らかに違う。

この戦いに決着を見るとすれば、不死性の差異が鍵かぎを握るだろう。

そして、確実に不利なのは──

(もってくれよ……俺様のテイルギア……!)

放電というシグナルで明確な不調を訴え始めたギアを、強きよう靭じんな意志力で押さえ込むテイルフェニックス。

フェニックスギルディそのものは不死身でも、不完全な試作機であるテイルギアＴＹＰＥ-Ｐの稼働時間は、有限。根性で強引にねじ伏せて使役しているだけで、本来ならばもっと早くに限界を迎えるはずなのだ。

テイルフェニックスへの変身を維持できなくなった時点で、結いわ翼ばね唯ゆ乃のの敗北は色濃くなってしまう。我慢比べをするには困難な状況だ。

……しかし。

「貴様は格別に余を愉たのしませてくれた。返礼は手て篤あつくせねばなるまいな」

今は辛うじて保たれている戦力の均衡を、首領はあえて一気に破ろうとしていた。

「まだ誰だれにも見せたことのない、余の真の力を明かそう。アルティメギルの極致を刮かつ目もくせよ、叛逆の戦士」

「ハッ、カーテンの奥が女の子でビックリの次は、上乗せで最終闘体にでもなるってか!?　往生際が悪わりィな、首領さんよ!!」

首領の大口に対し、フェニックスは相変わらず人のことを言えない軽口で応おうじる。

「最終闘体にはならぬ。何な故ぜならば、今のこの姿こそが余の終着であることに変わりはないからだ」

むしろ、そうであって欲しい。ツインテールの女神に憧あこがれたといいながら、ツインテールにできずにいる小物が……自身が追い続けてきた怨敵の正体だとは思いたくないからだ。

「貴様との決定的な違いは、余は姿を変えるほどに強さを増すのではないということだ。強大すぎる自身の力を持て余し、この女神の貌かおで自らを戒いましめていただけのこと」

本来なら、このように魂たましいを応酬するような会話はフェニックスギルディの好むところだ。

　しかしその出元がテイルレッドに似た姿をしていることで、途端に嫌悪感に塗まみれ、返す軽口も少なくなっていく。

　フェニックスラッシューターで周囲に炎を振り散らして斬きりかかるも、距離半ばにしてテイルフェニックスの脚は地に縫ぬい止められてしまった。

「……なんだこれは……周りの光が……吸い込まれてく⁉」

　首領の間に星のように輝いていた光は、その全てが首領の身体からだへと吸い込まれていった。

「この空間こそ、余の力そのものだからだ。一個の宇宙として分散させねば、とても余の力は抑え込めぬ」

「大おお袈げ裟さに抜かしやがって……‼」

　輝きは血流となり、首領のシルエットを変化させていく。

「我わが封印を今──完全に解き放つ」

　周囲の閃せん光こうが消え去り、より宇宙へと近づいた。

　しかしそれと入れ替わりで、新たな恒星が出現する。

　ついにその全ぜん貌ぼうを現した首領。

　フェニックスはとうとう、許容量を超える驚きよう愕がくを受けて後あと退ずさってしまっていた。

「その姿は……エレメリアン……人間……どっちだ……⁉」

　アルティメギル首領。

　封印に封印を重ね、最後に明かされたその真の姿は──

「────我が名は、テイルギルディ。原初にして至高のエレメリアンである」

光の、人間だった。

眩まばゆい閃光は全てを包み、目も口も鼻もない。光の下にあるのは鎧よろいか、衣服か。輝いている状態が常なのか。あるいはあの光の中に、エレメリアンと同じ肉体が存在しているのか。

女性のような線の細さも見て取れるが、かといって男性の力強さがないわけでもない。

ただ――ツインテールだということしか、認識できない。

その姿はエレメリアンでありながら、しかし、人間。

おぞましいほどに矛む盾じゅんを内包した、全く未知の生命体が、確かにそこに在あった。

エレメリアンは、人間の心――属性力エレメーラから誕生する。

動物であったり、植物であったり……空想上の神獣や神に至るまで、人間が知りうるあらゆる「人間以外」の生命体がモチーフになり、活性体シルエットと呼ばれる肉体が構成されるのは、そのためだ。

しかし、それら別の生物が人間の形を持って具現化しはしても、ヒト、それそのものが活性体シルエットとなった存在は有り得ない。

エレメリアンにとっての本当の神は、神話に名を連ねる聖者たちではない。創造主である、人間なのだから。

つまり……ヒトのカタチを為なして生まれた存在こそが、〝エレメリアンの神〟――。

「……光の……ツインテール……!?」

光の生命体……光のツインテール、と呼称すべきか。

唯ゆ乃のは知しる由よしもないが……その姿は、二度にたび総そう二じが遭遇した己の中のツインテールの化身――それが、完全な人型となったような姿だった。

「美しかろう。これが……完成されたツインテールだ」

「お前からはツインテール属性を全く感じねえ！　それなのに、ツインテールのエレメリアンだと……!?　ふざけるのもいい加減にしやがれ!!」

　ときめくほどに熱いツインテールを持った少年と、何度も戦ってきた唯乃だ。

　目の前のツインテールは、ツインテールを真ま似ねただけのまやかしだと断言できる。

　負けられない。歪いびつな愛を完成と嘯うそぶく、このエレメリアンにだけは……絶対に負けるわけにはいかない。

「もう二度と、まとえなくなってもいい……！　今、この戦いだけだ！　これが全てなんだ！　限界を超えてくれ、相棒!!」

　フェニックスギルディの真の強さは、不死性などではない。

　どのエレメリアンよりも激しく燃やし続けた属性力エレメーラ──その熱き心だ。

「ポニーテールは世界を繋つなぐ架け橋！　太陽の戦士──〝テイルフェニックス〟！　見参!!」



　魂たましいをほとばしらせるように叫ぶ、炎の戦士。

　多くの異世界を巡ってきた。

　ツインテールに振り回される世界の運命を変えるため。

　アルティメギルに抗あらがう人々の、心の強さを知るため。

　正義の炎を燃やし続けてきた。

　その旅も、今日、この戦いで──終わる。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

　刎もつ体たいをつけて顕けん現げんしていながら、首領はテイルフェニックスの攻撃に次々と打ちのめされていく。まるで棒立ちだ。隠し続けた切り札は、本来の力を発揮し得ないことがままある。秘ひ匿とくするがあまり、実戦で使い慣れていないからだ。

　覚かく醒せい直後で力を振るうことに首領が不慣れな、今こそが勝機。

「いける……！　ピカピカ仰ぎよう々ぎようしく光ってる割りには、強さはさっきと大して変わりやしねえじゃねえか!!」

　目の前で、首領がゆっくりを歩を進めたのが見えた瞬間。

「ッ……ぐ……!?」

　テイルフェニックスは、ダメージすらも感じられぬ間に膝ひざをついていた。

「おっと……少し速く動き過ぎてしまったか」

　求め、結び続け、やがて結んだツインテールをも置き去りにした。

　歩速は風を超え、音を超え、ついには光速ひかりへと届く。

　首領のツインテールは、速度の埒らち外がいをたなびいていた。

「こ、光速……!?」

「言ったであろう。あまりに強大すぎる力を、この余自身持て余しておるとな」

　光速のツインテールが、この空間を支配する。一瞬の光としか、攻撃を知覚できない。

　テイルフェニックスはマフラーを振り乱して防御を試みるが、全ての物理法則に先んじて乱舞する光に、対処できるはずもない。僅わずかに、しかし確実に被弾していく。

「見えぬなら見えぬままに識しるがいい。お前は女神を模した余の姿を見て、紛まがいと断じたが……結ばぬことで完成するツインテールもある」

「なん……だとぉ!?」

「貴様の言うとおり、余のツインテール力は〇ゼロ……ツインテール属性は持たぬ。──いや、捨て去ったと言うべきか」

　ツインテール属性を捨てたと嘯うそぶきながら、ツインテールとして存在する首領。

　理解の許容を遥はるかに超えた怪異に、テイルフェニックスは戦せん慄りつする。

「ゆえに余のツインテールこそが、全異世界全次元においてもっとも強く美しいのだ」

　見えないが故ゆえに……無いが故に、最強だと断じる首領。まさに今の状況、そのものだ。

　見ることはできないが、強大なツインテールは確かに存在している。

　それでは先ほどのソーラの姿の首領は……ツインテールにしていないのに、あれでツインテールだったとでもいうのか──!?

「貴様は今、見えぬだけでツインテールの只ただ中なかにいる。これぞまさしく、結び所を見失ったツインテールの宇宙……ツインテール星雲ネビユラ!!」

　瞬間。周囲の空間そのものが、ツインテールと化した。

　右を向いても左を向いても、どこもかしこもがツインテールに見える。

　ツインテールそのものに取り込まれたような錯覚さえ覚えた。

「なんだ、こりゃあ……!?」

　ツインテールという愛らしき髪型が邪悪を帯おび、牙きばを剥むいて襲おそいかかってくる。

　猛烈な勢いで剣を振るい、迎撃を試みるテイルフェニックス。

「ツインテールなのか……それとも、ツインテールじゃねえのか!?」

　もはや──ツインテールとは何なのか。

　根源の疑問が、剣の冴さえを鈍らせる。

　僅わずかにひるんだが最後、要撃の手数は襲撃の総数に屈伏した。

「ぐっ……ああああああああああああああ!!」

　乱舞する無数の光条に、為なす術すべ無く翻ほん弄ろうされるテイルフェニックス。

　手てつ甲こうが、ブーツが、翼が──全身の装そう甲こうが間断無く被弾し、貫かれてゆく。

　無敵を誇ってきたテイルギアＴＹＰＥ-Ｐが、無惨に砕けていった。

「く、う……」

　悪魔の光が止やむ頃ころには、テイルフェニックスはとうとう力尽きてしまう。

　テイルギアＴＹＰＥ-Ｐを維持できなくなり、変身が解けてしまった。

　地に膝ひざをつくポニーテールの少女を、傲ごう然ぜんと見下ろす首領。

「憐あわれなり、不死鳥。人に近づきすぎなければ……貴様はもっと強くなれたはずだ」

「……憐れなのは……どっちだ……。完全だの不完全だの、結ばねえだの捨てただの……。自己陶酔でツインテールを哲学して、本当の良さを見失いやがって……」

　満まん身しん創そう痍いによろめきながらも、唯ゆ乃のは力を振り絞って立ち上がる。

「俺様は……テイルレッドたちに逢あえて、やっと一番のポニーテールに辿たどり着けた……！　ポニーテールを見てもらう嬉うれしさを知った……！　最ッ高に満足した生を送れたぜ──」

　炎を宿した双そう眸ぼうだけが、ツインテイルズの証したる不屈を叫んでいた。

「てめえはこの寂しい神殿で独り、永久にいじけて引きこもってな」

「……うむ。当分はそうなりそうだ。貴様がここで消える故ゆえな……」

　すでにツインテールとして完全解放ブレイクレリーズしてしまった生命いのちは、必殺の閃せん光こうすら呼吸も同然に発動する。首領は、天を掴つかむかのごとく右腕を掲げた。

「光あれ、ポニーテールよ。これぞ我わが神技──テイルエクステイション」

　宇宙の始まりを告げるように、小さく、淡い光が灯ともる。

　瞬間──その場の全てが。

　原子さえもが、鼓動を止めた。

「うあああああああああああああああああ……!!」

　そして唯ゆ乃のは、大いなる光に呑のみ込まれた。

　天も地も、彼方かなたも、時間も、あらゆる存在を許さないそれは──滅びの超次元。

「貴様に与えるのは死ではない――〝無〟だ。一房の輝きよ、零ゼロへと果てよ」

　愛を捨て去った完全生命の内面、〝無〟そのものだった。

　不死という概念すらも、その無の中へと消えていく。

　悲願の復ふく讐しゆうを遂げられず滅びる、その瞬間。

　しかし唯乃は、確かに笑っていた。

（ちっくしょー、心配して損そんしたぜ。こいつ、大したことねえじゃねーか）

　首領を底知れぬ闇やみと認識し、光の心を持つ者と相対させることを危き惧ぐしていた、その実。

　その闇は、ただ広いだけで底は浅かった。

　安心した。彼はこの巨悪に立ち向かえる。愛を乱されず、正義の戦いに臨のぞめる。

　これほどツインテールへの愛と対極に生きる存在に。

　ここまでツインテールをただの道具と驕おごり、邪悪に振るう存在に。

　誰だれよりも正しくツインテールを愛するあの少年が、負けるはずがない。

（総そう二じ……。いつかこいつに見せてやれよ、お前のツインテールを……）

　世界と世界をポニーテールという名の架け橋で繫つなぎ続けた、太陽の戦士。

　不死鳥フェニックスギルディは、満足げな笑顔とともに消えていった。

エピローグ　太陽のポニーテール。

　メデューサギルディとの戦いの後。トゥアールは地下基地で一人、その戦闘映像を見ながら思案に耽ふけっていた。

　これ以上落ち込んでいては、総そう二じや愛あい香かたちに気苦労をかけるだけだ。その一心で、あの時は精一杯強がってみせたが……やはり、擬似的にすらツインテール属性を生み出せなかったという事実は、トゥアールを激しく動揺させていた。

「……今回ばかりはいけると思ったんですけど……現実は甘くないですね……」

　結末を覆くつがえせるのは──奇跡を起こせるのは、属性力こころを持つ者の特権。

　科学力だけでは……予定どおり、数式どおりの結果しか出ないのだ。

「私はもう……総二様たちの力になることはできないんでしょうか……」

『研究の限界を感じているんでしょう』──。敵の忌いま忌いましい言葉が、頭から離れない。

　思えばレッドが強化形態を手にし始めた時から、トゥアールの焦しよう燥そうは始まっていた。

　科学でしか力になれないのに、仲間の成長に自分の科学力ではもうついていけない。

　新しい装備を何一つ造ってあげられず、一念発起した今回も失敗に終わってしまった。

　ツインテールは……自分には、二度と手の届かない存在なのだ──。

「……ああもう、やめやめ！　こんなんじゃ、また総二様に心配かけちゃいます!!」

頬ほおを叩たたいてしゃんとすると、トゥアールは戦闘映像を最初から見始める。

「ッ──!?」

レッドの勇ましさと可か愛わいさに癒されていたトゥアールの眼めが、驚きよう愕がくに見開かれた。

見間違えであってほしいと焦あせりながら、録画映像をテイルブレスオルターが自壊した場面まで戻し、今度はコマ送りで再生し直した。

「……あ……あ…………」

しかしそこに映し出されたのは、残酷な真実だった。

テイルブレスオルターが大爆発して砕け散る、その直前。ブレスの背後に小さな転送ゲートが出現し、中からエレメリアンの腕が伸びてきたのだ。見覚えのある細腕が。

その手はテイルブレスオルターを掴つかむと、速すみやかにゲートの中へと引っ込んでいった。

人為的に演出された大爆発で──真相は闇やみの中へと葬られた。あの科学者はこんな大胆な簒さん奪だつを難なくこなした後、何食わぬ顔で自分たちの前に現れたのだ……。

「───テイルブレスオルターが……私の技術が、マーメイドギルディに奪われた……」

仲間のいない孤独な基地内に……戦おののき震ふるえるトゥアールの声が、か細く響きわたった。

◇

夢を見ている。

今日もまた俺は、仄ほのかな光に照らされる宇宙空間のような闇

やみの中にいた。

　しかし……光の導く先で待っていたのは、幼い双子姫ではなかった。

「よっ、総そう二じ！」

　手を挙げて俺を迎えたのは……ポニーテールの少女、結いわ翼ばね唯ゆ乃のだ。

「唯乃……お前も夢通信ができたのか？」

「ん？　なんだそりゃ？　そんなんじゃねーぞ。お前に会いに来ただけさ！」

　いや、夢の中でそれをするのが夢通信じゃないのか……？

　だけど唯乃が今着ているのは、返してもらったはずの陽よう月げつ学園高等部の女子制服だ。

　そして俺も、陽月学園の制服を着ている。

　夢通信は眠っている姿がトレースされるはずだから、やはりこれは別の何かなのだろうか。

「それで、どうしたんだ？　わざわざ夢の中に会いに来るなんて」

　俺が尋ねると、唯乃は恥ずかしそうに頭を掻かいた。

「いやぁ～、実は俺様、首領と戦やり合ったんだけどよ……また負けちまった!!」

「そうか……」

　あまりにもあっさりと言われたので、理解するまでに数瞬を擁した。

「……って、ちょっと待て!!」

　やがてその事実の重大さに気づいた俺は、血相を変えて唯乃に詰め寄る。

「何一人で突っ走ってんだよ!?　仲間になって、一緒に戦うって

言っただろ!?」

　よりによって、一番力を合わせて戦うべき首領相手にスタンドプレーを！

「だからだよ。過去の憂うれいを取っ払って、真っ新な心になんなきゃ……お前らの仲間になんてなれねえだろうが」

　……文句を言ったって仕方がないか。こういう奴やつなんだ。

　俺との勝負といい、心の澱おりは出し切らないと気が済まない。やると決めたことはやる。

　それがこいつのいいところでもあり、たまに悪い所でもあるんだが。

「とにかく、また封印とかされなくてよかったよ。不死身のお前にとっちゃ、それだけが唯一負ける可能性だもんな」

　唯乃は身体からだを伸ばして深く息をつき、疲労のほどを窺うかがわせる。

「ああ、疲れたー。悪いな、しばらく休むことにするわ、俺様！」

「そっか……やっぱ相当強いんだな、首領って」

　こいつがこんなにしんどそうにするなんて……一筋縄ではいかなそうだ。

「あー、それだけどよ！　大丈夫大丈夫、多分お前なら勝てるぜ！」

　俺の心を覆おおいかけた不安を振り払うかのような大笑。

　唯ゆ乃のは俺の肩を叩たたくと、澄み切った瞳ひとみで見つめてきた。

「……ツインテールへの愛を忘れんな。それだけでお前は無敵になれんだからよ、総そう二じ」

「それで無敵になれるなら……もう無敵だな、俺」

　満足げに頷うなずくと、唯乃はもう片方の手も俺の肩に置き、意

味ありげに眼めを細めた。

「お前と俺様とのバトルの決着は、俺様が多少譲歩したんだからよ。サービスで、俺様の願いの方も叶かなえてもらうぜ、総二」

「願いって――」

　俺が聞き終わるより先に。言葉は、柔らかな温ぬくもりによって遮さえぎられた。

　また、不意打ちだ。

　いつだって不意打ちを仕掛けてきた天衣無縫な少女は、願いの通りにキスをしてきた。

　塞ふさがれた視界から垣間かいま見みえるのは―ほんの少しの背伸びで、揺れたポニーテールだけ。

　幾度と繰り広げた炎の戦いの結実としては、唇くちびるに伝わる熱はあまりにも優しい。

　俺から顔を離した唯乃は、まるで別人のようにしおらしく、瞳を濡ぬらしていた。

「すっげー気持ちいいな、キスって」

「唯乃、俺は……」

　俺の言葉を遮るように、眼前に指を突きつける唯乃。

「めんどくせーことは言いっこなしだぜ……俺様がしたいからしたんだ。俺様、何でも興味あっからよ!!」

　真まっ直すぐに生きるこいつは、どこまでも眩まぶしくて……キスをされたという衝撃の事実すら、その輝きの前では薄れてしまうようだった。

「エレメリアンに生まれてよかったぜ。最初から人間に生まれてたら……こうして幸せを一つ一つ見つけてくことなんて、ぜってーできなかっただろうからな」

　そうか……こいつは、エレメリアンとして生まれたことに幸せを

感じている。

　人間として生きろなんていう俺の言葉は、余計なことだったんだな。

　エレメリアンとして、人間の楽しさを知りながら生きる。それが、フェニックスギルディの何よりの幸せなんだ。

「じゃあな、総二！」

「ああ。身体からだ治して帰って来いよ、唯乃。お前は俺たちの仲間──テイルフェニックスなんだからな!!」

　唯乃はいつものように大おお仰ぎようなポーズもせず、後ろ手に組んで振り返った。

　光の中で、ポニーテールが柔らかく揺れる。

『───好きだぜ』

　ごく普通の女の子のように、優しい微ほほ笑えみを浮かべ……唯ゆ乃のは光の中に消えていった。

　……そして、俺は。

　いつの間にか、ベッドの上で跳ね起きていた。

　何かを引き留とめようとするように、虚空へと右腕を伸ばしながら。

「……唯乃……」

　唇くちびるに指を触れる。まだ、温ぬくもりが残っているような気がした。

　夢通信でないとは本人が言っていたが、俺が見ただけの単なる夢だったとも思えない。

　マイペースな奴やつだよ。いつだって、好きな時にやって来て、

満足するとしばらくいなくなるんだ。

　あんなこと言っておいて、数日後にはまた通学路で待ち伏せでもしてるかもな。

「あいつが帰ってくるまでに、母さんからコーヒーの淹いれ方でも習っておこうかな」

　ベッドから下り、カーテンを開ける。

　いい日差しだ。冬の寒さに負けず、太陽が燦さん々さんと輝いている。

　まるで──唯乃のポニーテールみたいに。



あとツインテールがき

　皆様こんにちは、水みず沢さわ夢ゆめです。前のシーンの直後これでは余韻がなさ過ぎるので一旦閉じてください！　……こういう時、できればあとがきはなしにしたいのですが……。

　さて青森県は、今年も雪の季節がやって来ました。季節ネタは書いていて楽しいのと同時に、確実に時の流れを実感するのが少し寂しくもあります。

　現在の日アサ特撮だと九月～十月スタートか、一月～二月スタートでの一年間が基本ですが、この物語は四月、高校の入学式にスタートしました。

　そして今、一月まで来たのです。……決戦は近いですね。

　トゥアールはディザスター映画などが好みのようですが、僕は特撮好きで当然怪獣映画も大好きですので、洋画だとモンスターパニック映画もよく観ます。巨大だったりたくさんだったりな虫や動物や魚やサメ（独立カテゴリ）が痛快に暴れ回るのを観るのは楽しいですね！

　現実のサメ映画は、常に我われ々われの予想の遥はるか上をゆく。今はまだないようですが、俺ツイが完結する頃ころには、ツインテール・シャークという作品が本当に世に出ているかもしれない……。

（※房じゃなく頭が二つなシャークはとっくにあるどころか、今や型落ちレベルです）

　今回も、イラストの春日かすが様や担当の濱はま田だ様、完成と出版に携たずさわる全ての方、そして読者の皆様に、感謝とツインテールを！

水沢　夢

Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家。健康診断で引っかかる項目が毎年違うので、もっと健康に気をつけようと思います。そこそこ運動してるんだけど、どうしてだろうなあ……（主食のフライドポテトを手に取りながら）

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。14

２０１７年12月28日　電子書籍版発行

著　者　水沢　夢

発行人　立川義剛

編集人　野村敦司

編　集　濱田廣幸

発行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

底　本　２０１７年12月24日　初版第１刷発行

©YUME MIZUSAWA 2017　ISBN978-4-09-451711-8

※製品版の巻末についている『ガ報』の情報は底本発行日時点のものです。


GAGAGA BUNKO
DECEMBER
2017
ガ報
GAHO
No.128
10th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!
ガガガ文庫
12月刊
絶賛発売中!!!
年忘れでガガガっちゃおう!!
今年ガんばった人も、来年からガんばる人も、
ツインテールとポニーテールが繋がる時——
定価:本体611円+税
著者コメント
いよいよ初期からの因縁や秘密が明かされ始める14巻、ヒロインたちの晴れ着とともにお楽しみください!!
年末年始と冬休みを満喫する総二たちの前に現れた結翼唯乃。
テイルレッドとの決着を望む唯乃に対して、総二は何とかして彼女と仲間になろうと考えを巡らせるが……。
ツインテールとポニーテール、今こそ絆を繋ぐ時!
[俺、ツインテールになります。14]
著:水沢 夢 イラスト:春日 歩


今回も魔術オタクと死体女子をよろしくお願いします。書いてて気づいた……作者は墓が好きすぎる!
著者コメント
定価:本体593円+税
北方の守護者。
神の使徒。悪魔の子ら。
オスカーの行方を求め、ダヤンが訪れたのは、教会によって魔術師が弾圧されている北の街。しかし、街の教会では奇妙な毒が蔓延する事件が起きているようで……。忘却の果てに垣間見る、魂と契約の物語第二集。
[忘却のアイズオルガン2]
著:宮野美嘉 イラスト:薫る石



これがギギギ文庫の日常、だよっ♪
定価:本体574円+税
川田桃香は新人ラノベ編集者。
ドSなロリ編集長にいじめられながら、
私たち今日もがんばりますっ!
グチと笑いがとまらない、
ギギギ文庫編集(美少女)たちの
お仕事るぽラノベ登場!
一緒にギギギっちゃお♪
[編集長殺し]
著:川岸殴魚 イラスト:クロ
著者コメント
幼女編集長と美少女編集者たちがキャッキャウフフ、ウーンウーン、うわぁあん、帰りたーい! するお話だよ。


その魔法、最強につき——
この世界にはない「文字」をイメージし、
想像力で様々な事象を
「造り変える」ことができる最強魔法。
世界の理を超える魔法&知識で、
妹と幼馴染みと、世界を救う??
チート&テキトー魔法師の無自覚冒険譚!
[無名の最強魔法師]
著:なつめ猫 イラスト:ゆーげん
定価:本体1,200円+税
著者コメント
ファンタジー小説でお兄ちゃん好きな妹がいたら?と思い執筆していたところ、ひどいヤンデレ妹になっていました。妹が大好きな人には必読な本ですよ


捏造? 願望? 事実は小説より奇なり?
2018年 ガガガ文庫「妄想」ニュース!!
目前に迫った2018年。来年のガガガ文庫はいったいどうなっているのか? そんなことは誰にも分からない! だから何を言っても自由ってことです!! 信じるか信じないかはあなた次第! 嘘から出る真実もあるかも? 「妄想」ニュースを発表!! 責任は持ちません!
妹さえいればいい。
ゲーム化で世界初の「妹VR」(R15)登場! 「妹の入った風呂の残り湯」も完全再現!
著者コメント
妹VR発売決定おめでとうございます! すごく嬉しいですありがとうございます! 妹の風呂の残り湯を飲める日を楽しみにしています!(平坂 読)
されど罪人は竜と踊る
ハリウッド映画化! ガユス役には永遠の眼鏡キャラ、あのハ○ーポッターのラドクリフ君が!?
著者コメント
ガユス役はモーガン・フリーマン、ギギナ役はダニー・トレホ、監督はウォシャウスキー姉妹(元兄弟)と心中で決定していないので誤報です。(A井ラボ)
七星のスバル
伝説のコミック『北○の拳』がコラボ!? 『北斗七星のスバル拳』爆誕! ケンが旭姫に「お前はもう死んでいる」って… それはダメ!!
著者コメント
コラボとかマジ!! ……え、嘘? 嘘とは読めなかった! この田尾の目をもってしても!! 馬の田尾 一生の不覚!!(田尾典丈)
月とライカと吸血姫
NASAとのコラボ企画進行! がしかし… トランプ大統領が舞台がソ連であることに難色! 3巻の舞台はアメリカをモデルとした連合王国編に!?
著者コメント
はい、アメリカを舞台にした理由は大統領説得のため……ンなわけないです。長らくお待たせしてすみませんが、来年は楽しみなことがある予感がしますので、炭酸水を飲みつつお待ちください。(牧野圭祐)
物理的に孤立している俺の高校生活
物理の参考書ランキングに間違ってランクインし続けた結果、本当に参考書シリーズ化が進行中! 内容は… 友達作りの参考書!?
著者コメント
物理については学べませんが、現在、中高生で人間関係で悩んでる人、かつて中高生だった人には役立つ本になっております! ガチで高校時代ぼっちだった著者がおぞましい過去を思い出しながら書いております!(森田季節)
出会ってひと突きで絶頂除霊!
某有名メーカーS●Dから公式実写化オファー! AVとラノベ、奇跡のメディアミックスを達成。
著者コメント
ほんとに実現しないかなぁ。絶対撮影見学イクのに……。公式AVが無理なら「シコって一秒で絶頂オナホ!」みたいなパロオナホとかどうですかね。捨てるの忍びないので繰り返し使えるタイプでひとつ。(赤城大空)
弱キャラ友崎くん
まさかの魚人化スピンオフ始動! タイトルは「鰯キャラ友崎くん」! 「鰯キャラの俺が鮫キャラのアイツに!?」弱肉強食の壁を破れるか!
著者コメント
僕のだけ妄想の規模が小さいのは気のせいでしょうか。なぜ他はビッグコラボなのに僕は魚人化なのでしょうか。作中の「死んだ魚のような目」というワードは「目が死んでる」になるのでしょうか。僕にはわかりません。(屋久ユウキ)
妄想ニュース、いかがでしたか? こんな企画にコメントを寄せてくださった著者の先生方、大変申し訳ありませんでした。来年もガガガ文庫をよろしくお願いいたします!
イラスト/カントク、ざいん、ぶーた、かれい、Mika Pikazo、魔太郎、フライ

GAGAGA headline

ガガガ文庫作品は「本」を飛び出し原作とは異なる魅力を発信中! このコーナーはガガガのメディアミックスニュースを毎月ご紹介!

イベント コミックマーケット93

冬コミケグッズ情報!

今年もコミケ出展します! ガガガグッズ盛りだくさん!!

期間:12月29〜31日、場所:国際展示場 西1階、企業ブース1412に全員集合だヨ!

TVアニメも絶賛放送中の「妹さえ」グッズはもちろん、「俺ガイル」「され竜」グッズ、そして年末に相応しい福袋もご用意しております!

妹さえいればいい。

新作 プリマグラフィ



コミケ会場限定! カントク先生描き下ろしの複製原画!! カントク先生の直筆サイン&シリアルナンバー入り!

予価:25,000円

- 新作 妹さえ福袋 予価:3,000円
- 新作 クリアファイル 予価:350円
- キャンバスアート 予価:12,000円
- Tシャツ 予価:3,000円

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。

- 新作 プリマグラフィ 予価:25,000円
- 新作 俺ガイル福袋 予価:3,000円
- キャンバスアート 予価:12,000円
- Tシャツ 予価:3,000円
- トートバッグ 予価:1,200円
- クリアファイル 予価:350円

されど罪人は竜と踊る

- 新作 され竜福袋 予価:3,000円
- キャンバスアート 予価:12,000円
- Tシャツ 予価:3,000円
- クリアファイル 予価:350円

弱キャラ友崎くん クリアファイル 予価:350円

その他 新作 ガガガ福袋 予価:2,000円

※各グッズは売り切れる場合がございますのでご注意ください。また各グッズのくわしい情報は今後のガガガ文庫公式HPにて発表します。

※グッズは制作中のものです。

このラノ 「このライトノベルがすごい!2018」(宝島社)今年もガガガ作品が多数ランクイン!



「月とライカと吸血姫」4位(新作3位)



「弱キャラ友崎くん」7位



「妹さえいればいい。」10位



「やがて恋するヴィヴィ・レイン」11位(新作5位)



「篭底のエルピス」17位



「平浦ファミリズム」22位(新作8位)



「友人キャラは大変ですか?」28位(新作10位)

TVアニメ 妹さえいればいい。

白川 京フィギュアついに予約受付開始!



バンダイビジュアルクラブ、コトブキヤショップでは限定特典として表情替えパーツが付属! 2018年6月発売予定!!

※画像は試作品です。実際の商品とは異なる場合がございます。

Blu-ray BOX上巻 2018.1.26発売!

原作者、平坂先生書き下ろしのドラマCDほか、キャラソンCD、ラジオCDなど圧倒的大ボリュームでお届け♪

特典情報公開!

【仕様】●キャラクター原案・カントク描き下ろしBOXイラスト●キャラクターデザイン・木野下澄江描き下ろしインナーイラスト【特典】●キャラクターソングCD ソロ3曲&各off vocal ver.1.「スキデスダイスキアイシテマス」歌:可児那由多(CV.金元寿子)2.「未来へのコンパス」歌:白川 京(CV.加隈亜衣)3.「第六感のミストレス」歌:大野アシュリー(CV.沼倉愛美)●ドラマCD「お見舞いオールヒロイン」原作者・平坂読書き下ろしシナリオによるバイノーラル録音オーディオドラマ●ラジオCD「妹と加隈亜衣と藤田 茜とラジオさえあればいい。」出張版●エンドカードコレクション(6枚)●特製ブックレット【音声特典】●キャストオーディオコメンタリー「裕介さえいればいい。」第3話:小林裕介、代永 翼/第4話:小林裕介、沼倉愛美【映像特典】●オリジナルTwitterアニメその①「千尋さえいればいい。」その②「那由多さえいればいい。」その③「京さえいればいい。」BD-BOX限定「土岐さえいればいい。」●祝・妹の日!最速先行上映会 ダイジェスト映像●第1話・第2話・第6話ノンテロップエンディングver.●ノンテロップオープニング●ノンテロップエンディング●第4話ノンテロップエンディング ※特典・仕様は予告なく変更になる場合がございます。

コミカライズ されど罪人は竜と踊る

「され竜 輪舞」第2集が1/18発売決定!!



「サンデーうぇぶり」にて好評連載中の『されど罪人は竜と踊る 輪舞』第2集が発売決定! 発売日は、「され竜 オルケストラ」と同日の1/18です!

原作:浅井ラボ 作画:ミトガワワタル
キャラクター原案:宮城/ざいん

コミカライズ 弱キャラ友崎くん

コミカライズ連載開始!



月刊ガンガンJOKER1月号(スクウェア・エニックス刊、12/22発売)にて「弱キャラ友崎くん」のコミカライズが連載スタート! 漫画を手がけるのは実力派の千田衛人先生。原作もおかげさまで絶好調、大人気人生攻略ラブコメの勢いは止まらない!

漫画/千田衛人

新聞連載 友人キャラは大変ですか?

読売中高生新聞にて、連載小説掲載開始予定!!

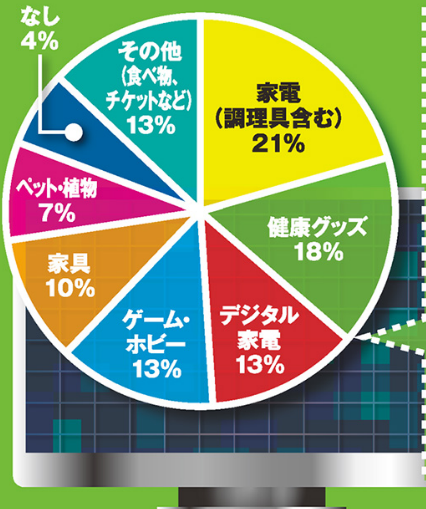


著/伊達 康
イラスト/紅緒

ここガ知りたい! ガガガ特捜部

欲しい物はいろいろあるけど、本当に買って良かったって思える物って結構少ないですよね。子どもの頃は手に入れるだけで夢が叶ったような物もあったけど……。サンタは今年ボクのところに来てくれるかなぁ〜。今回の質問はこちら。

質問 最近、布団乾燥機を買って生活が変わりました! 先生の「買ってよかったもの」を教えてください! （埼玉県・元気くん・24歳）



●天津 向先生☞足湯器具。末端冷え症なのですごく助かります! 足の裏もすべすべになります! 匂いも取れます! 最高です!

●遍 柳一先生☞新しいランニングシューズを買いました。最近のは足に負担がかからないよう色々工夫がなされてててすごい満足。これできっと健康に。

●宇津田 晴先生☞オーブンレンジ。最新式は加熱が早くて嬉しいです。

●水沢 夢先生☞コミック版ロックマンXの名シーンフィギュアです。子供の頃の憧れた漫画だったのだ!

●石川博品先生☞上野動物園の年間パスポートを買ったら、美術館・博物館の帰りにちょっと寄って小獣館のマヌルネコのところに顔を出したりできて人生の幅がひろがりました。

質問募集! 郵便ハガキ、Twitterで先生方に訊いてみたいことを書いて送って下さい。あなたの質問を特捜部が徹底調査致します。

その他の先生方からの回答は、編集部ログ(GAGAGAWIRE)で見られます。

書店員さんとガガガくん

10th GAGAGA ガガガくん

本好きが集うことで有名な書店さんからのオススメ本。ガガガが文庫をプッシュしてくれていつもありガとウ!

今月の書店員さん



ジュンク堂書店池袋本店 田中香織さん

住所:東京都豊島区南池袋2-15-5　電話番号:03-5956-6111　営業時間:平日10:00~23:00／日祝10:00~22:00　定休日:1/1　URL:https://honto.jp/store/detail_1570019_14HB320.html

新刊だけでなく既刊もバッチリの品揃えで、平日は夜11時まで営業中。いつでもお待ちしております!

田中さんのオススメ本



［平浦(ひらうら)ファミリズム］

第11回ガガガ大賞受賞作。最近の流行とは一線を画す筆づかいに、心が躍りました。今後も期待しています!



▲ガガガ文庫のオススメラインアップがギュッと詰まった書棚。担当の書店員さんのこだわりを感じるネ!

編集後記

・パナソニックのロティサリーグリル&スモークが欲しいなー!(野)

・腰の次は突然の首痛! 中年編集者に健康なときなどないのだ……。(☆)

・いろいろあって手品を習得中。手先の器用な人って本当にすごい。(濱)

・漢方薬の名前って技名みたいでかっこいい。四逆散(シギャクサン)とか五虎湯(ゴコトウ)とか治打撲一方(ヂダボクイッポウ)とか。(岩)

・世の不条理を笑って許せるくらいの余裕が欲しい。(小)

・浮いた話1つない2017年でしたが、最近ジャベリンとケッコンしました。(田)

編集部への質問もこちら!!

作家・イラストレーターへのファンレター、感想などは以下の宛先に、作者名を明記のうえ、お送りください。

〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館ガガガ文庫編集部○○○(作者名)宛

ガガガ10周年電子特典　カバーイラスト


10th Anniversary
GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!!


10th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!!


10th Anniversary
GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!


10 th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!


10th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!!


10th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!


10th Anniversary
GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!


10th Anniversary
GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!


10th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!


10th Anniversary
GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!